彌十　こりや玄蕃、何とおしやる。

玄蕃　知れた事。日頃、武藝の廣言をしながら、この程、笹山官兵衛との試合ひに、物の見事に打負けた不覺者。遠慮申しつけられたら、自滅すればよいことに、エヽ、腹も切りかねる卑怯者ゆゑ、死やうを教へてやらうと思うて　（ト又かゝるを突廻し）

彌十　イヽヤ、勝負は時の運次第、試合ひに負けたが恥辱とあつて腹切らば、侍ひの人種は盡きる。ちつとも恥とは、思はぬ〳〵。武士の恥は、不忠不義より外には無いワ。

玄蕃　イヽヤ、不忠がある。

彌十　なんと。

玄蕃　大切なお預りの、靈龜の香爐、なぜ失つた。

彌十　ヤ。すりやその儀を

玄蕃　御本家の寶、聞捨てならず。身が今日、お屆けに參り、御前にも疾くより御承知。

彌十　ハッ。（ト俊行を見て平伏し）御前へ申上げまする。申し譯にはござりませねど、先月二十九日、雨風烈しき夜に紛れ、盜賊の入つたるにや、お預りの香爐紛失。お屆け申上げ、御免を受けて切腹とは存じたなれど、お耳に達せぬその中に、ならう儀ならば詮議して、事納めたく存ずれど、遠慮の

身なれば他行も叶はず、心盡しも無下と成つたる今日のお咎め。さりながらこの儀に於ては、他家は元より、外に存ぜし者もなき香爐の紛失。如何いたして玄蕃には、御存じてござつたな。

玄蕃　ヤ。

彌十　サア、根を押し尋ね問ひたいところを、御前を憚り、……この上は寶の詮議、日延べの儀を。

俊行　ヤア、いはれざる願ひ。その身が病中に斯かる珍事。詮議をおのれが手を借り、致さうやつ　われ國主の威勢を以て、暫時が中に尋ね出だすワ。

彌十　然らば拙者めは

俊行　死を以て罪を償ふ今日の刑罪。

彌十　すりや、彌十郎は

俊行　身が手討ち。

皆々　エヽ。（ト惘り）。

玄蕃　コリヤ、さうなければ叶ひますまい。その御意が出る上は、御前のお手を下さるゝまでもない。

皆々　我れ〳〵が　（ト立ちかゝる）。

俊行　イヤ、病中の鬱散。勇氣を試す身が手の内。

皆々　然らば御前が

俊行　其方どもは皆次へ。

皆々　ハッ。

ト管絃になり、玄蕃思ひ入れあつて先に、喜惣太、比良藏、秋之丞、照太郎、附いて奥へ入る。

俊行　高橋彌十郎。

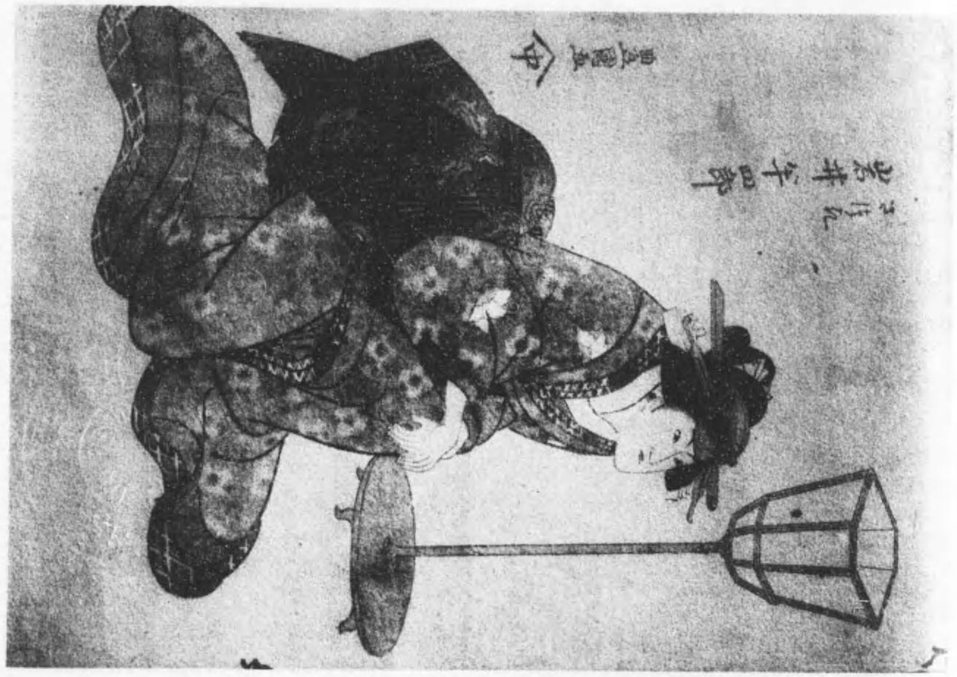
彌十　ハッ。

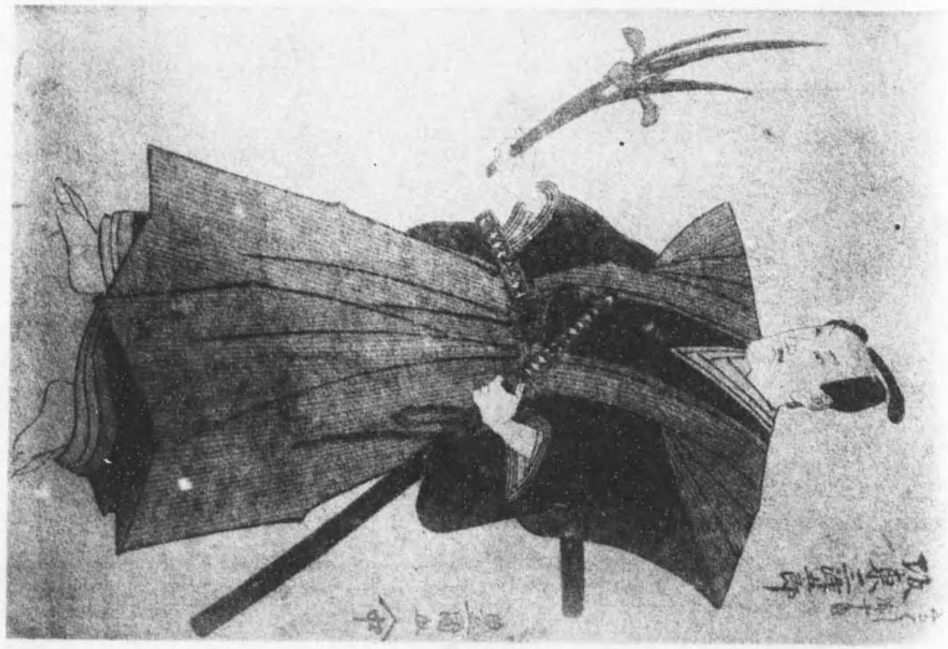
俊行　罪の疑はしきは刑せずといへど、正しく其方は重き罪人。今手にかけて討ち果すが、そちや命が惜しいか。

彌十　こりや、改つた君のお尋ね。生きとし生けるもの、命惜まぬ者がござりませうや。併し、犯せし罪科か、但しは主命、義に依らば命は芥よりも輕し。

俊行　又死は易し。生は難し。

彌十　すりや、今日の其方が命は俗に申す、盗人の暇はあれど、守り人の際を窺ひ、寶を失ひしは眞に天災。





俊行　無成敗と思ふぢやまで。

彌十　イヤ、全く左様には存ぜねど、この身にも大切な

俊行　ヤ。

彌十　サア、願ひもあれど、主と病ひ。

俊行　勝たれぬ事と覺悟して

彌十　イザ、御存分に、御刑罪。（ト合掌して摺寄る。俊行思ひ入れあつて）

俊行　イヤ、その命、助けてくれう。

彌十　ヤ。

俊行　刀を穢すと、近習の者を呼ばざるは、其方に密々、頼みたき一儀あつて。

彌十　ハツ。お頼みとは恐れあり。主從に何の御遠慮。あまさかさまな儀なりとも

俊行　早速承知、先づ滿足。頼みといふは身が病症。其方といふ名醫ならねば、本復致さぬ晝夜の苦しみ。なんと療治いたしてくれまいか。

彌十　して、御前の御病症は

俊行　戀病みぢや。

彌十　エ。（ト思ひ入れ、合ひ方になり）

俊行　サア、加茂川の水、山法師、叶はぬものはそりや昔。今身が威光を以てなさば、雲に棧、水の月も取らんは易けれども、只任せぬは戀の一字。胸を焦し、命も絶ゆる我が迷ひ。なんと晴らさせてくれまいか。

彌十　ムウ。さほど迄に御心を苦しむる、して、その戀ひ人は

ト摺寄る。俊行思ひ入れあつて、前の流れの杜若を一本折つて

俊行　主ある花も、まツこのやうに手折らせい。

彌十　すりや、その

俊行　杜若の

彌十　色香を見する

俊行　皐月雨。

彌十　さては女房

俊行　皐月の闇に迷ふたわやい。

ト此うち後ろの襖をあけ、官兵衛様子を聞き居て

官兵　すりや、殿には

俊行　ヤ。（ト襖ピツシヤリ閉す）。

彌十　イヤ、殿の御病氣、拙者が配劑。

俊行　其方が醫藥を以て

彌十　御本復させませう。

俊行　ムウ。承知いたして身も滿足。さりながら、藥種をつかふ花の一本。

彌十　木折な振りも矯め直す

俊行　花拵へは

彌十　拙者が手際。

俊行　水を揚げるか。

彌十　流れるか。

俊行　手活けに詠めて

彌十　御養生。

俊行　床の間敷かせて、待つて居るぞよ。

ト呟になり、俊行、杜若を彌十郎の前へ抛り、思ひ入れあつて奥へ入る。彌十郎種々思案して居る。
合ひ方彈きつけにて、下座より皐月出て來り、彌十郎を見るより

皐月　ヤア、我が夫、御無事でお出でなさんしたかいなア。(ト縋り泣く)。

彌十　ハテ、仰山な。なぜ其やうに云やるぞ。

皐月　サア。飽きも飽かれもせぬ仲を、あの兄さんの胴慾な。添はする事はならぬと、呼寄せたまゝ内へ留め、思ひ切る思案せいと、毎日云はるゝその悲しさ、逃げて行きたいにも遠慮の身。戸締めとやら、部屋に泣いてばつかり居りましたわいなア

彌十　それに又、御殿へはどうして。

皐月　サア、あんまり心の遣る瀬なさ、あの中間の權内を騙し、送つてもらうて、勤めてゐた折り朋輩の、あの卯の花さん、よもぎさんが、わたしをお前の所へ、返して下さんすやうに云うてもらひたさ、御殿へ上つたところがな。

彌十　上りやつたところが

皐月　折わるう兄さんに逢うて、叱らるゝやら、云はるゝやら、まだそれよりは、モシ、この泉水から文箱を流しましたが、屆きましたかいなア。

彌十　いかにも。縁切つてくれといふ其方が文。ありや、まこと、書いたのか。

皐月　サア、あれには段々譯がござんす。……お預りの靈龜の香爐紛失の事、殿樣のお耳へ入つて、重いお咎めもあらう樣子ゆゑ、ちよつとお知らせ申したいにも、側には兄さん、お前の縁を切る文、文言は仰せ書。仕方がなさに文のとめ

彌十　のしくと書いたでこの身の科の、顯はれた事、承知いたした。

皐月　サア、その事で今お手討ちと御近習の噂、それにマア、いつに變らぬ

彌十　イヤ、お手討ち却つて、御前は上首尾。

皐月　エヽ、そりやマア眞でござりまするかいなア。

彌十　サ、お預りの靈龜の香爐は、一體御機嫌に入らぬ品、よう紛失させたとお喜び。また其方の兄官兵衛と試合ひに負けたも、當時靜謐、弓は袋、太刀は鞘へ收めた世の中、武藝は要らぬ、よう負け居つたとお褒めのお詞。なんと粹殿樣ではないか。

皐月　エヽマア、それが定なら、エヽ、有り難うござります。(ト奥をいろ〳〵拜み)その又有り難い次手、わたしが縁も兄さんの得心するやうに、お願ひ申して下さんすりやよかつた。(トいろ〳〵喜ぶ)。

彌十　ア、何にも知らずに

皐月　エ。

彌十　サ、其方は知らぬが、まだめでたいは、御加增まで下されうとある。

皐月　アノ、御加增まで

彌十　まだ有る。……お屋敷へ葺屋町の芝居を呼んで、家中の者に見せよゝと御意なさる。

皐月　アノ芝居を

彌十　まだ有る。……屋形船を湖水に浮め、家中殘らず涼み遊山に遣はさるゝと御意なさる。

皐月　エヽマア、それ程までに家來を惠む殿樣、有り難いとは云はうか。勿體ないと云はうか。どうして御恩の程が

彌十　送らうと思やるなら、申しつける役目がある。

皐月　アノ、女子のわたしに。

彌十　サ、女子でなければならぬ忠義。

皐月　そりやマア、どういふ

彌十　お伽しやれ。

皐月　アノ、お側の

彌十　イヽヤ、お寢間の

皐月　エヽ。（ト恟り。思ひ入れあり）。アノ、わたしに

彌十　驚くは尤も。この程殿の御病氣は、其方を戀ひやみ。

皐月　エヽ。

彌十　サア、花に准へてお命も、絶ゆるばかりとわりない御諚。得心なせばこの身も安穩。違背に及べば可愛さ餘つて寶の紛失、重き咎めに命まで、召されかねぬ御所存ゆゑ、君を思ふも身の大切。いかにもお伽をさせませうと、二言といはずお請けしたが、なんと其方も

皐月　得心せいでござんすか。

彌十　夫とお主の、爲を思うて。

皐月　イエ〳〵、なんぼ夫とお主の爲ぢやとて、現在お前といふ男のある身に、惚れるといふやうな滅相なお主樣（ト居丈高になるを）

彌十　ヤレ、聲が高いワ。（ト口をふさぎ、あたりを見廻しながら）、サア、道を守る心からは、非道のお主、邪まの殿とも、思やるは尤もぢやが、戀に上下の隔てなく、そこが譬への思案の外。……身共ぢやというて、二世を掛けたる女房に、外の者なら直樣刃傷、刀で返事もしかねゝど、何をいうて

も主の一字。コレ、殿には其方に戀ひ焦れ、お命にも關はる御病氣、それを直すは其方といふ戀の妙藥。

皐月　サア、御病氣のお爲とあらば、この身の生き膽を取られうが、骨を削り、身を裂かれうが、ちつとも厭ひはせぬけれど、それより辛い女子の操を破れとは、あんまりなお主の御諚。

彌十　すりや、これ程に云ひ聞かしても

皐月　この事ばかりは、堪忍して下さんせいなア。

彌十　ウム。（ト思ひ入れ。本調子の合ひ方になり、彌十郎、杜若の葉を取つて前なる池へ流す。皐月思ひ入れ）。コレ見よ、皐月。唐土の貨狄といふ者、柳の一葉水に浮ぶ、流るゝを見て、實にもと思ひそめしより、工みて舟を作るといふ。君は船、臣は水。……サア、その水の心一つで、舟を浮べうと、碎かうと、其方がこの場の返事次第。渡りに舟の忠義と云はすか。情け嵐の不忠と云はすか。

皐月　サア

彌十　船の文字は公にすゝむる。これ程云へどすゝまずば、身が腹切らうか。

皐月　サア

彌十　サア、命の瀬戸、心の楫柄、錨おろして、返事をしやれ。

皐月　ぢやというて

彌十　得心なければ是非に及ばぬ。お請け申せし殿への云ひ譯。さうぢや。（ト一腰を拔かうとする）。

皐月　コレ、待つて下さんせ。

彌十　イヽヤ、退け。（といろ〳〵と揉み合ひ、立廻りあつて）

皐月　モシ。お詞に從ひませう。

彌十　なんと。

皐月　サア、不忠とあるゆゑ、是非に及ばず。

彌十　すりや、得心して、

皐月　お伽申したその上は、所詮お前とモウ……サア、尼法師とも身を變へて、浮世を捨てると覺悟の得心。

彌十　いかにお主の爲ぢやとて、女房に貞女も身も捨てよと

皐月　勸めなさんす心の中。

彌十　承知したがふ其方の心底

皐月　三世のお主

彌十　二世の妻

皐月　くらべて見ればこれ程にも

彌十　忠義ほど世に

皐月　憂きものは

二人　無いわいなう。（トほろりと思ひ入れ。奥にて五つ半の時計鳴る。）

彌十　ありやお夜詰めの引けるお時計。サア〳〵、浮かぬ顔では濟まぬ。涙も拭いて顔直しや。鏡を持つて居やるか。（ト燭臺を持つてくろ）。

皐月　ハイ〳〵。（ト濟まぬ思ひ入れにて、懐中より鏡を出し、顔を直すこなし、いろ〳〵あつて）ア、、尼になれば、鏡もこれが見納め。

彌十　サア、御前にもお待ちかね。浮き〳〵として早うお寢間へ。

皐月　そんなら、モウ

彌十　ひそかに身が召しつれる。よう顔直しやつたか。

皐月　ハイ。

彌十　それ又、涙で白粉が

皐月　なんのこの身にけはひ化粧。

彌十　イヤ、さう云やるな。賣り物には

皐月　エ。

彌十　イヤ、お伽には、花飾れぢや。

ト苦笑ひする。皐月もしいなりとなる。琴唄になり、立ちかねる皐月を、無理に彌十郎手をひいて、

兩人思ひ入れあつて、靜かに下座へ入る。矢張り琴唄にて、この道具を靜かにぶん廻す。

本舞臺、向う一面に平舞臺の金襖、結構なる欄間。上下、袖にて折返し、同じ欄間、金襖。鎧櫃飾りあり。誂への道具、所々に燭臺をともして、眞中に金屏風立てある。右の琴唄にて道具とまる。ト合ひ方にて、下手襖を明けて、あざみ、早百合、よもぎ、以前の形にて、鼻紙臺、莫盆、茶臺、茶碗をのせ、めい〳〵これを持ち出で來り、ひそ〳〵思ひ入れあつて

あざ　早百合どの、殿樣の御病氣は、彌十郎どの、女房、あの皐月どのに戀ひ病みとは、きつい惚れやうぢやないかいの。

早百　それいなア。日頃の堅いお顔も、のろいお顔に見ゆるわいなア。

よも　サア、お主様の事ぢやによつて、皐月どのも得心して、今宵お寢間のお伽とやら。

あざ　あの美しい皐月さんを、殿様が抱いておよると思へば

早百　此方もいつそ

あざ　オヽ、けなる。（ト夢中になる）。

早百　コレ。

ト囁き、思ひ入れあつて、右の道具を屏風の中へ運び、よろしくこなしあつて、上の方の襖を明け、奥へ入る。ト矢張り合ひ方にて、下の方の襖明け、彌十郎、皐月が手を引いて出で來り、皐月ふるへ嬢がる心。彌十郎いろ〳〵と呑みこます思ひ入れにて、なだめる。屏風をそつと明ける。内に結構な夜着、蒲團、この上に俊行公、莫のみ居る。彌十郎ハツと平伏する。

俊行　彌十郎か。

彌十　ハツ。お望みに任せ皐月を

俊行　過分。……休息せい。

ト琴の合ひ方になり、彌十郎、皐月に目くばせしい〳〵　屏風を立て、ホツと思ひ入れ、案じられるこなし様々ある心。思ひ切つてツイと下の方、襖の中へ入る。皐月、屏風が蔭より彌十郎が入るをと

つくと見て、俊行が顔を見てにつこり、いろ〳〵會釋して、トゞ俊行に寄添ふ。俊行思ひの外なるこなしにて

俊行　ハテ、家中の妻と申すのは、無造作なものぢやな。

皐月　サア、此やうに致しましたら、さぞや御前にはおさげすみ。

俊行　イヤ〳〵、苦しうない〳〵。これまで側の女子や妾どもは、兎角打ちとけいでもどかしかつたに。

ト皐月恥かしきこなし。此うち、最前より、上の襖より、官兵衛出て來り、屏風の外にて樣子を立聞いて居る。

俊行　不便な奴の。以後目を掛けて遣はす。望みがあらば何なりと望め。

皐月　サア。（ト云ひかねる）。

俊行　ハテ、遠慮に及ばぬ。疾く申せサ。

皐月　さやうなれば、どうぞお取立て下さりませい。

俊行　夫彌十郎をか。

皐月　イエ、兄官兵衛を

俊行　ヤ。

皐月　サア、義理ある兄と申し、どうぞ人に勝れた立身を
俊行　ムウ。すりや、彌十郎には
皐月　愛想が盡きました。
俊行　アノ、夫に
皐月　盡きまいものか。口では二世といひながら、貞女を破れ、操を缺けと、水臭い、心にふッつり
俊行　さすればいよ〳〵、官兵衛に
皐月　サア、わたしが身は兄次第、兄さへお取立て下さりますれば、お宮仕へも心のまゝ。
俊行　ムウ、取立てゝ遣はさう。家老役に申しつけうか。但し領地を分け、大名に致さうか。
皐月　アモシ、それは兄が心を聞きました上。
俊行　其方が望み次第。何にせい、官兵衛を呼んで　（ト云ふうち）
官兵　イヤ、笹山官兵衛、御前の宿直。（トつか〳〵と出て、平伏する）。
皐月　ヤア、兄さんかいなァ。
官兵　オ、妹。出かした〳〵。最前からの様子、あれにて殘らず承つた。殿のお伽、いかゞと案じたに、夫彌十郎と緣切つても、御奉公申したい詞の端々。それが彼の今流行る、名を取らうより德、

兄の事まで御前へ執成し。忝い〳〵。
皐月　そんならお前も悦んで、あの彌十郎どのと
官兵　夫婦の仲を身共が裂く。
俊行　主の威光で承知は致せど
皐月　主ある身では遠慮がち。
俊行　心遣ひに思うたが
官兵　枕を高くおよらせまする。
俊行　オ、出かす〳〵。彼れに寢間の伽をさすれば、官兵衛は外戚同然。サア、何なりと、望め〳〵。
皐月　サア、そのお願ひの望みは
　　ト皐月、俊行にいやらしくもたれ、官兵衛が顏を見る。官兵衛、いろ〳〵心迷ふ思ひ入れにて
官兵　拙者が立身のお願ひは、勝手の重役、金奉行か。
皐月　右のお役に　（トもたれる、俊行うなづくゆゑ）
官兵　イヤ〳〵。ではない、御用人、御家老（ト皐月こなし、俊行うなづく）。イヤ〳〵、それではあまり慾の深いやうで思し召しも如何。萬石以上樂づとめか。……但し分地を貰うて大名になるか。（ト

此うち、矢張り右の思ひ入れ。官兵衛圖に乘り）イヤ、いつそ一足飛びに、殿には御隱居なされ、御家督を下さりませい。

俊行　イヤモウ、伺なりと望み次第。其方が心任せに取計らひ、家中共へ、異議に及ばぬ墨附き、彌十郎にと認め置いたるに、相手かはつて官兵衛、そちや仕合せ者ぢや。（ト手箱より墨附を出して渡す）。

官兵　このお墨附頂戴の上は

俊行　今より其方は多賀の家督。

皐月　殿様には御隱居。

官兵　ア、、有り難うござりまする。

ト此うち、下手の襖より彌十郎、三方に腹切り刀を載せ、持出てゐる。この時つか〳〵と出て

彌十　御家督の殿、イザすつぱりと、お腹召されい。（ト三方を突きつける。官兵衛惚りして）

官兵　ヤア〳〵。こりや彌十郎、なんで身共は腹切るのだ。

俊行　仔細はそれなる墨附に。

官兵　なんと。（ト官兵衛、墨附を開き）　ナニ〳〵。……「多賀の太守先祖の眞筆、家の一軸紛失の科によつて、切腹申付くるものなり。……管領印。」ヤア、こりやどうだ。

彌十　此たび武將繼目に、諸國の寶お改め。先達て管領當國へお入りあつて、その旨仰せ渡され、吉日を選み、一軸御高覽に入るべきところ

俊行　その一軸は高橋瀨左衛門へ預け置きしが、右瀨左衛門は横死なし、最前見れば眞赤な似せ物。行くへ知れざる菅家の正筆。

彌十　これ卽ち太守の越度。御家督の殿、腹切つて申し譯なされい。

官兵　ヤア、すりや家督になれば腹切らにやならぬか。

俊行　それが隱居へ卽ち孝行。

官兵　イヤ、つい口拍子になつた家督。もう家督は蒔き直しだ。

彌十　イヽヤ、一旦家督と殿の御諚は、金鐵同然。異議に及ばゝ、手を持添へて切らさうか。

官兵　サア、それは

彌十　サア〳〵。なんと。

官兵　アヽコレ、待つた。身に火がついたら云つてしまはう。菅家の一軸は瀨左衛門を手にかけ、分地大學どのが摺替へ取つた。

俊行　それを聞かうばつかり。ソレ。高橋、縛せ。

官兵　ヤア。（ト逃げ出すを、彌十郎引留める。ちよつと立廻り、見事に投げ）

彌十　官兵衛、動くな。（トむごく引据ゑる）。

官兵　ヤア〳〵〳〵、そんならこれも

彌十　オヽ、殿が女房に御執心、管領の指圖も、仕合ひに負けたも皆僞り、落つるところは一軸の、行場を尋ぬる太守の御賢慮。

俊行　御先祖菅公の眞筆は、多賀に於て一の寶。瀬左衛門横死より眞赤な似せ物、時に臨んで右の一軸お改め。南無三寶。この儀露顯に及ぶ時は家の瑕瑾。日延べせんため病氣と稱し、寶の詮議。皐月に戀慕の戀ひ病みも、汝の心を探らんため。

皐月　血は分けねども、義理ある兄。嘘僞りの請合ひも、大事の夫が兄上の、たしかにそれと知れざる敵、云はす爲との事ゆゑに、心に思はぬ拵へ事も、夫大事夫大切と、必ず恨んで下さりまするな。

官兵　すりや、大學どの〻企みのあらまし、身共に云はさう爲であつたか。

俊行　一軸、香爐

彌十　兄の敵も

皐月　それと知れたる大學どの。

官兵　イヽヤ、今のは云ひ誤まり。寶も、敵も

彌十　知らぬとは云はさぬ、證據の密書。（ト一通をさしつける）

官兵　ヤア、その一通まで手に入つたか。もうこの上は

ト拔いて切つてかゝる。彌十郎後ろに飾りある鎧にて受けとめる。烈しき立廻りの中、蓋も取れ、鎧櫃の中へ官兵衛轉げこむ。直に彌十郎蓋をしやんとして、錠を下す。

皐月　これは。

彌十　取逃がさぬ繩目の代り。

俊行　事落着まで、追つての糺明。

皐月　心柄とはいひながら、命ばかりは

彌十　今日の御奉公に替へましても。

俊行　イヽヤ、願ひはまだあらう。

彌十　すりや、拙者が心中を

俊行　察して只今、暇をくれる。

彌十　アノ、願ひの通り

俊行　家門の大學、教へはせぬが、討たずばなるまい。

皐月　そんなら兄上の敵を

彌十　無念とゞまる槍の穂先き。（ト以前の槍の穂先きを出して、口惜しき思ひ入れ）。

俊行　サア、汝が無念を察しやり、我れに敵たふ大學が悪事、火急に面迫いたさぬも、何卒本意を

彌十　サア、本家を窺ふ烏滸の曲者、事荒立てゝは寶破却も計られず。時節を待つて取返し、悪人退治に家を出づれば、三世の縁も、まツかう切つて（ト彌十郎髻を切る）。

皐月　これは。

彌十　家を出づるは出家修行、最早主なき世捨て人。佛門堅固に、兄が迷ひを

皐月　晴らす回向を、どうぞこの身も

彌十　イヽヤ、大事の發心に、むざと女を連れられうか。

俊行　ハテ、佛經にも五者佛身云何、女身女人成佛ありと聞けば、たとへ形は變へずとも、皐月は共に法の道連れ。

彌十　ハツ。君のお許しある上は、彼れめも共に

俊行　サア、法を合はする文字をその儘、合法と法名改め

彌十　三界無住に宿りを極めず

皐月　或ひは巡禮、遍路の境涯。

彌十　身は雲水と

皐月　思しめし

二人　下さりませう。

俊行　オヽ、出かした合法。

二人　我が君様。（ト後ろへ玄蕃、あざみ出て居て）

女蕃　すりや、御主人を

あざ　敵と

二人　ねらふか。（ト彌十郎、皐月へかゝらうとするを、俊行一腰を拔いて、ポン〳〵と切る）

彌十　これは。

俊行　其方達夫婦を手討ちと見せるも、油斷さする手段の死骸。

彌十　何から何まで

女蕃　ところを。（トよろぼひ起きてかゝるを、彌十郎、皐月引きつける）。

俊行　修行者二人へ、寸志の手の内。（ト大小を彌十郎、皐月へ遣る）。

彌十　御報謝たしかに　（ト兩人を斬り倒し、止めをさす）。

俊行　天晴れ見事。

彌十　して、この死骸は

俊行　二人が身替り。

彌十　然らばこの儘。

俊行　堅固で暮らせ。

彌十　我が君樣。

俊行　コリヤ。……死骸は物をハト左右の燭臺を扇にて吹き消す）。

彌十　ハッ。（ト木の頭）。

俊行　云はぬものぢや。

ト思ひ入れ。彌十郎、皐月よろしくこなし。

幕の外、花道の附けぎはへ樋の口を出す。時の鐘にて、右の樋の口より、官兵衞、以前の形、頬冠り

拍子幕

にて、水に濡れて出で來り

官兵　危ない所を鎧櫃の、底をくりあけ、やう〳〵爰まで。ハテ、命冥加なおれだなア。

ト行きかける。樋の口の蔭より菖蒲革の侍ひ一人出て組附き、立廻りあつて、右の樋の口へポンと投込み、時の鐘にて官兵衞向うへ走り入る。あとシャギリ。

（作者　福森喜字助）

四幕目

四條河原の場

役名——手代、傳三。蛇遣ひ。九介。非人、したみ酒の三。同、鍋太。關口多九郎。非人、胡麻八。太平次女房、お道。非人、うんざりお松。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、上の方、蒲鉾の非人小屋。正面筋違に見たる黒塀、忍び返し、しだれたる柳。二階座敷に掛け行燈、下に水茶屋、楊弓場。すべて四條河原の景色。こゝに太平次女房、おみち、前垂れ掛けにて茶を運び居る。よき所に胡麻八、鍋太、手妻の非人にて、蓙の上にいろ〳〵手妻の道具を置き、立ちかゝり、饒舌つて居る。仕出し多勢、床几にかゝり居る。この中に、關口多九郎、編笠

浪人にて袖乞ひの體。傳三道具屋の番頭の拵へ、名酒の德利を持ち見物して居る。辻打にて幕明く。

胡麻　さて昨日天道樣がぢくねましたゆゑ、小屋がしめつて居りますから、今日は爰で御機嫌を取ります。思へば私しは、毎日々々釘や針を食べますが、金佛にもなりませぬてネ。ハヽヽヽ。マア何か一つやらかしませうから、よく出來たら彼の物をナ。……サア、鍋公、やつてくんな。

皆々　サア〳〵。所望ぢや〳〵。

ト　これより鍋太、三味線を取上げ、鍛の合ひ方を彈く。胡麻八、手妻あつて

胡麻　先づ、首尾よくお騙されなすつて、おめでたうござります。

皆々　イヤ、奇妙だ〳〵。サア〳〵、錢をやるぞ。

ト　辻打ちになり、めい〳〵錢をやつて、仕出し別れて入る。あと楊弓の音。

傳三　時に、おみちさん。段々夏になりました。さぞ忙しうござりやせう。どうだね、御亭主の太平次さんは、旅仕事にでも行かれましたかえ。

みち　ィエ、まだよい仕事もござりませぬが、この間は何ぢややら、大學樣とやらのお邸から、たびたびお人が參りますわいな。

傳三　ァヽ、その左枝大學樣ならばお大名、常から短氣な殿樣ゆゑ、住吉の濱屋敷へ、押籠め同然と聞きましたが、大方、その大學樣であらう。

多九　（これを聞き）コレ〳〵、番頭。

傳三　オヽ、多九郎さんかえ。

多九　そんなら何か、大學樣は押籠め同然の御身分か。それぢやァ猶々、貴樣の賴んだ香爐を、賣切つてしまはずばなるまいわえ。

傳三　サァ、あの香爐を與兵衞どのが、見るとその儘、五十兩で買ふ程に、決して外へ賣るまいと、十兩といふ手附けを渡して、後金は明日明後日の積りゆゑ、掛先きを集めに、今日の夜船で大阪へ行き、內本町の日野屋から、金取つて戻るといつて、とうに內を出られたわいの。

多九　そんなら、今日明日には、後金の四十兩、納まるに違ひないの。

傳三　きつとわしが金取つてやりませう、その代り、コレ、口錢も一割五分も取らにやァならぬよ。

多九　ハテ、そりやァ承知サ。

みち　モシ、傳三さん、お前がた爰に話してござんすなら、ちよつと見世を見て居て下さんせ。

傳三　オイ〳〵、ちよつとの內ならよいが、早く歸つておくれよ。

みち　ちよつとわたしや、あの扇長から、仕立て物の直しがあるといつて呼びに見えたゆゑ、直ぐに行

つてくるわいな。

傳三　エヽ、かみさん、仕立て物をするぢやまで。夫婦稼いで金の置き所があるまいに。

みち　サア、わたしも土藏を建てうと思ふわいな。ホヽヽヽ。ちよつと行て參りまするぞえ。

ト辻打ちになり、とつかはと下座へ入る。

傳三　コレ〳〵、胡麻八。てめえ達の仲間に、蛇遣ひの女があるぢやァねえか。

胡麻　ハイ、たしかにござりやした。ナア、鍋太。

鍋太　アイ、そりやァ女ぢやァござりませぬ。蛇遣ひの男でござりやすが、稼ぎに出やしたが、もう歸るでござりやせう。

胡麻　旦那、その蛇遣ひに御用がござりやすかえ。

傳三　サア、ちつと賴む事があるが、アア〳〵、歸つた時分に來て見ようわえ。イヤ〳〵、見世を見てくれろと、あの噂アめが賴んで行つた。

多九　コレ〳〵、番頭、どうでおれが爰に居るから、氣遣ひなしに行つて來さつしな。

傳三　そんならお前、賴みましたぞえ。蛇遣ひが來たら、ちつと待たせておいて下さい。

鍋太　アイ〳〵、畏りました。

傳三　ドリヤ、ちよつと行つて來ようか。

ト辻打ちになり、德利を提げ、とつかはと入る。矢張り鳴り物にて、向うより九介、非人の形にて、蜜柑籠へ蛇を大分入れ、これを抱へ、跡より、したみ酒の三、同じく非人にて、一升樽と梅干桶にお餘りを入れ、捨ぜりふにて出て來り、舞臺へ來て

三　どうだ、胡麻八、今日は貰ひがあつたか。

胡麻　イヤモウ、天氣のせゐか强氣に貰つたて。

鍋太　三さん、そりやァ生酒か。砂ごしか。

三　ナニ、したみぢやァねえ、一升おれが奢りサ。

九介　押の强い奴ぢやァねえか。また富川町のお餘りであらう。

多九　コレ〳〵、てめえ達の境涯は氣散じでいゝの。なんと、おれも仲間にしてはくれまいか。

九介　ナニ、仲間になりたいえ、旦那とした事が、素人衆の目からは樂のやうにも見えますが、モシモシ、御覽じませ。（ト蜜柑籠の蛇を見せ）こんな不氣味な物を、商賣なればこそ、懐へ入れたり、襟へ卷いたり、イヤモウ、とつけもない商賣でござりますよ。

三　そりやァさうと、姐えどのは小屋にか。なんだかこの頃は氣が浮かねえやうだの。

胡麻　ハテ、そりやァ戀煩ひとやらであらうよ。
鍋太　なにか。上下者の太平次にか。
多九　ヤァなにか。太平次に、あの小屋の女が
九介　モシ、姐えどのはわし等が頭分サ。お前も近附きになつて、仲間へ入りたくば賴んで見なさい。
多九　近附きにして下さい。
九介　呑み込みました。（ト小家の側へ來て）コレ、姐御、寐たのか。ちつとマァ爰へ出さつしやいな。
　　ト垂れを上げる。内にうんざりお松、女非人の拵へにて、うたゝ寢して、思ひ入れあつて
まつ　ァ、、てめえ達は、もう歸つたのか。大分お忘けだの。コレ、また日上げを貸せと云ふまいよ。
三　なにサ、今日は大浮きサ。そこで姐御、一升買つて來ました。
まつ　話せるの。
九介　して、今日はどうだ。心持はようごんすか。
まつ　今日はちつといゝの。コレ、見りやァ、爰で稼がつしやる浪人さんが來て居なさるが、何ぞ用か。
九介　姐御、聞かつしやい。わしらが仲間になりたいとよ。
また　ナニ、待ひをうつちやつて、蒲鉾小屋の附合ひがしたいとかえ。そりやァ好い心掛けだね。

胡麻　モシ〳〵、お詞の中だが、わしらが仲間へ入らつしやつても、藝が無くつちやァいきませんよ。
鍋太　それサ、乞食もお前、藝が肝心でござりやす。
多九　サア、何も藝はないが、身共四つ竹を打つて。
胡麻　そいつァお前、乞食にやァ持つて來い山櫻。姐御、仲間へ入れて進ぜさつしやい。
まつ　ほんに、それほど乞食になりたくば、仲間にしてやりやせう。
多九　イヤ、それは近頃忝うござる。して、仲間入りがあらうな。
まつ　アイ、乞食の仲間入りといつて、別して大層な話もないね。わつちらも腹からの乞食でもござりやしねえ。もとは近江で百姓の娘、ほんの事だが、これでもお前、女、男も使つた大百姓の娘サ。コレ、これを見な。（ト首に掛けた守りの中より書き物を出し）何の役にも立たぬ反故同樣だが、また何ぞその時に要らうかと、枕紙にもしねえが、浪人さん、讀んで見な。（ト多九郎へ渡す）。
多九　なんだ。……「長德三年九月五日の誕生、江州千野村德太夫娘まつ。……ア、近江の生れだの。
まつ　さやうサ。百姓の子だが、あまッ子の時分から、田植ゑだの何のと土ほぜりが嫌えでネ、十四の年に、村の番太と色事で國を逃げて、それからモウ、親には勘當され、あつちこつちの手へ渡つて、宿場へも出たり、切りも稼いで、今年二十五になるが、これまでに亭主も十六人持つた。著

ッきにけりが蒲鉾へ落ちたネ。ほんの事だが、善い事は知らねえが、悪い事といつたら、如才のある姐えぢやァねえヨ。コレ、餘ッ程こゝも細つて居るわな。

ト襟を叩いて思ひ入れ。以前の書き物を守りへ入れ、首へかける。

多九　成る程。如才のあるのぢやァねえわえ。

九介　見なさい。道樂をしぬいたから、色氣があるわな。

三　姐御も、あの太平次どんに、餘ッ程のびて居るの。

まつ　エヽ、馬鹿を云へな。

多九　アヽ、あの侍ひ上りの太平次か。

まつ　エヽ、あの人は侍ひかえ。

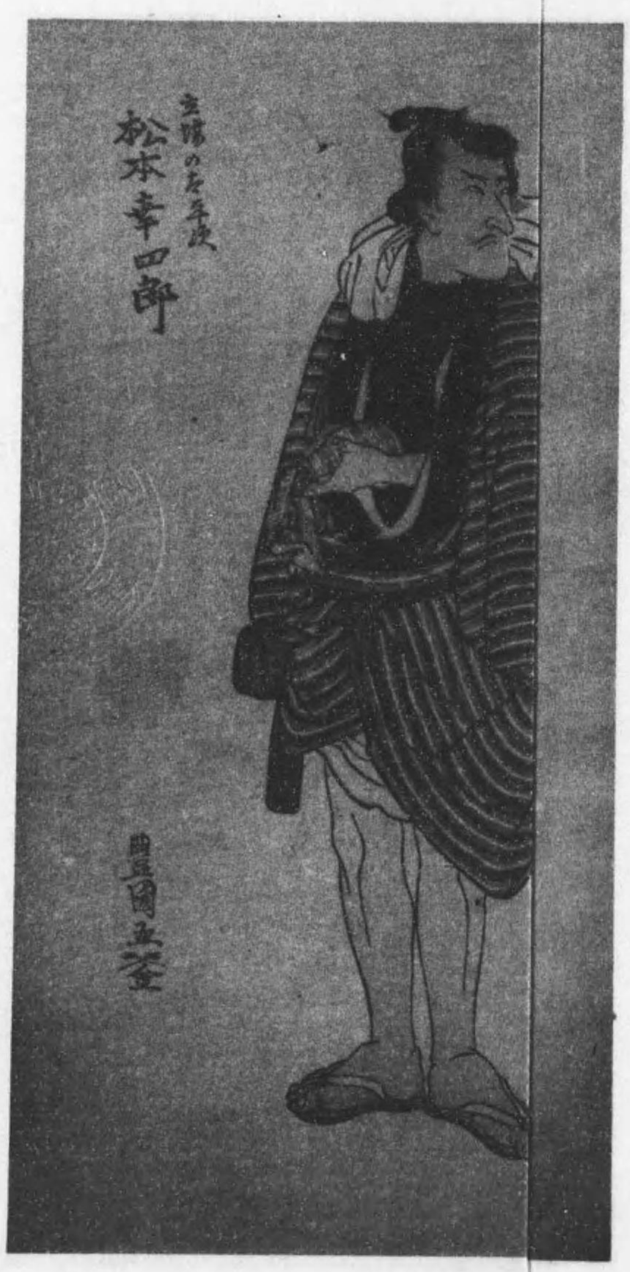
多九　ありやァ、徒士奉公した者サ。

まつ　道理こそ武士らしいところがあるなう。

胡麻　コレ〳〵、姐御、新入りがあるに、なんと酒でも始めようではねえか。

まつ　そいつァよからう。併しおらァ豪敵に肩が張つたぞ。

鍋太　ちつと揉んで上げうか。



まつ　道理こそ武士らしいところがあるなう。

胡麻　コレ〳〵、姐御、新入りがあるに、なんと酒でも始めようではねえか。

まつ　そいつァふかからう。併しおらァ豪敵に肩が張つたぞ。

鍋太　ちつと揉んで上げうか。

まつ　ナニ、女ぢやア利かねえよ。

三　そんならわしが揉んで進ぜよう。

まつ　三坊、ちつとやらかしてくんねえ。

三　オイ〳〵。斯うか〳〵。（トお松の後ろへ廻り、肩を揉む）。

胡麻　サア〳〵、新入り振舞に酒にせうぞえ。

九介　何ぞ肴があるかえ。

まつ　小屋にあつた。コウ、鍋公、とつて來な。

鍋太　アイ〳〵。

ト小屋の中より缺け重箱に缺け摺鉢を添へ、肴の入れたるを取つて來り、樽の酒を徳利へ入れ、茶碗を取出し

サア〳〵、姐御、始めなさい。

多九　新入りがちつと戴きませう。

まつ　そんなら、憚りながら、上げやせう。

ト捨ぜりふにて鍋太、酌して、お松、茶椀を引きうけ、酒を飲む。

胡麻　時に、姐御、新入りの馳走に、九介の踊りはどうだネ。
まつ　よからうヨ。始めねえ。
九介　おれが踊るが、三味線は、てめえ彈くか。
胡麻　そいつは承知サ。コレ、新入りさん。稽古ながら見習ひなさい。
多九　拜見いたさう。
まつ　オヤ、馬鹿らしい。
三　サア〳〵、早く、始めねえ〳〵。
　　ト胡麻八三味線彈く。九介踊る。何なりと流行り唄。振よろしくあつて納まる。
皆々　サア、酒にすべい〳〵。（ト辻打ちになり、以前の傳三、徳利を提げて出て來り）
傳三　コレ〳〵、蛇遣ひの男は歸つたかの。
多九　番頭か。アレ、あの男が蛇遣ひよ。
傳三　ア、、てめえか。コレ、おぬしが遣ふ蛇の中に、ひ、ひ、ひばかりがあるか。
九介　されば、あつたかも知れぬ。（ト蜜柑籠を出す）。
まつ　ア、、ひばかりが何ぞになるかえ。

傳三　ちつと入用だが、有るなら賣つて下さいな。
まつ　コレ、九介、おつりきな相談だ。賣つてやらつしやいな。ドレ、籠を爰へ寄越さつし。
九介　サア〳〵、見てくんねえ。
　　ト籠を出す。お松いろ〳〵捨ぜりふで、蛇を色々見わける。
多九　コレ〳〵、番頭、氣味のわるいものを、イヤ〳〵、おらア嫌だぞ。
傳三　さうサ。姐えは苦手か。
まつ　アイ。わつちは蛇遣ひもして歩いたよ。
多九　成る程、さう見えるて。
まつ　（ひばかりを一疋取出して）コレ〳〵、此奴がひばかりだよ。
傳三　エヽ、その事か。
まつ　これが何になるえ。
傳三　サア、ちつとそれには話があるが
まつ　（思ひ入れあつて）よし〳〵。こいつアわつちが野暮であつた。……コレ〳〵。ぬし達は、ちつと
　　氣をきかしてくんねえ。

皆々　合點でござりやす。
胡麻　サア、嗅アや。楊弓場の際で始めよう。
鍋太　さうしなさい。
九介　姐御、いゝやうに賴みます。
三　新入りさん、お前も行かねえか。
多九　ナニ、おらア聞いてもいゝ。……とはいふものゝ、今からこなた衆の仲間だ。見習ひながら行かうか。
皆々　そんなら姐御。
まつ　ちつとの内だよ。
ト辻打ちになり、胡麻八、鍋太、多九郎、九介、三、ついて下座へ入る。
傳三　コレ姐えや、して、その蛇を、てめえ賣つてくれるか。
まつ　ハテ、錢金になる事なら、隨分賣るのサ。
傳三　して、いくら位るだ。
まつ　ハテ、蛇の相場に極りがあるものかな。いゝ加減に寄越しなさいな。

傳三　そんならぶッつけ一分だ。よしか。
まつ　蛇一疋を一分とは有り難い。サア、持つてお出で。（ト出す）。
傳三　アゝコレ、どうして〳〵。買ひは買つたが、持つてはゆかれぬ。とてもの事に、そいつを引裂いて、血を取つてもらはう。
まつ　アゝ、血がいるのかえ。待ちねえ。引裂いてあげよう。
ト捨ぜりふにて片口の中へぶちこみ、あちこちして口より引裂く。傳三以前の德利を出し
傳三　コレ〳〵、この中へ賴みます。（ト蛇の血を德利へしたみこみ、傳三振りまはす）。
まつ　もうそれでよしかえ。
傳三　こりやア姐御、御苦勞々々〳〵。
まつ　また相應な用があつたら、お賴み申しやす。
傳三　承知サ。そんならお松。
まつ　傳三さん。アゝ、手でも洗つて來よつか。
ト辻打ちになり、下座へ入る。この鳴り物にて、向うより立場の太平次、襟附きの袷、紅皮の三度、藤倉草履、封じたる狀を大分下げ、飛脚屋の狀配りの形にて出てくる。下座より多九郎出てくる。三

人行き合ひ、床几に腰をかけ

太平　番頭さん、そりやァ何だ。銘酒ぢやァないかえ。

傳三　太平次どん、この間、貴様にも話した、彼の毒が調合してあれど、今一藥がひばかりといふ蛇の生血、この小屋の蛇遣ひが持つてゐたゆゑ、たつた今、この酒の中へしたみ込んだ。こいつを彼の奴にくはせて、めでたくゆけば、お龜はおれが女房にするつもり。

太平　そんなら、その毒で彼の奴をやらかすのか。そりやァ手短かな話だの。コレ、それにつけても、この頃あの與兵衛が、おれを見るたびに、無性に腹を立てるが、こいつ一圓合點がゆかねえの。

多九　コレ〳〵、太平次、一體マアおぬしの顔が、大學様に瓜を二つに割らずとその儘。その大學様は、いつぞや江州で、あのお龜を妾にしようと云はしつたげな。そこで大學様に當りがあるゆゑ、御前によく似たおねしゆゑ、腹を立てると見えるわえ。

太平　イエ〳〵、そりやァ話が違つてゐる。道理こそ大學様がわつしを買込み、高橋ゆかりの奴等なら、方づけてくれろとのお頼み。御前によく似たわつしゆゑに、癇癪を起すのは、そんなら、今は町人でも、御前を恨む心のねえでもねえわえ。

多九　ア、、そんなら與兵衛は、高橋にゆかりの者か。

太平　アイ。大兄は瀬左衛門。手討ちになつた彌十郎が次の弟、孫三郎といつた高橋の、三人目の弟サ。

多九　そりやァとんだ事だ。

太平　何がとんだ事だ。

多九　さうとは知らず、あの番頭を頼んで、靈龜の香爐を五十兩に、與兵衛めに賣る筈で、手附けをとつて、あつちへ渡して置いたワ。

傳三　エ、、そんならあの香爐を、與兵衛が見ては悪いかえ。

太平　悪い段か。與兵衛があの香爐を多賀の邸へ上げると、高橋も家が立ち、俊行様のお家も別條なく、折角お前が盗み出し、企んだ元締め大學様も、蒟蒻屋の蒟蒻。ハテ、そりやァとんだ事だ。

トこのあたりに、お松出かゝつて窺ひ居る。

傳三　それぢやァ、減多に、香爐も手離されぬ話だが、是非々々與兵衛が買ふといつて、京大阪へ掛け先きの金を取りに行つたのも、後金濟ます積りだわえ。

太平　して、手附けでも取つたのかえ。

多九　さうサ。十兩取つて遣つてしまひ、香爐も與兵衛が方へ預けて置いたのよ。

太平　そんなら、手短かに、與兵衛が留守を幸ひ、番頭、ちよろまかして來やれな。

傳三　どうして〳〵。大切な道具は戸棚へ入れて、鍵はお袋が腰へくゝつけて、離す事ぢやァねえの。

太平　そいつァ困つた話だ。

まつ　モシ、太平次さん、その香爐とやらを、わつちが仕事してあげうか。

太平　ヤァ、てめえは非人のうんざりお松。あの香爐を取り返す手段があるか。

まつ　モシ、斯うしてはどうだえ。（ト太平次に囁く）。

太平　ア、、そんなら與兵衛が留守を幸ひ、てめえが店へ振り込めば、コレ、番頭、斯うだワ。

ト傳三にも囁く。

傳三　成る程。留守を幸ひに、そいつもよからう。（ト多九郎へ囁く）。

多九　よし〳〵。併しそれでもゆかないときは、手短かにその酒で

太平　マァ、何にしろ、お松の趣向を、やらかして見るがいゝ。併し振りこんだとき、なんぞ與兵衛が動きの取れぬ證文が無くば

傳三　そいつは奇妙な物がある。コレ。（ト懐中より與兵衛がお龜へやりし起請を出し）與兵衛が書いたこの起請。こいつが種になりさうだの。

まつ　ほんに、そいつは奇妙だわえ。コレ、「お龜どのへ與兵衛」といふ起請を、一番役に

ト守り袋を出してその中へ起請を入れる。

多九　コレ、あの與兵衛めが歸らぬ中に

まつ　そんなら直ぐにしかけるよ。首尾よくいけば、モシ太平次さん、薄穢ないわつちでも、萬更腹からの乞食でもねえよ。間にやァ、ちつと麥飯も、また藥食ひだわな。（トいやらしき思ひ入れ）。

太平　そりやァモウ、首尾よく香爐を、ちよろまかしてくれさへしたなら、どうでもならうよ。

傳三　併し姐え、その儘でも行くまいの。

まつ　サァ、なんぼ乞食だといつて、身仕舞ひ道具の、だりむくつたのでも、持つて居るのサ。

ト小屋の中より古鏡、鏡立を取出し、筵の上へ坐り、たゝう紙の中より白粉茶碗を出し、顔を直す。

太平　エ、、流石は女だけ、てめえの樣な氣前でも、紅白粉の貯へがあるの。

まつ　ハテ、誰に見しよとて紅鐵漿つきよぞ、みんなぬしへの心中立て。（ト鼻唄を唄ふ）。

傳多　いゝ氣前だの。

太平　氣にくされはねえ奴よ。

ト お松は髪を解かす。辻打ちになり、向うよりお道、風呂敷包みを持ち出て來り

みち　オヤ、お前、いつの間に來なさつた。

太平　コレ、われも店を明けて、どこを歩いて居る、エヽ。
みち　アイ、わたしや扇長に仕事があつて、帶や小袖の縫ひ直しを取つて來たわいな。
　　トこの中よりお松、じろ〳〵見て居る。
太平　おきやアがれ。あとから附いては歩かれず。
みち　なんで又、女房に附いて歩く亭主があるものかいな。
太平　無くつてワ。抱寢をする亭主だもの、附いて歩いてもいゝぢやアねえか。
みち　そんなら附いて歩きなさんせいな。
まつ　（こちらを見て）なんだな、太平次さん。なんぼ掛け構ひのねえわつちらだといつて、見てくれのわるい、氣障な事はよしねえな。
みち　オヤ、このお松どんは、何を其やうに腹を立てる。こりやア女房と亭主の話だわな。
まつ　エヽ、よしなさいな。その話が氣障だわな。イケあつかましい。
みち　コレ、何があつかましいえ。
まつ　あつかましいよ、コレ、かみさん。わつちがやうな乞食だといつて、さう踏みつけにしねえものだわな。エヽ、お前は旦那衆、わつちらは乞食だよ。アイ、大勢ぢやアござりやしねえ。たつた

一人でござりやすよ。アイ、どうでござりやすな。
みち　ありやマア、何を腹を立てるのぢやぞいな。
太平　コレサ、マア〳〵、てめえ先きへ歸れよ〳〵。
みち　ナニお前、歸る事があるものかな。わたしやまだこの仕立て物も、とつくりと相談してな。
太平　ハテ、大事ねえ、こりやアおらが後から持つてゆく。マア〳〵、先きへ歸れ〳〵。
みち　それぢやというて、何ぢややら、あの小屋のお松が、わたしに向つて
まつ　小屋のお松もすさまじい。素人衆のかみさんだといつて、乞食だといつて、あんまり退いた話もねえよ。
傳多　ハテ、いゝわな〳〵。（トこの中へ入る）。
太平　コレ〳〵、てめえ、まア先きへ行つてくれろよ。コレ番頭、貴樣、連れて行つて下さい。
傳三　呑み込んだ〳〵。サア〳〵、お道さん、わしと一緒に歩ばつし。
みち　はて、何も行くには及ばぬわいな。
傳三　イエ、先きへ歸らつしやいよ。コレ、これも先きへ持つて行くよ。（ト持つたる德利に思ひ入れ）。
太平　よしサ。先きへ行かつしやいよ。

傳三　サア、來なさいよ。
ト辻打ちになり、傳三件の德利を抱へ、お道をせり立てゝ向うへ入る。太平次、風呂敷包みを受取り、殘る。お松見て
まつ　モシ、太平次さん。あんな綺麗なおかみさんがあつちやア、どうしてマア、わつちのやうな乞食を
よもや
太平　イヽヤ、それもてめえの働きで、首尾よくやつたら
多九　そりやアその時の相談に。ナウ、太平次
まつ　そんなら爰から道具屋へ
太平　與兵衛が留守へつけ込んで　（ト風呂敷包みをわたす。おまつ取つて見て）
まつ　こりや女小袖に女帶。
太平　身ぐるみ着かへて
まつ　うまく行つたら　（トこの時、九介、三、鍋太、出かゝり）
三人　姐御、御苦勞。（トおまつ、太平次に思ひ入れあり）。
まつ　コレ。

太平　エヽ、やかましいわえ。
トこれを刻みにて、よろしく

幕の中、やはり辻打ちにて、繋ぎ。引返し。

拍子幕

五幕目

道具屋の場

役名――百姓、佐五右衛門。手代、傳三。下女、おみよ。下部、會平。道具屋娘、おかめ。女非人、うんざりお松。道具屋後家、おりよ。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、納戸口、更紗の暖簾を掛け、上の方、折廻しの障子、下の方、段さんの戸棚。この前に置き物の唐獅子、櫓時計、堆朱の香爐臺、紫銅の大藥鑵など並べ、壁に帳面色々、田代と印しせし軒暖簾。いつもの所、門口。下に木戸を少し見せ、すべて今出川道具屋の體。爰におりよ、母親の拵へ、お龜、振り袖の娘の形にて、おりよが髪結うてゐる。此方に下女おみよ、行燈の掃除して居る。てんつゝにて幕明く。

ト直ぐに向うより、傳三、幕明きの形にて、酒徳利を提げて來り、舞臺へ來て、内へ入る。

傳三　おみよ、今、行燈掃除か。馬鹿々々しい。

みよ　この番頭さんとした事が、歸り早々、もう小言かいなア。

傳三　小言ぢやアねえが、智恩院の八つを先刻打つたワ。

りよ　コレ〳〵、傳三、その樣に云やんな。あれも遊んでは居ぬわいの。

かめ　母さん、もうよろしうございます。（ト髮結ひしまふ）。

りよ　オイ〳〵、これはお世話。……　おみよ見や。手傳つて結うてもらうたが、齡の十も若くなつたであらうの。

みよ　ほんに、さやうでございます。まだ隨分お嫁入りが

りよ　そりや信濃へであらうな。ハヽヽヽ。

かめ　アレ、母さんの出談ばつかり。さぞ、氣味がお惡うございませう。

りよ　なんのいの。（ト御手を拭く。此うち、傳三、莫盆を控へる）。

かめ　その德利は、傳三、わが身持つて來やつたか。

傳三　ハイ。こりや與兵衛さんに。……　イヤナニ、アノ與兵衛さんの代りに、建仁寺町の竹垣樣へ、茶入れの事で參つたれば、幸ひ貰うた加茂川酒、一つ飲めと仰しやります。イヤ〳〵、晝間酒を飲みましては、奉公が粗略になります。ハテ、そちは主思ひな、そんならこれごとやる程に、勝手に飲めと仰しやつて、貰うて參つた、こりや銘酒でございます。

りよ　さうとは知らずわしは、又與兵衛が大阪へ行つたを知りつゝ、どこへ行つた事ぢやと思ひました。

傳三　なんのお前樣、商賣の事より外というたなら、錢湯ばかり。錢湯樣のお惠みで、與兵衛樣へ首尾ようこいつを（ト思ひ入れ）。

りよ　傳三、何を首尾よう

傳三　イエサ、與兵衛樣が、首尾よう金を持つて、歸らつしやればよいといふ事。

かめ　なんのマア、正直な與兵衛さん、受取りさへなさんしたなら

りよ　イヤ〳〵。この頃、與兵衛が夜泊り、日泊り、その上、これまでの孝行な心に引きかへ、ぞん氣になつたは、どうでも心に（ト思ひ入れ）。

かめ　エ。

りよ　ホヽヽヽ。つい愚癡を云はうとした。コレ、おみよ、もう夕飯の拵へぢや。

みよ　ハイ〳〵、畏りました。

りよ　わしは仕掛けた綿入れ物。ドレ、方付けてしまはうか。

ト唄に成り、おりよ先きにおみよ行燈を持ち、奥へ入る。此うち、傳三は莫をのんで居る。お龜、梯道具を方づけ、奥へ行かうとする。傳三徳利をかた寄せ

傳三　アヽモシ、お龜さん〳〵。

かめ　イエ、わしや（ト行かうとするを）

傳三　これはしたり、マアちよつと、お出で〳〵。（ト手を取り連れて來る）。

かめ　又いつもの嫌らしい事ぢやないか。

傳三　なんの〳〵。お前の爲を云うて上げるのぢや。

かめ　わしが爲とは、そりや、どのやうな

傳三　お前、さつぱり知らずぢやが、與兵衛さんはこの頃中、祇園町に馴染が出來て、藝子ぐるひ。それで足らいで磯せゝり、モウ〳〵あのお龜が、鼻に附いて〳〵、うるさい、と云うてぢやぞえ。

かめ　イヤ〳〵。わが身のそりや嘘ぢや。與兵衛さんの夜泊りは、謠ひ講や茶の湯にお出で。どうしてそんなお心のないといふ證據は（ト襟にかけし守り袋を出し、中を見て）ヤア、こりや起請が見えぬわいの。（トいろ〳〵尋ねる）。

傳三　モシ〳〵。起請があるか。あるまいがな。與兵衛樣は玉歸り。ヤア玉歸り〳〵。評判の玉歸り。

ト立騷いて煽てる。

かめ　なんの、與兵衛さんの心が變つても、わしが心は變らぬわいの。

傳三　コレ、なんぼお前がさう云うても、與兵衛さんはおツつけ、ころり。

ト お龜に見えぬやうに、德利へ指さして思ひ入れ。

かめ　エヽ、そのやうに、えんぎの惡いこと云やんないの。

傳三　ハテ、そこが老少不定、その時は傳三さしづめ跡取り。それぢやによつて、爰で手付けに。

トずつと寄る。

かめ　アレモウ、うるさい。離しやいなう。（ト突きのける）。

傳三　ハテ、さう云はずと、ちよつと〳〵

ト又寄る。お龜逃げる。傳三これを追はへ歩く、此うち、てんつゝになり、向うより佐五右衛門、木綿やつし、股引、三尺手拭、一本差し、草鞋の形にて、菅笠を持ち出て來り、舞臺へ來る。

佐五　オヽ、爰ぢや〳〵。……ちと御免なされ。

ト云ふをも聞き入れず、お龜を追はへてゐる。

これはいかな事。御免下され。

ト草鞋を脱いでズッと内へ入る。傳三出合ひがしらに寄る。佐五右衛門恟りする。傳三「ヤア」と思ひ入れ。お龜見て

かめ　お前は近江の父さんぢやござりませぬか。

佐五　さういふ其方はお龜かいの。

傳三　ヤア、そんなら實の

佐五　お龜が父親。番頭どの、今のは何で

傳三　サア、あれは。……オヽそれ〳〵、親御の事ゆゑ、お龜さんが、あれ位ゐ可愛からうと。

佐五　ハテ、いかい苦勞性な。……ハヽヽヽ。（ト傳三しよげる）。

かめ　ほんに、父さん、ようお出でなされましたなア。

傳三　さやう〳〵。ひよんな所へ……ようお出でなされました。ドレ、お袋様へお知らせ申して

ト合ひ方、これをしほに奥へ入る。

かめ　マア、お前も御無事で

佐五　其方も達者で、てもさても、大きうなつたなア。

かめ　アイ〳〵。あのナ、父さん、わたしやいつやら、與兵衛さんと谷汲の觀音様へ、お詣り申したその時、お前には四五年あとにお目にかゝつたれど、今の母さんもまだ知らず、さうして妹のお米にも、小さい時に別れたゆゑに、逢ひたう思ふ其うち、ついした事で、清水村へ寄らなんだ。皆おまめでござんすかいなア。

佐五　オヽ、隨分と皆息災ぢや。

かめ　さうして、今の母さんが連れて見えた、弟の里松わえ。

佐五　サア、その里松めは。……まめで達者で、息災な程に、案じやんな〳〵。（ト思ひ入れ。奥にて）

りよ　なんぢや、お龜の父御が見えた。ヤレ〳〵、それは。（ト云ひながら出て）オヽ、こりや、近江の佐五右衛門どの。何と思うて久し振り。

佐五　これはおりよどの。無沙汰ぢやと思うて下さるな。何をいふも、百姓の

りよ　何のいな、御無沙汰は互ひの事。……コレおみよ、お茶早う持つておぢや。

みよ　ハイ〳〵。

トてんつゝになり、花道よりお松、絹やつし、横帶、引摺り下駄、女房風の拵へにて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。此うち、おみよ、茶碗を茶臺にのせ、持ち出て佐五右衛門に出す。お松門口より

まつ　ハイ、おゆるしなされませ。（トずつと内へ入る。お龜思ひ入れ）。

りよ　つひに見馴れぬ女中さん。……ア、今日裏長屋へ引越しの

まつ　イエ〳〵、わたしやそんな者ぢやござりません。與兵衛さんにちとつお目にかゝりたい事がござりやしてサ。お前さん、與兵衛さんのお母さんかえ。こりやお初にお目にかゝりやした。どうぞちよつと與兵衛さんに。……モシ、姐えさん、ちよつとお貸しよ。

トお龜が前にある煙管、莨盆を引きよせ、煙草をのむ、お龜氣味わるき思ひ入れにて、そろ〳〵とお

りよの方へ寄る。おりよ思ひ入れあつて

りよ　モシ〳〵。お前、折角のお出でぢやが、與兵衛は今日急な事で、大阪へ下りました。なんぞ用なら又その内。

まつ　ヘエ、そんならアノ與兵衛さんは、大阪へお下りかえ。……ほんに、人にやァ沙汰もしないで、モシお母さんへ。さういふ事ならお歸りまで、わたしをどうぞお内へお置きなすつて下さりませ。

りよ　そりや又お前、どうした譯で。

まつ　お母さんの前ぢやァ、お恥かしいが、わたしやァノ西石垣の扇源と申す呼び屋の、……サァ、ついした事から與兵衛さんと、お心安くして居りやしたを、いらぬお世話な何奴だやら、ちやんと

内へ吹込んで、今朝からのやッさもッさ。仕様がなさに駈け出して、與兵衛さんとも相談と、參つたところがお留守ぢやァ、今日の事には參りやすまい。といつて、内へは行かれず。否でもお歸りなさるまで、お待ち申して、此しらちを

ト此うち、佐五右衛門氣の毒な思ひ入れにて、莨盆を持ち、後へ下る。

りよ　そりやモウ、ひよんなお話ぢやが、よもや與兵衛が其やうな

まつ　成る程。お留守へ參つてこんな事を申しちやァ、お前さんも御存じない事ゆゑ、どうか芝居で音羽屋の、親仁がいたす事のやうに、思し召すは尤もだが、今のむ莨が毒になれ、微塵わたしが、さら〳〵どうして。といつて…、眞にはなさるまい。慥かな事は與兵衛さんと、取りかはした爰に起請が

かめ　エ、。（ト思ひ入れ。おりよは佐五右衛門へ氣の毒なこなし。お松守りを出し）

まつ　お目にかけるも、どうやら嫌らしいが、出さにやァわたしが嘘でも……こりやァお守り。……これでもなし……こりやァ臍の緒。……ハテ、ついつい入れておいたが

ト守りの中より、いろ〳〵出して下におく。佐五右衛門これを後ろより見てゐて、臍の緒の書付けを煙管にて引寄せ、取つて見て、お松が顔をちよつと見て懷中する。お松これを知らず

これだ〳〵。これを御覽じて下さりませ。

ト起請をおりよが前に置く、おりよお龜と顏見合せ、思ひ入れ。

モシ、お母さん。これがわつちが慥かな證據。御覽じて下さりやしな。

ト廣げておりよへ突きつける。お龜あちらへ向く。おりよ是非なく取つてちよつと見て

りよ こりや違ひのない與兵衛の手跡、……お龜どのへ與兵衛。

ト涙聲にて讀む。お龜これを聞き、起請をそつと覗き見て

かめ ヤア、この起請はわたしがなくした

ト取らうとするを、おりよ思ひ入れ。お松ちやつと手早く取つて

まつ オヤ〳〵〳〵。お前ばかりがお龜さんかえ。一つ町にも同じ名は、いくらもありやすわな。起請のお龜はわたしが事。お母さん、なんと嘘ぢやアござりやすまいね。

りよ サア、起請のお龜が……こなさんなら

まつ 與兵衛さんゆゑだりむくつて、かう内方へ駈け込んで、據なくお母さんに、こんな事を申すからは、起請の通り、二世三世、變らぬわたしや與兵衛が女房。お氣に入らずと、お母さん、どうぞわたしをこなたの嫁に。……オヤ、履き物を上げられちやア（ト門口の下駄をしまふ）。

かめ モシ、母さん、アレ、あのやうに

りよ サア、よいわいの。尤もぢやが、何をいうても憎いは與兵衛。人の内儀と此やうな。ほんに、いとしぼげなこなさん、苦勞であらうな。シタガ、知つてござるか知らねども、あの與兵衛は、爰に居るお龜というて、小さいから云ひ號けの女房のある身。そこへどうも外には

まつ そんなら、あのお子さんが。……それぢやア、わたしやなぐさみ物。エヽ口惜しい。どうしようねえ。こんなアア腹の立つ

りよ コレ〳〵、さうした事でもあるまいが、肝心の與兵衛が居ねば、マア今日は内へ歸らしやんして、與兵衛が戻つたその上では、ハテ、あれも男ぢや。こなさんの譯もつけるであらう程に、さう思うて、どうぞ内へ。

まつ モシ〳〵。そのお騙しはたべやすまい。今こそ斯うした女房なれ、元はわたしも祇園町で、一夜六分の、花も咲かせて宮川町、繩手も踏んで道場か、高臺寺前下り坂、八坂を落ちて駈け上り、二條新地や御靈裏、おはもじながら風の辻、泣かぬ勤めの螢茶屋、あらゆる場所を駈けまはり、酸いも甘いも承知のわたし、素人方の口鉾に、乘つてそんならさうかえと、歸る女と思し召すか。お如才のないお母さん、お前さんでもござりやすめえ。ホヽヽヽヽ。女中衆、お茶一つおくれ。

りよ　ムウ。そんならどうでもこなさんは

まつ　アイ。與兵衛さんのおかみさん、この道具屋の花嫁御サ。

かめ　イエ〳〵、與兵衛さんにはわたしといふ

みよ　それ〳〵、親御様のお許しの、きつとした御新造様がござんすりや、なんぼお前はさう云うても、

及ばぬ事でござんすわいナ。

まつ　默りやァがれ、この阿魔め。及ばうが、及ぶまいが、コレ、この通りの起請がありやァ、どこへ出ても

與兵衛が女房。もうこの内に居据つて、お夜食からして据ゑ膳だ。どなたもさう思つておくれ。

りよ　サア〳〵、それも合點なれども、マア與兵衛が戻るまで（トおりよ歸さうといろ〳〵する）。

まつ　イヤ〳〵、爰はわたしが内、手向けの水に一本花、立て線香に白餅の、御馳走たべたその上に、

枕念佛を聞かない内は、滅多に出やァ致しやせんよ。

ト莫を吸ひつける。皆々もてあましたる思ひ入れ。傳三出て來り、おりよをこちらへ呼ぶ。

傳三　モシ〳〵、お袋様。奥で聞いて居りましたが、與兵衛さんの夜泊り、日泊り、ろくな事は出來ま

いと、存じて居つたが案の定。こりやマア、どうなされます。

りよ　どうというて、あの女中を、マア去なすより、外に思案は

傳三　サア、只さうばかり仰しやつても、とんと埒は明きませぬ。いづれ……れこでござりまするぞえ。

ト思ひ入れ。

りよ　さいなう。それも少しばかりの事なれば

傳三　マア、わたしが一つ。話し合ひませう。（トお松の側へ來り）モシ、お女中さん。お前にも無理はな

い。至極々々。……ぢやが、爰にあるて。いくら云うてもその相手の與兵衛さんが留守なれば。

サヽ歸られまい。尤もぢや。そこが物は談合とやら。與兵衛さんの戻るまで、少々の胸倉金で

まつ　カウ〳〵〳〵、おきなさい。お前は爰の番頭さんか。わつちやァその嫌らしい、胸倉金の何のか

のと……よいワ。そんなら皆がわたしを歸したがる事だ。與兵衛さんの歸るまで、料簡つけて待

つてやらう。（ト皆々思ひ入れ）。サア、姐さん、お出で。（トお龜が手を取つて引立てる）。

めん　あれいなァ、わたしを

りよ（留め）コレ〳〵、お龜をなんで、こなさんは。

まつ　ハテ、與兵衛さんはお留守ゆゑ、わたしが事は解りませぬと、親分へ云はれやせうか。お龜さん

を預つて、待つのがわたしの料簡サ。與兵衛さんがお歸りなら、お龜さんと退去り書いて、わた

しを内へ入れるとも、わつちが手を切り、お龜さんを呼びなさるとも、主の心。それまで、笑は

れない口ふさけのため、お龜さんは預つて歸りやすよ。
ト又引立てる。おりよ、おみよ支へる。お龜思ひ入れ。傳三留める。
傳三　マア〳〵、待ちなさい〳〵。成る程、云ひなさるなア尤もだが、いとしほなけにお龜さんを。……
モシ〳〵、なんとお龜さんの代りに、このおみよぢやア
みよ　エ、、モウ番頭さん、なんのわたしが
傳三　ハテ、誰ぞお龜さんの（ト思案して）モシ、お袋さん。なんと、お龜さんの代りに、内方にある
龜の香爐、龜といふ名でごぢつけて、香爐を預けては
りよ　そりやモウ、あれで先きさへ得心なら
傳三　マア〳〵、これへお出しなされませ。
トおりよが腰の鍵にて戸棚を明け、中より序幕の香爐を出し
りよ　傳三、シタガ、まだ買ひ切らぬこの香爐、外へやつては
傳三　ハテ、ようござります。こりや元より盗み物。
りよ　エ。（ト傳三ギョッとして）
傳三　サア、なんであらうとマア遣はされませ。（ト無理に取つて）モシ、女中さん、どうもお龜さんは渡

されぬ其代り、こりやこれ、靈龜の香爐といふ大切な物ぢやが、ちつとの内、何とこれを預つて
まつ　そんなら龜といふ名ゆゑ、お龜さんの代りにこの香爐。……ようござえす。預つて待ちやせう。
傳三　アノ、聞き屆けて。……モシ、お袋さん、得心を致しました。お龜さん、嬉しからうな。……サ
ア〳〵〳〵、そんなら、龜の香爐は
ト手柄顔にいろ〳〵あつて、香爐をお松に渡さうとする。この時佐五右衛門、香爐を取り上げ
佐五　イヤ、番頭どの。この香爐は渡されぬ。
ト合ひ方になり、眞中へ出る。お松、傳三、顔見合せ、思ひ入れ。この時向うより立場の太平次、前
幕の形にて出て來る。
傳三　モシ、折角香爐で承知のところ、渡されぬとは、お龜さんを
佐五　イヤ、どちらも渡されぬ。聞いた所が、こりやア與兵衛から起つた事。それに、お龜を連れて行
かうと、廻り廻つて龜の香爐。おりよどのは得心でも、この實親の娘の名、龜の香爐渡すは不承
知。……コレ、女中、相手の與兵衛が代りなら、何なりと持つてござれ。おりよどの、この香爐
は先づそちらへ。（トおりよに渡す。この時太平次舞臺へ來り、門口に窺ふ）。
まつ　ナニ、與兵衛さんの代りなら、待ちなさいよ。與の字のついた物ならば

傳三　夜着か、葭蕎か、夜鷹蕎麥。
まつ　よしの木、さいかち、猿すべり。
傳三　いつそ、ふの字ぢやアどうだネ。
まつ　馬鹿を云ひねえ。有卦にでも入りやアしまいし。……よいワ。何のかのと氣を揉むより、蒔き直して爰の内に
佐五　そんならどうでも
まつ　お龜與兵衛と、睦まじく起請の通り、夫婦になるのサ。（ト起請を見せる）。
佐五　さうしてこなたは、少さいから、お龜と名を附けたのか。
まつ　アイ、七夜の折にお父さんが、附けておくれたそのまんまサ。
佐五　それでは與兵衛と夫婦には
まつ　どうしたとえ。（ト佐五右衞門、以前の臍の緒書を出し）
佐五　長德三年九月五日の誕生、江州千野村、德兵衞娘まつ。
まつ　ヤ。……どうしてそれが。（ト起請を捨て、臍の緒へかゝるを、グツと引きつける。外にて太平次思ひ入れ）。
皆々　ア、モシ、滅多な

佐五　大事ござらぬ〳〵。……ヤイ、お松、わりやアまだおれを知るまいな。四年あとから連添ふ今の女房、おわたが妹。
まつ　ヤア、そんならこなたは、こちの姉聟、（ト起上るを又引きつける）。
りよ　ムウ。すりやこの女中は
かめ　今の母さん
佐五　オヽ、おわたが爲には實の妹。身性が惡さに緣切つて、別れし後は京都にと、噂にきけどどうしたやら、眞人間になつたかと、折々案じておれへの話。思はず爰で出合つても、此方も知らねば、控へる内、最前守りのその中より、取出す臍の緒目にかゝつても、緣者の端と押し隱し、事なく歸らば儘にもと、見る程猶々附け上り、女の身にて筋なき騙り。コリヤ、てんどへ出ると首が飛ぶぞよ。（ト散々に舞臺へ摺附け思ひ入れ）。
りよ　サア、わたしも與兵衞がよもやとは、思へど慥かな自筆の起請。
かめ　そんなら矢ッ張りわたしが失した……それで名宛をその儘に、お龜というて見えたのぢやわいな。
ト起請を取つて懷へ入れる。
佐五　そりや内々で誰ぞ拾つて

傳三　さやうでございます。（ト云ひ〳〵、そろ〳〵奥へ行きかゝる）。

りよ　傳三、待ちや。

傳三　ハアイ。（ト蹲る）。

りよ　與兵衛が留守を附け込んで。お龜と香爐を引上げうと、この頼み手はどこぞにあらうな。

ト傳三ギツクリ。

佐五　それも女をぶちのめし、この佐五右衛門が白狀させて

トしゆろ箒を取る。おまつこれはと逃出すを、足を掻いて打たうとする。この時太平次、ツカ〳〵と入つてこれを留める。傳三、この間に逃げて奥へ入る。

まつ　ヤア、お前は（ト思ひ入れ）。

太平　やかましいわえ。……モシ〳〵、只今これへ來かゝつて、樣子を聞けばこの女は、あなたや内方のお龜さんの、どうやらお繋がりとやら。そんなら萬更他人でも、内證同志でこつそりと、……モシ、お袋樣、さやうぢやァござりませぬか。

りよ　太平次どのゝ、云はしやればそんなもの。騙られたというではなし、この儘去なすが、ナウお龜。

かめ　アイ〳〵。……モシ、父さん、今日はどうぞ堪忍して

佐五　イヤ〳〵、初めて逢つた姉聟が、折檻は女房へ土產。（ト立掛る。皆々隔てる。太平次お松を引立て）。

太平　すんでの事に危ない所へ……おれが來たのはうぬが仕合せ。長居をせずと……キリ〳〵と失しやがれ。（ト思ひ入れあつて突出し、門口を締めようとする）。

まつ　オツト、待つてくんな。そこらに下駄を置いたつけ。（ト太平次下駄を取つて投出し、門口を締める。お松拾つて）なんの、投出さずとよい事サ。……折角巧いと思つたところへ、あの姉聟の在鄕めが、うせたばつかり、張り込んだ、下駄の錢もいま〳〵しい。こいつが一生つまらない。

ト合ひ方になり、お松花道へ行き、取つて返し、門口に窺ふ。

りよ　なんとマア、見さつしやい。怖い世の中ぢやないかいの。

太平　イヤモウ、今時は女でも油斷はなりませぬ。

かめ　わたしやどうせうと思うたところ、父さんが來てござんしたばつかりに、ナア、母さん。

りよ　それに、五年振りでお出での佐五右衛門樣、埒もない事にかゝつて、ろく〳〵お茶さへ

佐五　イエ〳〵、構うて下さるな。おりよどの、わしが今日來ました譯は

りよ　サア、お出での譯も聞きませうが、マア、ゆるりとなされて。コレ、お龜や、今のお禮や何やかや、たんと御馳走申してたも。

かめ　アイ〳〵。
みよ　モシ、お袋様、爰よりは奥がよろしうござりませう。
りよ　いかさま、それがよからう。……サア、佐五右衛門様。
佐五　そんなら、あれでお話し申さう。
りよ　太平次どの、これにござれや。
　ト唄になり、佐五右衛門先きにおりよ、香爐を持ち、お龜、おみよ、奥へ入る。太平次殘り、思ひ入れ。外よりお松戸を明け
まつ　太平次さん。
太平　コレ。（トあたりへ心遣ひあつて、表へ出て）お松、まんまと失敗つたよ。
まつ　見ねえな。十が九つやらかしたものを、あの姉聟の箆棒めが、とんだ所にうしやァがつて
太平　よいワ。とてもお袋めが手離さない樣子なりやァ、わりやァどこぞに隱れて居て、あのお龜めを
　引上げろ。
まつ　そんなら、それさへ首尾よくすれば、わつちがお前に云つた事は
太平　そりやァどうでも。……ヤ、向うへ來るは慥かに與兵衛だ。

まつ　ナニ、與兵衛だえ。
太平　マァ〳〵、わりやァちよつと隱れろ。
まつ　何處にしようかの。
太平　何處といつて、押入れか、緣の下。
まつ　お前も古い事を云ふねえ。この頃まで葺屋町で、團十郎が緣の下、春狂言にやァ押入れへ、杜若が隱れて居たぢやァねえか。
太平　コレ、そんな事を云ふ内、ソレもう與兵衛が爰へくる。（ト無理にお松を連れて内へ入り、兩人うろうろ思ひ入れあつて）大和屋氣取りで爰へ入れ。
　ト押入れへ突込み、戸を締める。跡を元のやうに直して居る。此うち、てんつゝになり、向うより（お松早變り）與兵衛、やつし、尻ばしをり、一本ざし、單羽織を疊んで前へつけ、眞田の三尺帶、藤倉草履にて出て來る。後より供の者、これも尻ばしをり、三尺手拭、草鞋の形にて、風呂敷包みを脊負ひ、菅笠二蓋持つて出てくる。捨ぜりふにて、直ぐに舞臺へ來り、門口を明け、ズツと内へ入る。太平次惚り思ひ入れあつて
エ、、與兵衛さんかえ。

與兵（太平次を見て）太平次どのかえ。（トずつと奥へ行かうとする）。

太平 ア、モシ、與兵衛さん、お前さん、慥か大阪へ

與兵 急な用で行く所を、伏見の船で用が足り、それで直ぐに歸つて來たのサ。

ト、ツンとして行かうとする。

太平 モシ〳〵。わたしやァちつとこお前さんに

與兵 ハテ、用なれば、後の事にさつしやい。

太平 イエ、なにサ。ちつとばかり（ト引留める。これにて是非なく）

與兵 平助。おぬしは奥へ行つてお袋に、用が足りて、伏見から歸りましたと

供者 ハイノ〳〵。（ト奥へ入る）。

與兵 太平次どの、何の用だえ。

太平 サア、その用は、なにサ。……モシ、與兵衛さん、どうも合點が參りませぬ。先度中からお目にかゝると、何かわしへをかしな顔附き。何も此方にこれぞといふ、心覺えはござりませぬが、あるならお宿の者同然、久しく參るこの太平次、なぜ仰しやつては下さりませぬ。モシ、そりやァお恨みでござりますね。

與兵（思ひ入れあつて）ハ、〳〵、〳〵。おらァ又なんの事かと思つたら、そんなら、アノこなさんに、わしの顔附が惡いといつて……なにサ、そりやァこなさんの心だ。何もこの與兵衛が方には

太平 イエ〳〵、有るでござりませう。モシ、仰しやつて下さりませ。

與兵 ハテサテ、心安いこなたとわし、これが斯うといふ事が

太平 イヽエ、ござりませう。與兵衛さん、わしの顔が似ましたらうね。

與兵 ムウ。そりや又誰に。

太平 お前の兄御高橋樣の敵、左枝大學どのに。

與兵 ヤ。（ト思ひ入れ。合ひ方になり）

太平 なぜお隱しなされます。わしの女房は兄御高橋瀨左衛門樣へ勤めました腰元。その御緣にてお前樣が、孫三郎樣と仰しやつて、お小さいからこの內へ御養子にござつてより、あなたを知らず、今日までお宿へ參つて、御樣子を見まするところ算盤嫌ひ、ヤットウノ〳〵がお好きなり、どうでも武家のお胤だと、存じて居るうち兄御樣、非業にお果てなされてより、敵を討たうと思し召し、中兄高橋彌十郎樣は、靈龜の香爐を紛失の、その科ゆゑにお手討とやら。爰こそ日頃町人の、要らざる劍術お役に立ち、與兵衛が敵討と思ふにつけて私しを、御覽じる度に無念のお顏。さてこそあなた

のお心にも、睨まれながら心の嬉しさ。よしない顔にこの面が、似て又くやしさ、くちをしさ。女房の主人はやつぱり御主人。これ程までに思つてゐる、この太平次に與兵衛樣、なぜお心を打明けては

與兵　（思ひ入れあつて）ア、、コレ〳〵、太平次どの。こなさん、そりやァ何を云ふのだ。成る程、脇目で見たならば、兄の敵を討つ心が、有らうと思ふも尤もなれど、高橋孫三郎といふ侍ひならば、敵も討たう。今は道具屋田代與兵衛、町人の身の生兵法。殊に、向うの敵は大名。どうして〳〵、そんな事。そればかりでなく幼年より、養育の恩を捨て、家業を捨てゝは、どうも義理が。

太平　へエ。そんなら養子のこの家を、大切と思し召して

與兵　サア、只商ひに油斷なく

太平　イエ、その商ひを大切にして、義理の親御を大切に、思はつしやる身でこの頃つゞく、夜泊り、日泊り、お袋樣へぞん氣にあたるは

與兵　サア。

太平　愛想をつかされ、勘當うけ、望みを叶へる心であらうが。

與兵　イヽヤ、遊びに身が入つて、母への不孝は酒の科。口には知つて、心に知らぬも、みんな浮氣の

一盛り。直る時には直るであらう。必ず共に太平次どの、異見して下さるな。

太平　（思ひ入れあつて）成る程。それでなけりやァお望みは

與兵　コレサ。そりやァこなた何を云ふのだ。

太平　イヤ、もう聞きませぬ。與兵衛樣、大概それと。（ト思ひ入れあつて）ドレ、一杯おねだり申しませうか。

ト唄になり、太平次ツイと奥へ入る。與兵衛跡を見送り

與兵　あの太平次が、深切らしい今の詞は。……ハテナア。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより若黨曾平、木綿やつし、茶屋男の形にて、早足にて出て來り、直に舞臺へ來て門口より

曾平　與兵衛樣はお宿にて（ト内を覗き）ヤレ〳〵、お宿でござりました。

與兵　オヽ、井筒屋の喜六か。さて何とも云ひ譯が

曾平　モシ〳〵〳〵與兵衛樣、どうも今日はその云ひ譯では濟みませぬ。わしもさうノ〵親方の前が

與兵　サア〳〵、尤もだ。おぬしが内へ濟まぬことは、承知しながら此やうに

曾平　毎日々々釣らつしやるのは、そんならわしがお前の事で、首を縊つて死なうとも、構はつしやら

ぬお心意氣だね。

與兵　イヤ〳〵、さうぢやないが

曾平　イエ〳〵、さうだらう。ハテ、お賴もしいお心だ。それぢやァこの上片時も、もう待つ事は出來ませぬ。花代、雜用、引ツくるめて、サア、今渡して下さりませ。

與兵　コレサ〳〵、そのやうに大きな聲をする事は

曾平　大きな聲をされるのが否なれば、金を渡さつしやいな。

與兵　でも、どうも今といつては。

曾平　この身代で金がなくば、見當り次第金目な物を。（ト奥へ行かうとする。與兵衞留めて）

與兵　待ちやれ。奥にはお袋。おぬしをやつては

ト引戻す。行かうとする。突戻すはずみに曾平もんどり打つて

曾平　アイタ、、、、。

かめ　（トこの物音にて、奥よりお龜出て來り）與兵衞さん、お歸りかいな。

曾平　（起上り）ヤイ與兵衞。投げやァがつたな〳〵。（ト立ちかゝる。お龜留めて）

かめ　モシ〳〵。どこのお方か知らねども、マァ〳〵靜かに。……ヤ、こなさんはアノ、どこやらで。

曾平　オヽ、見た筈だ。いつぞや近江の多賀の社で

かめ　それ〳〵。たしか高橋瀨左衞門樣の

曾平　歩中間の曾平でごんす。

かめ　そんならお前、與兵衞さんの御家來筋ぢやないかえ。それがマァ、なぜこの樣に

曾平　大きな聲をする氣もないが、わしも旦那に別れてから、仕樣が無さに祇園町の、井筒屋へ若い者先度安井の金毘羅で、與兵衞樣に逢ひまして、ツイ一切りと引きつけたが、病み附きの始まりでこの頃毎晩大騒ぎ。その花代、雜用、藝子、みんなわしが承り、銀匁を金に直したら、何のかのと五十兩。催促しても今以て、勘定しないは家來筋、どうもしないと高を括つて、わしに浴せる氣と見えるワ。なんと恐ろしいぢやァないかえ。

ト この内、上の障子よりおりよ、暖簾口より佐五右衞門、出かゝり聞いてゐる。お龜思ひ入れあつて

かめ　モシ、與兵衞さん、今あの人の云うた事、ありやマァ、眞でござんすかえ。

與兵　お龜、おぬしの前も面目ないが、ついした拍子の張合ひから

かめ　そりやアノ、眞實でござんすかいな。

與兵　嘘に外聞缺かれるものかえ。

かめ　（思ひ入れ）。ようござんす。お前の恥はわたしが恥。着類、着替へも頭の物も。……こなさん、ちつと待つてござんせ。

與兵　イヤ、それにやァ及ばない。喜六へ渡す金はある。日野屋の手代に豐後橋で、受取つた五十兩。

ト財布を出す。

かめ　モシ、その金は香爐の

與兵　サア、あつちも急ぐ金ながら、おれが遊びのたまりを、おぬしの物で濟ましては、どうも義理が、

……それだによつて、この金を

かめ　でも、それ遣つては

與兵　ハテサ、おれに任せておきやれ。コレ、喜六（ト曾平心づかぬゆゑ、大きくいふ。曾平惚りゾソレ、

五十兩。（ト財布のまゝ渡す。曾平取つて）

曾平　ヤ、そんならこれを

與兵　花代濟んだぞ。

ト此方を向くはずみに、與兵衛はおりよ、曾平は佐五右衛門と顔見合せ、兩人ちやつと入る。與兵衛

曾平、思ひ入れあつて

曾平　ヤレ〳〵。今の事ぢやァあるまいと、思ひの外に五十兩。

かめ　お前、それでよい事なら、早う歸つて下さんせ。ほんにァタ憎らしい。

曾平　成る程、茶屋の若い者は、下齒には憎まれ勝手。ドレ、そんならわしやァ歸りませう。

ト立上がる。この時、傳三出て來て、曾平が財布をとらへ

傳三　どつこいノ〳〵。この金を貴樣にやァ渡されない。……モシ、與兵衛樣、お前マアこの金を、何にせうとて大阪まで、取りにゆかうとなされました。わしが口入れした香爐の後金ぢやァござりませぬか。それを遊びの拂ひにやつて、此方の金はどうなります。

與兵　サ、それは

傳三　そりやァでは濟みませぬ。まづ、この金は（ト取らうとする）。

曾平　コレサ〳〵。この男は、おれがそれを知るものか。（ト財布を引張る。このはずみに傳三倒れる）。

與兵　コレ〳〵、傳三、明日は屹度都合して、香爐の金は渡さう程に、まづ、あの金は

傳三　なりませぬ〳〵。あの金は此方へ遣らずば、香爐を返してやらつしやりませ。外にも大分望み手が

與兵　サア、尋ね〳〵た靈龜の香爐、外へやつてはこの身の望み

かめ　エ。（ト思ひ入れ）。

與兵　イヤサ、望みかゝつた物ぢやによつて、是非おれが。

傳三　そんならあの金此方へやつて

與兵　どうもさうは

傳三　そんなら香爐は

與兵　サアそれは。

兩人　サア〳〵〳〵。

曾平　（思ひ入れあつて）與兵衛樣。この金お貸し申しませう。（ト合ひ方）。

與兵　ヤ。

かめ　アノ今、憎てらしい事いうて

曾平　サア、折角取つた金なれど、親方の前を明日まで、延ばすはわしが口一つ、聞けば……靈龜の香爐とやら。それさへ手に入る物ならば……五十兩がツイ百兩、儲かりさうな物ならば、與兵衛さん……ソレ、買つて置かつしやりませ。（ト金の財布を渡す）。

與兵　そんなら喜六、その金を。……　忝い。サア、傳三、香爐はおれが貰ひ取つたよ。ソレ、金を受取り

やれ。（ト出す）。

傳三　それぢやア此方の（ト思ひ入れ）。

與兵　どうしたと。

傳三　サア、此方の方もついたといふもの。ハテサテ、よもやと思つた掛け取りが

かめ　打つて變つて、その金を

曾平　貸して歸るが東ッ子。せうびんながら男の端。……與兵衛樣、もうお暇申しませう。（ト表へ出る）。

與兵　そんなら明日、あの金は（ト門口まで來る。曾平思ひ入れあつて擧をひそめ）

曾平　孫三郎樣。あれでよろしう

與兵　コリヤ。……よくござつた

ト門口しやんと締める。唄により、曾平思ひ入れあつて向うへ入る。

ドレ、おれも外から歸つたまゝ、澁い顏のお袋へ、金の話もちよつとして（ト行かうとする、傳三心づき）

傳三　モシ、與兵衛樣、お前、今の仲直り、酒一つ上らぬか。

與兵　ナニ、おれに酒を飲め。

傳三　（德利を出して）加茂川の名酒、ぐつと一つ。（ト袖を捕へる）。

與兵　おきやァがれ。肴もなくつて飲まれるものか。
ト袖を振り切り、唄になり、與兵衛奥へ入る。傳三殘り惜しげに、跡を見送つて思ひ入れ。お龜、氣の毒なる思ひ入れ。

かめ　ほんに、愛想の無い與兵衛さん。……コレ、傳三、惡い事さへしやらずば、わしが酌してやらうわいの。

傳三　お龜さん、そりやァお前、ほんの事かえ。それでは一しほ酒がくつがうとする。傳三フト心づき）イヤ〳〵、この酒をすんでの事に、うぬが手で……オヽ、恐ろしや恐ろしや。

かめ　傳三、この酒がなんで恐ろしいぞいの。

傳三　サア、そりやァ……なにサ、ソレ〳〵、お娘御のお前さんに、酌をしてもらつては、ひよつと罰が當らうかと、それでアノ、恐ろしいわいな。

かめ　なんのマア、その樣な……お辭儀をせずと飲みやいなう。

傳三　イエ〳〵、お辭儀ぢやァござりませぬ。

かめ　そんなら一つ飲みやいなう。（ト又酌しようとする。傳三身を縮めて）

傳三　これは又情けない。（ト思ひ入れ。この時奥にて）

りよ　傳三や〳〵。

傳三　ハイ〳〵〳〵。

トこれをしほに德利を方寄せる。此うち、合ひ方になり、奥よりおりよ出て來り

りよ　オヽ、爰に居やるか。今、與兵衛が話には、日野屋の金を受取つて、香爐の代はわが身へと云やつたが、アノ、ほんに五十兩を

傳三　ハイ、怪しい金を五十兩、たつた今受取りました。

りよ　最前たしかに五十兩。……それに其方も五十兩。どうもわしは合點がゆかぬ。

傳三　そりやその筈だ。一旦外へ

かめ　アヽコレ。（ト思ひ入れ）。

りよ　傳三、その金見せてたも。

傳三　アノ、これでござりまするか。（ト取つて財布出す。おりよ改め）

りよ　ほんに、こりや眞の金。……傳三。こりやわしが預るぞや。

傳三　モシ〳〵、お袋樣、そりやなぜでござりまする。

りよ　最前そなた云やつたには、あの香爐は盜み物

傳三　エツ。（トぎよつとする）。

りよ　サア、でもあるまいが、香爐の出所、その持ち主を同道しや。

傳三　アノ、持ち主を

りよ　連れて見えたら、何時でも、金は渡してやるわいなう。（ト財布を懐へ入れる。傳三思ひ入れ。）

みよ（奥にて）大方、見世にでござりませう。

ト合ひ方、時の鐘になり、おみよ行燈をもち、佐五右衞門一緒に出て來る。

佐五　おりよどの、これにか。先刻の返事はどうでござるぞ。

りよ　オヽ、佐五右衞門樣、先刻の返事と仰しやるわえ。

佐五　ハアテ、あれ程いうたお龜が事。

かめ　モシ〳〵、母さん、わたしが事とは、何でござんすえ。

りよ　ムウ。わしや串談かと聞いてゐたれば、すりやアノ眞實

佐五　知れた事サ。誠でなうて在所から、今忙がしい最中を

りよ　そんならこなさん、眞の心で

佐五　娘お龜を取返しに

かめ　エヽ。（ト思ひ入れ。傳三も思ひ入れ）。モシ、父さん、在所にはお米といふ妹もあるに、なぜわたしを

佐五　なぜというたら慾徳づくぢや。こちの國の殿様の御分地、左枝大學様といふは、今の女房が連れて來た、里松といふ弟の敵ぢや。

かめ　ムウ、その里松が譯は知らねども、わたしをお前が取戻しに

佐五　サア、來た道筋……も話せば解る。その里松が子供同士、頑是もなう鷹を奪ひあうて引裂いた、その科ぢやとてむごたらしう、大學様が直に手討。おのれやれと思うても、あつちは大名、こつちは百姓、口惜しうて〳〵、寢た間もおれは忘れぬに、向うはちつとも構はずに、いかつけなお侍ひめが、こちの内へわせをつて、先達て多賀の社内で、殿様のお目に留つた今出川の道具屋の娘お龜といふは其方が、實の娘と聞き及ぶ。取返して差上げい、金銀は望み、と吐かしたこそ幸ひ、おのれ。大學め、なんでも爰で……福徳の三年目と、早速われを取返しに來たもこの譯ぢや。なんとお龜、嬉しからう。（ト此せりふの中、おりよ思ひ入れ）。

かめ　エヽモ、父さんとした事が、なんのそれが嬉しからう。わきまへも知らぬ時から、こなたのお世話で人並に、成人させてもらうたわたし、今更お前、取戻さうとは

傳三　それ〳〵。こりやァ佐五右衛門様のあまり身勝手。お龜さんを戻す事は、たとへお袋様は御承知でも、マァこの番頭大不承知。なりませぬ〳〵。

みよ　ほんにこりや番頭さんの、いつにない眞實な云ひ様、私が憚りな事ぢやけれど、どうやらこれはりよ　アヽ、コレ〳〵。皆何も云やんな。義理に違うた人ぢやもの、何を云うたとて耳には入らぬ。

傳三　ぢやというてあの様な

かめ　ハテ、何と父さんが云はしやんせうが、云ひ號けの與兵衛さんと、わしや別れて、あのこはらしい大學様へは

佐五　イヽヤ、われが行くまいと、じや〳〵ばつても、おれがやる。もう與兵衛には添はしはせぬワ。

りよ　與兵衛にも愛想が盡きてか。

佐五　知れた事。噂ばかりと思ひの外、先刻のしだらを見た上は、娘は此方へ取戻し、大名のお妾様ぢや。但し與兵衛があの身持で、この身代が立つといふ、母御の請合ひか。

りよ　サア、それは。

佐五　その見屆けぬ聟に、おれが娘と添はしてはおかれぬ。それゆゑ連れて歸るのだ、お龜來い。

かめ　イエ〳〵、わたしや（ト行くまいとする）。

佐五　うせうといふに。（ト無理に引立てる）。

傳三　こりや又無體な（ト取支へるを突退けて、引立てる）。

かめ　アレ、母さん。

ト嫌がる。佐五右衛門これを引立てようとする。この立廻りの中へ、奥より與兵衛走り出で　お龜が手を拂ひ、佐五右衛門を見事に投けのける。

佐五　ヤア、與兵衛か。

傳三　モシ、あの父御めがお龜さんをナ

みよ　無理に連れてと仰しやりますぞえ。（ト此うち佐五右衛門起上り）

佐五　ヤイ。わりや與兵衛、なぜおれを投げたのだ。

與兵　オヽ、投げました。奥で様子を聞いて居れば、この與兵衛が不身持を、いひ立てにしてあのお龜を、取返してゆかうとは、あんまり道が違つた。

佐五　其方が身持を見限つて、娘をおれが取戻すを、なんで道が違つたとは。

與兵　さればサ。わしもお龜も養子の身の上、身持惰弱が目に餘れば、この與兵衛を勘當して、お龜に似合ひの縁を組み、内を立てるも母の料簡。その辨へなく幼少から、くれた娘を引立てゝ、連れ

てゆくとは非業非道。それでも道には違ひませぬか。

佐五　サア、そりやァ

與兵　あんまり直ぐぢやァござるまいぞえ。（ト佐五右衞門思ひ入れ）。

佐五　どうするものだ。そんならそれよ。（ト傳三落ちつきし思ひ入れ）。

傳三　ヤレ、嬉しやこれで

みよ　變らず此方のお龜樣。

かめ　モシ、母さん、わたしややつぱり內方の

りよ　オヽ、娘でなうて、どうせうぞいの。

みよ　わたしらもこれで落ちついたわいなァ。

傳三　イヤモウ、安堵したら腹がへつた。ドレ、茶漬けを一杯してやらう。

みよ　サア、ござんせ。（ト合ひ方になり、傳三、おみよ、奧へ入る。佐五衞門思ひ入れあつて）

佐五　おりよどの、お龜の事はそれなりでも、娘の親へ手向ひした與兵衞、その儘置かしやつては、こなさん、わしへ立つまいがの。

りよ　そりや云はしやんすまでもない。與兵衞はこの場で直ぐに勘當。

與兵　エッ。（ト思ひ入れ）。

かめ　そんなら見かねて今の時

佐五　おれに手向ひしたゆゑに

與兵　アノ、私しを御勘當とな。

りよ　與兵衞、それで望みは、叶はうがや。

與兵　ムウ。すりやこの頃の不身持、不孝も、みんな御承知で

佐五　コリヤ、それを云うては物が無い。矢ッ張りおれを投げたが科。して又、お龜は。

りよ　これも勘當。

かめ　そりや又何ゆゑに

りよ　布はぬきがら、男は女から、夫の身持放埒は、皆女房の粗略ゆゑ。與兵衞が惰弱もお龜が科。それゆゑ一緒に勘當する。佐五右衞門樣、母が無理ではあるまいがな。（ト思ひ入れ）。

佐五　何にもいはぬ、おりよどの。そんならわしが取戻して、大學どのへ上げるといふ、心を推して望みある、與兵衞と一緒に勘當とは、この佐五右衞門が存念足つても……、くれ〴〵他人の聟どの、足手纏ひにござらうが、どうぞ連れ立ち、共々に

與兵　そりやお氣遣ひなされますな。この身の願ひに取りませて

かめ　お前の胸もさつぱりと、晴らしまするが、せめてもの、生みの親への恩送り。そんな事とは露知らず、さつきは恨んで居りました。堪忍なされて下さりませ。

與兵　與兵衛も斯うとはお心を、知らぬ事とて勿體ない、手籠めに致した慮外は眞平。又母人へも詞にて云ふに云はれぬこれまでの御恩を仇な勘當を、願ひし事も身に取つて餘儀なき事と幾重にも。

りよ　コレ、その云ひ譯は、やがてめでたう。

佐五　それ〳〵。マアそれまでは二人とも、不孝顏を見る程腹が立つ。わしやもう直にお暇しませう。

りよ　でももう初夜前。

佐五　イヤ、翌立ちの心支度。宿屋で早う（ト佐五右衞門お龜思ひ入れあつて、氣を變へ）その內上りませう。

ト唄になり、佐五右衞門向うへ入る。この唄のうち、奥より太平次出て來る。三人とも思ひ入れ。

太平　委細はとつくり與兵衛樣、よう勘當おうけなされました。流石高橋の若旦那、さうなけりやならぬ所。

與兵　アヽ、コレ〳〵、太平次どの、不所存ゆゑに勘當受けた、與兵衛を捕へ流石のと、母の手前も何とやら。滅多な事云はつしやるな。（ト太平次へ氣をかねる思ひ入れ）。

太平　モシ、お前はまだわしに

りよ　これはしたり、太平次どの。不孝なゆゑに一時に、勘當したあの二人、明日が日こなたの所へ行かうと、必ず構うて下さるな。……アヽ、彼奴にまだ遣る物がある。（ト合ひ方になり、ちよつと暖簾口へ入り、以前の香爐を持つて來り）この靈龜の香爐はの、おのれが目利きで買うた代物、跡に殘して見る度に、腹が立つては罪障ゆゑ、捨てると思うて彼奴に遣ります。

與兵　ナニ、そりや、その靈龜の香爐まで（ト思ひ入れ。太平次も思ひ入れ）。

太平　成る程、そりや與兵衛さんに、いつち好いた下され物。……モシ、勘當うけたその上に、香爐がありやァお前の十分。口ぢやァ憎いと仰しやれども、これ程までのお心ざし、仇おろそかに思し召しまするな。……サア、大事な物だ、しつかりと（ト太平次、香爐を與兵衛に渡して思ひ入れ）。

與兵　重々厚き御恩の程……お龜、とも〳〵、ようお禮を

かめ　アイ。有り難うござります。モシ、與兵衛さん、お前と一緒にどこまでも、連れ立つ事は嬉しいが、母さんに別れるが、わたしや今更（ト思ひ入れ）。

與兵　そりやおれとても同じ事。いつまで云つても名殘は盡きまい。もうこの儘に……母者人。

かめ　隨分ともに、御機嫌よう。

ト兩人しを〳〵門口へ出る。この時太平次以前の德利を見つけ、思ひ入れあつて

太平　モシ與兵衛樣、お待ちなさい。お詫がすんでお歸りまでは、いはゞ暫しの親子の別れ。ちつとお待ちなされませ。（ト德利を持つて來り、有合ふ茶碗を取つて、おりよが前に置く。兩人は門の外にたゝずむ）。サア、モシ、お袋樣、酒は憂ひを拂ふ玉箒とやら、こんな折にはわつさりと、一つお上りなされませ。

りよ　いかさま。ありやうは先刻にから、持病の

太平　サヽ、お癪なら猶の事。一つ上つておよるがよい。

りよ　そんな事にしませうわいの。（ト茶碗を取り上げる。太平次、德利をよく振つて一つつゞ。おりよ飲み）サア、こなさんも一つ。（ト茶碗を太平次へ渡す）。

太平　アイ〳〵。

ト云ひながら、立つてその茶碗を與兵衛へやる。與兵衛取つて押戴く。おりよ、これをちよつと見る。太平次ニツコリと思ひ入れあつて德利を持つて、行かうとする。おりよ德利を押へ

りよ　待たつしやれ、太平次どの。與兵衛と杯する事はなりませぬぞ。

太平　（思ひ入れ）。モシ、さう仰しやるな。いとしぼなげに、來年お逢ひなされうやら、乃至來々年にならうやら、知れないお別れ。目出たい門出を祝してりよ　イヤ〳〵、勘當した子に杯は

太平　ハテ、あなたは御存じ無い分で

與兵　どうぞお慈悲に私しへ

かめ　お上げなされて下さりませ。

りよ　イヽヤ、ならぬぞ。杯がしたくば、一日なりと、早うその身の望みをば……イヤサ、望まずとても歸つた時は、めでたう親子の杯せう。マアそれまでは勘當の、與兵衛に杯、ならぬ〳〵。

太平　それも聞えて居りまする。あれ程までに仰しやること。

りよ　イヤ、何と云うても

太平　そんならちよつと、てう附けばかりも

りよ　イヤ、どうあつても。

トおりよは德利を押へる。太平次は、いろ〳〵と云つて飲ませたき思ひ入れ。與兵衛は茶碗を持ち、どうぞといふ思ひ入れ。お龜も共々願ふこなし。此うち、後ろへ傳三、頬冠り、尻からげにて、若い者をつれ、お龜へ窺ひより

傳三　コレ、お龜さん。（ト引立てゝ行かうとする）。

かめ　あれえ。

ト これにて與兵衛茶碗を捨て、傳三を引きとめる。若い者これを支へて、與兵衛に組附き、とめる。この内傳三、お龜を引立て入る、與兵衛、南無三と若い者を投げのけ、尻をからげながら、向うへ追つて入る。若い者續いて向うへ入る。この内此方も德利を互ひにせり合ひ、はずみにて打ちこぼす。太平次思ひ入れ。おりよ「アッ」と苦しむ。

太平　モシ、お袋さん。（ト側へより、押へようとして、懷の以前の金、手に觸るゆゑ引出し）　ヤ……こりやゝ（ト取らうとする。おりよ血を吐く。太平次の手にかゝる。太平次手早く財布のまゝ取る。おりよ倒れる）。折角與兵衛に飲ませる毒。……惜しい事をしてしまつた。したが、思はず、五十兩。

ト思ひ入れ。ゴーンと時の鐘になる。戸棚の中よりお松出る。

まつ　太平次さん、よい事をしたの。

太平　コレ。……名を云ふなえ。

まつ　ほんに、こいつは野暮だつた。

太平　マア、誰もうせないうち、爰を早く

まつ　それがいゝねえ。

ト矢張り時の鐘。太平次、お松に行けと思ひ入れ。お松呑みこみ、兩人門口の外へ出て、花道へ段々かゝる。

まつ　時に、聞きねえ。お前の云ひつけた通りに、戸棚の中に、土用の内の溫石を見るやうに、隅の方にちよ〳〵こなつて、なんでもよい間にお龜めをと、氣を付けて居たところが、因果と側にあいつが居るゆゑ、それで擔ぎそくなつた。

太平　おれもあの與兵衛めへ、お袋めが香爐をやつたは幸ひ、手もなく毒酒をくらはせ、おッ殺せば、大學樣に賴まれた規模も立ち、香爐も手に入る上に、あのお龜を大學樣へと思ひの外、お袋めの固意地で、爭ふうちに德利を、ぶつころばして毒酒は段切れ。そのうちお龜も、與兵衛も、どうしてか、うしやアがらない。

まつ　ほんに、そいつは業腹な事をしたの。それでもお前、五十兩〆めて來たぢやアないか。

太平　オヽサ。お袋めが毒でくたばる時、懷にあつた五十兩、此奴はおれが勘定の外だ。

まつ　コレサ。その金の中でわつちを引上げ、どこぞこつそりと妙な所へ、世帶を持たしてくんねえな。

太平　よいサ。そりやア合點だよ。

まつ　合點ぢやアない、早くだよ。……オヤ〳〵、蕎麥を誂へたやうだ。

太平　おきやアがれ。

まつ　そりやアさうと、お前、あのお袋を殺して、むづかしくはあるまいかの。

太平　なにサ、そりやア氣遣ひない。お龜、與兵衞が勘當のその内に、丁度くたばつたから、ソレ、殺し手は與兵衞となるワ。

まつ　成る程。こいつは好い間だの。

ト此せりふを云ひながら、中の間より東の花道へかゝるうち、道具替る。

本舞臺、三間の間、向う一面に玉椿の垣、内より卒塔婆大分に見ゆる。よき所に流れ灌頂、あつらへの古井戸。すべて妙覺寺裏手の體。一つ鉦の念佛にて、道具とまる。

ト時の鐘、蛙の聲。兩人舞臺へ來り、太平次古井戸を見つけ

太平　待ちや〳〵。今くたばる時、血を吐いて、薄穢ない、手をよごした。幸ひ爰に井戸があるワ。ちよつと一釣瓶かけてくれ。

まつ　アイ〳〵。……待ちねえ。釣瓶があればよいが。（ト井戸の側へ來り、覗いて）オヽ、ある〳〵。

（ト着物の前を挾んで、縄釣瓶にて汲みにかゝり、汲めぬ思ひ入れ）。この縄釣瓶といふやつが、いま〳〵しい。汲みにくいものサ。（トやう〳〵に汲み上げる。このうち、太平次、お松を見て思ひ入れ）。もつと先きへ手を出しねえな。

ト太平次へかける。太平次、本水にて手を洗ふ。

太平　もう一杯釣つてくれ。

まつ　まだ洗ふのか。よい加減にしねえな。根ッから釣れるものぢやアない。

ト又汲みかゝる。この内始終一つ鉦の念佛。お松いろ〳〵あつて汲むうち、釣瓶の縄首へまとふ。

まつ　これな、氣障だ。この縄を取つてくんねえ。

太平　ドレ、この縄か。

ト取る振をして、縄先きを捕へ、ぐつと締め殺す。お松アツともがくを、そのまゝ足をすくつて井の内へポンと打込む。チヨンと拍子木の頭。太平次、井戸の内を伸び上つて窺ふ。思ひ入れれよろしく

拍子　（作者　櫻田治助）

幕

六幕目

倉狩峠の場

役名――――問屋人足、與五郎假名孫七。飛脚、與五七。下部、團平。駕籠舁、八八。同、三婦六。山伏、升法印。篠原傳五。太平次女房、お道。與兵衛女房、お龜。道具屋、與兵衛。佐五右衛門娘、お米。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、後ろ黒幕。正面に古宮、黒木の鳥居、神木、その外樹木林。よき所に倉狩峠と書きし榜示。幕の中より雨車、雷の音。夕立の景色にて幕明く。

ト宮の縁先きに、團平、旅奴の形、與五七、序幕の形、八八、三婦六、駕籠舁にて、縁に腰を掛け、雨宿りをして居る。雲助二人、四ツ手駕籠をおろし、此うちへ入り、雨をやめて居る見得。皆々思ひ入れ

皆々　うんらいぐうせいでん。桑原々々。

團平　桑原々々。

八八　コレサ、奴さん。お前、地震と雷をはき違へたのだ。

團平　ほんに、さうであつた。萬歳樂々々々。

三婦　コレサ、この奴さんは。桑原だわな。

團平　ナニ、桑原とはお醫者樣の苗字か。

與五　イヤ、おへないへんぽうらいだ。

團平　へんぽうらいぐうでんとは、雷のまじないであらう。なんと物知りか。

皆々　何を云はつしやる。

與五　時にお前、今話さしつたその女を、お抱へなさるというて、それを尋ねるのかえ。

團平　さやう〳〵。殿大學樣の惚れてござる、お龜といふ女を尋ねるて。

與五　そのお龜なら隨分知つてゐるて。モシ、奴さん、お前もいつぞや見たお方だぞえ。

團平　ほんにさうであつた。おらアどうしてか物覺えが惡いて。

八八　コレ〳〵、與五七どの、一昨日の晩、貴樣や太平次が、木津の渡しから連れて來た、あの娘ぢやアねえか。

與五　ナニサ、あの玉とは違ふワ。お龜といふは隨分知つて居るて。

三婦　待ちやれよ。あとの大榎に雨宿りをしてゐた夫婦巡禮、彼奴らぢやアねえか。

八八　それ〳〵。連れの男は、とんと音羽屋といふ代物だ。

與五　そいつだ〳〵。その男は與兵衛といふのだ。聞けば養母を殺して、お龜と二人、道具屋を駈落ちして巡禮に出たと聞いたが、彼奴等を捉まへれば、どう廻しても金儲けだネ。

團平　イヤモウ、金儲けの段か、お龜を締めて差上げれば、コレ、支度金は五十兩。この通り持つて居る。

ト首にかけた財布を見せる。

與五 そいつは相談物だわえ。もし今云つた夫婦連れが、お龜、與兵衛に極れば、モシ、斯うなされませ。

ト囁く。團平呑み込み

團平 そんなら爰に逗留しようが、して、落ちつく宿は。

與五 斯うなされませ。この峠の立て場に、太平次といふ者がございます。お前、そこへ行つて、待つてござりませ。

團平 ア、、立場の太平次か。よし〳〵。

雲助 モシ〳〵、旦那。今の雨で路が辷ります。峠までお廉く參りませう。

團平 ア、、駕籠か。成る程、まだ鳴りさうだな。酒手で乗せてゆくか。

雲助 お廉く參りませう。

與五 そんなら必ず、太平次が所へ。

團平 合點だ〳〵。

八八 コレ〳〵、儲け仕事なら、おいらも半口。

與五 ハテ、委細はあの宮の内で

三婦 雨をしのいで話さうか。（ト又雷きびしく鳴る）。

團平 ア、、桑原々々。（ト駕籠へ入る）。

與五 ア、、臆病な奴様だ。

ト捨ぜりふにて三人は宮の内へ入る。雲助、團平を駕籠に乗せて、「桑原々々」と云ひ〳〵、向うへ入る。

矢張り雨車、雷きびしく鳴る。向うより、太平次女房お道、世話女房の拵へて、跣足になり、草履を持ち、前垂れを頭へかむり、俄雨にあうたる體。あとよりお龜、與兵衛、巡禮の拵へにて、與兵衛仕込みの杖を突き、行李を背負ひ、同行二人、西國巡禮と書いたる菅笠を冠り、病氣の體。お龜これを介抱して出て來り、花道にて

かめ モシ〳〵、おかみさん。こゝらに人足はござりませぬかいな。このマア、雷さんで、いかう難儀しますわいなア、

みち そりや難儀でござんせう。跡の峠に内があつたでござんせうに。見ればお若い女中さん、ようまア巡禮なされまするな。（トよく〳〵見て）ヤ、お前はお龜さんぢやアござりませぬか。

かめ さう云はしやんすは、お道どの。コリヤマア好い所で。コレ〳〵、與兵衛さん、お道どのに逢うたわいな。

與兵　そりやマア、どうしてこゝらへ來てござるのぢや。

みち　イヤモウ、お話し申せば、いろ〳〵樣子のある事でござりますが、折わるい夕立。マア〳〵、あのお宮の軒下へなりとも、お出でなされませ。

かめ　道中すがらあなたの御病氣、いかう難儀して居やしやんすわいなア。

みち　そりやマア、御難儀でござりませう。マア〳〵、あれへお出でなされませい。

ト お道捨ぜりふにて、二人を介抱して古宮の緣にかけさせる。

與兵　ほんに、マア、どこで知る人に逢ふか知れぬ。イヤモウ、與兵衛が口外せぬけれど、こなた衆夫婦も、大概わしが跡の事も、推量して居るであらう。それはさうと、思ひがけない所で逢うたお道どの、定めし太平次どのも、こゝらへ宿替へしたといふやうな事か、さうか〳〵。

みち　左樣でござりまする。お二人が京都を立退きなされた後、こちの人が在所ゆゑ、急にこのあたりへ引越しましたわいな。

かめ　そりやモウ、二人ながら達者で暮さんして、めでたうござんす。それにつけても、御恩になつた母さんは、息災な事ぢややら。久しう便り音信もないが、わたしや心にかゝつて

ト思ひ入れ。お道こなしあつて

みち　モシ、お龜さん。お前、お袋樣の事、ほんまに御存じござりませぬかえ。

かめ　ほんまに知らぬかとは。アノ母さんが、どうなさんしたえ。

與兵　コレ〳〵、案じられる。お袋樣はどうなされたぞ。

みち　サア、お話し申すも泪の種。お前方の家出なされたその後で、盜人が入りまして、お袋樣は、お果てなされましたわいなア。（ト思ひ入れ）。

二人　エヽ。

かめ　アノ、母さんがお果てなされて　ト泣伏す）。

與兵　コレ〳〵〳〵、そりや何かいの。その盜人がお袋樣をお殺し申したといふやうな事かいの。コレ、さうかいの〳〵。（ト いろ〳〵思ひ入れ）。

みち　アイ〳〵。お宅樣のお金を取らうとした事か、あなたを殺して金まで取つて參りましたが、今以て殺した奴が

與兵　どうしたの〳〵。

みち　知れませぬわいなう。（ト泣伏す。お龜こなしあつて）

かめ　エヽ、おいとしいお袋樣。叶はぬながらも、せめて女子の私なりと、お側にあつたらやみ〳〵と

與兵　かゝる非業な御臨終も致させまいに、何をいふにも兄々の、敵を討ちたいばつかりに、藥の上から大恩うけ、養育ありし親を捨て、家出いたせし二人が不孝。罰の報いで此やうに、日増し重なる持病の癪。草葉の蔭にてさぞやさぞ

かめ　お恨みなされん、お袋樣。

與兵　御免なされて

二人　下さりませ。（ト思ひ入れ。お道こなしあつて）

みち　御尤もでござりまする。お道理でござりまする。母御樣の、お身の成行き、お聞きもあらば、嘸やお悔みなされうと、存じたなれど、申さにや成らぬ事ゆゑに

ト此うち、與兵衛、持病の癪の起りし思ひ入れにて苦しむ。お龜駈け寄り

かめ　ア、、又持病が起りましたかいな。（ト介抱する）

みち　モシ、お龜さん、お藥はござんせぬかえ。

かめ　さいなア。ゆうべの泊りで皆になつたわいなア。

みち　ア、、そりや困つたものでござりまする。どうぞお藥を（ト思ひ入れあつて）ほんに、この先きの在所に、大阪から來てござんす、醫者どのがござりまする。わたしがツイ一走り、藥を買うて參りませうわいなア。（ト身拵へする）

かめ　そんならお前、どうぞ、買うて來て下さんせいな。

與兵　ハテ、この雷に、どうしてマア山路を

みち　ハテ、大事でござりませぬ。ちつとの間お待ちなされませ。わたしが直ぐに買うて參りますわいな。

ト雷きびしく鳴る。お道、お龜の菅笠を借り、これをかざして、とつかはと下座へ入る。兩人あとを見送り

與兵　ヤレ〳〵、マア氣の毒な、この石坂道を、ようマア藥を（ト思ひ入れ）どうも合點の行かぬは、母樣の御最期。殊に、あの太平次が、急にこの在所へ引越して來たといひ、ア、、どうやらこれには

かめ　サア、わたしもさう思ふわいなア。

ト時分より與五七、八八、三婦六、頬冠りにて面を隱し、出かゝりゐて

與五　親殺しの與兵衛、見附けたぞ。

八八　ふん縛る。動きやアがるな。（ト這入れあり）

與兵　ヤア、わりやア上下の與五七ぢやアないか。親殺しの與兵衛とは

與五　養母を締め殺し、逐電した與兵衛。見遁してやらうが、物は相談。そのお龜を渡して行くか。返

事次第で

三人　ふん縛れ〳〵。

與兵　ア、、これ〳〵。滅多な事を云ふまいぞ。どうして母を殺害せう。殊に、お龜を渡せとは、こりやわいら無法を云うて、女房を連れ行かうといふ企みぢやな。わいら寄つたら免さぬぞ。

ト身拵へする。

與五　おきやアがれ。持病に惱むと聞いて居たワ。皆かゝつて締めさつしやれ。

皆々　合點だ〳〵。

與五　お龜はおれが

ト お龜へかゝる。與兵衞息杖にて與五七をくらはす。八八、三婦六立ちかゝる。この時雷きびしく鳴る。三人耳を押へて

三人　ア、、桑原々々。

ト顫ふ。お龜、與兵衞にすがりつく。この時雷きびしく落ちたる音して、神木の杉へ煙硝火立つて、枝二つに折れる。皆々重なりあうて氣を失ふ。與兵衞、お龜をしつかりと抱き居る。空晴れて雷止む。

與兵衞心づき、思ひ入れあつて

與兵　コレ〳〵、お龜、もう夕立も晴れたさうな。アヽ、嬉しやく〳〵。

かめ　(心づき)與兵衞さん。今のはそこらへお下りなされたのかえ。

與兵　アレ、あの杉の木が折れてゐるワ。

かめ　エヽ、あそこかいな。道理こそ嚴しい鳴り音。

與兵　アレ〳〵、今の奴等はあのやうに、氣を失うたと見えるわえ。

かめ　鬼のやうな惡者が氣を失うて、こちらに怪我のないといふのは

與兵　正しく菅家の末葉たる、多賀のお家の靈龜の香爐、所持せし威德か。天の助けか。

かめ　寶の香爐の

與兵　コレ。

、、桑原々々。

ト一塊りになる。兩人見てにつこりと笑ふ思ひ入れにて、お龜の手を引く。直に在鄕唄にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う鼠壁、納戸暖簾、平舞臺に仕立て、上の方へ誂への二階、丸太階子かけ、藁葺の門口。本部屋、藪疊、軒口に燕の棚、草鞋、草履大分、賣藥の札をかけ、辨慶に燒魚をさし、菰か

ぶりの四斗樽、徳利、ちろりを散らし、よき所に誂への圍爐裏、自在に藥鑵をかけ、お米、娘の拵へにて、太平次が木綿のどんざ布子を着て、ひとへ帶にて圍爐裏の火を焚きゐる。茶棚、手桶、長床几、すべて倉狩峠一軒家、立て場の模樣。荒神棚に向ひ、升法印、田舍法印の拵へ、着流しにて、錫杖を持ち、荒神拂ひをしてゐる。太平次、やつし、中月代にて、草鞋を作り居る。在鄕唄にて道具とまる。

升法　南無、家の内、三寶大明神々々々々々。（ト荒神拂ひ納まる）。

太平　御苦勞でござりました。コレ、姐えや、法印さんにお茶を進ぜい。

よね　アイ。（ト圍爐裏の藥鑵より茶をついで持ちゆく）　アイ、お茶上がりませ。

升法　構はつしやるな〳〵。コレ太平次どの、つひに見た事もないこの姐え。こりや何處から來て居ます

太平　アヽ、その姐えが、嗅アめが燒き餅の發端よ。

升法　アヽ、このやうな。成る程、これぢや夫婦喧嘩も出來さうなものサ。

太平　サア、そこが貴樣も素人だ。ハテ、おれが樣な、ひなた臭い男に、なんでそんな娘がつくものかな。

升法　そして、この子は、なんで來て居る。

太平　こりやア何よ。おれが仲間の與五七といふ三度と二人連れで、木津の渡し場へかゝつたところが、

連れにはぐれたこの娘。乞食めらが取卷いて、着て居た物を取上げて、すんでの事に百萬遍をお
ッぱじめる所を、可哀さうだと思ふから、乞食めらを叩き散らして、連れの男が來次第渡してや
る積り。コレ、必ず斯う世話をするを、惡く氣取らぬがいゝよ。

よね　アイ〳〵。なんの惡う存じませう。一昨日の暮れ方、連れにはぐれて難儀な所、お助けなされた
その上に、お内へお連れなされてのお世話。その深切が間違ひの端となり、お内儀さんのいさか
ひが、わたしやお氣の毒に存じますわいな。

太平　ナニサ、嗅アが事は打つちやつて置かつしやいな。

升法　して、姐えはどこの生れ。

よね　アイ、近江の者でござります。

升法　アヽ、御亭主と二人連れで、こりや大和巡りといふやうな事かの。

よね　アイ、マアさやうなものでござりまする。

升法　夫婦が大和といふ事は見通しの法印、やる物ぢやごんせぬ。ちつと時代な臺詞だが、アヽつがも
ねえ。ハヽヽヽ。時に太平次どの、こなさんも京に住んでゐるから、おれが妹、譯があつて、
現在の兄が仲人役のこの法印。相變らぬ夫婦喧嘩は、犬も喰はねえ世の譬へ。もう好い加減に仲

を直して下さいな。

太平　ハテ、兄貴を仲人に頼んだは、まさかの時に口を明かすまいため。貴様の内へ引取つて、折角の挨拶だが、迚もじんじゆくはしめえよ。

升法　サア、そこを一番貰ひに來たの。

よね　さやうでござりまする。お二人のいさかひも、どうやらわたしから起つた事と思はれますれば、お腹立もござりませうが、お内儀さんをお戻しなされて下さんせ。さやうござりませぬと、わたしから先きへ爰のお内を（ト出ようとする思ひ入れ）。

太平　オツとさうはならない。嗚アに代へても、亭主の尋ねて見えるまで、世話をせねばならねえよ。コレ、して、貴様の亭主の名は。

よね　アイ、與五郎と申しますわいな。

太平　エヽ、アノ武家がたに奉公した

よね　よう御存じでござりまする。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより以前の駕籠舁、下部團平を駕籠にのせ、息せきと出て來り、門口に下し

團平　もう爰か。早く來たな。（ト駕籠より出る）。

駕甲　旦那。もう鳴る氣遣ひはござりませぬぞえ。

團平　イヤモウ、今の雷は、そこらへ落ちたやうだ。コレ、駄賃は濟んでゐるぞよ。

駕乙　さやうでござります。コレ〳〵、太平次どの、お客があるぞえ。

太平　オイ〳〵。どこからござつたのだ。

駕甲　何か旅のお方が、女中を尋ねると仰しやつて

太平　ナニ、旅のお方が、女中を尋ねるといつてか。そんなら今噂をした、與五郎といふ人か。

よね　エヽ、あの與五郎さんが來てかえ。

團平　太平次どのはおてまへか。

太平　ハイ、お前が與五郎さんかえ。

團平　イヽヤ、身共は團平と申す。

よね　エヽ、違うたわいなア。

太平　姐え、連れの衆ぢやアねえか。

よね　アイナ。

太平　ハテ、註文が合つたから、連れの衆だと思つた奴サ。
團平　コレ〳〵。身共は與五七と申す男が教へてよこした。
太平　エヽ、與五七かえ。隨分心安うござりまする。
團平　然らばちつと密々に話があるが、なんと内々で、聞いてはくれまいか。
太平　畏りました。隨分承りませう。コレ、姐えや、てめえあそこにある鉈で、粗朶をこなして下さい。
よね　アイ、これでこなしまするかえ。（ト鉈を取上げる）。
太平　ムウ、それだ〳〵。コレ、法印どの、こなたはアノ嚊アを連れて來さつしやい。それ程までに云ふ事だ。もうわしが方はこれぎりに
升法　妹を呼び返して下さるか。
太平　貴樣に免じて得心するよ。
よね　それでわたしも嬉しうござんす。
升法　そりやア有り難い。こなさん、相談事があらば、ゆつくりと話さつしやい。見世はわしが見張つて進ぜう。

太平　オウ、賴みましたぞえ。
駕舁　ドレ、おいらも一寢入りやつて行かうか。
太平　奴さん、斯うござりませ。
ト合ひ方になり、太平次先きに團平を連れ、暖簾口へ入る。駕籠舁は門口へ駕籠を置き、下の勝手口へ入る。お米意氣地なく鉈を持つて、粗朶をこなす。升法印見て
升法　コレ〳〵、姐え、それぢやアゆかねえ。ドレ、おれがこなしてやらう。こなたは行燈でも灯すがよいぞえ。
よね　アイ、お賴み申しまする。ドリヤ、灯りをつけませう。
ト唄になり、お米行燈をたづれ、圍爐裏の火をともし、行燈をつける。升法印粗朶をこなす。矢張りこの唄になり、向うよりお道案内して、與兵衞、苦痛の思ひ入れにて、柳行李と菅笠を持ち、お龜介抱しながら出て來り
みち　モシ、お二人樣、あの灯りの見えまするが、太平次の内でござりまするが、道々もお話し申す通り、昨日女夫喧嘩して、内を出て居りますれば、門からわたしが案内して上げませう。
與兵　何分こなたを賴みまする。

かめ　モシ、孫三郎さん、お前、太平次どのに逢うたというて、また例の惡い顏しなさんすなえ。

與兵　ほんに、大學に似たあの太平次、逢うたら病ひが……ア、、儘よ、お道どの、賴みます。

みち　アイ〳〵。（ト門口へ來て）モシ、ちつと爰を明けて下さんせ。

升法　ヤ。さういふ聲は妹ぢやないか。

みち　エヽ、兄さん、來て居なさんすかえ。

升法　オイ。何事もおれが丸めて置いた。サア、入つたり〳〵。

みち　そりや世話でござんしたなう。

よね　ありやお内儀さんの聲、ようマア戻つてお出でなさんしたなう。（ト門口へ出かゝる。お道見て）

みち　エヽ、なんぢや、こなさんは、アタなめ過ぎた。こちの人の着る物を着て、エヽ、きいた風な。

トびんとする。お米氣の毒なる思ひ入れ。

升法　コレサ、妹、あの女中も、聞けば尤もな譯もあるよ。もう〳〵、燒餅はおれに預けて置きやれよ。

みち　イヽエイナ、みんなあの女子から起つた事ぢやわいな。……サ、モシ、お二人ながら、お入りなされませ。

與兵　いかい世話になりまするて。（ト行李、菅笠を持ち、兩人内へ入る）。

升法　コレサ、妹、あのお二人は、どこからござつたのだ。

みち　サ、このお二人は、お前も知つて居なさんす（トお米がゐるゆゑ云ひかれる思ひ入れ）。

升法　アヽ、何かえ、峠で日が暮れて、難儀さつしやる旅の衆かえ。

みち　マア、そんなお方ぢやわいなア。

よね　エヽ、なんでござりまするかえ。お二人連れのお道中、殊に、先刻の夕立に、途中で日をお暮らしなされたといふやうな事でござりまするかえ。

かめ　アヽ、わたしらは女夫連れの西國。仰しやる通り先刻の夕立に、いかう難儀いたしましたわいな。

よね　それはマア御難儀でござりませう。わたしも夫と二人、この大和路へかゝりまして、連れの男にはぐれまして、爰の内のいかいお世話に（ト挨拶する）。

みち　エヽ、何ぢやぞいな。又しても〳〵、女房のわたしを差置いて、あんまりつべこべと、置いてもらひませうぞえ。（トこれにてお米氣の毒さうに思ひ入れ。升法印この中へ入り）

升法　これはしたり。又腹を立てるのか。どうしてあの女中を見ると、てめえはムカ〳〵するさうだ。

コレ、姐え、逆らつても惡い。マア〳〵、ちつとの内、あの二階へ、上つて居さツし〳〵。

よね　ハイ〳〵。どうぞお内儀さんの心の解けますやうに、お前、詫び事なされて下さりませ。

升法　ハテ、呑み込んで居るよ。マア〳〵、逆らつては悪い。二階へ行つて居さツしやいよ。
　ト合ひ方になり、お米氣の毒さうに二階へ上る。升法印捨ぜりふにて付いて上り、梯子より二階の戸
　を立てゝ、下りて來る。この途端、奥より太平次出て來り、二人を見て

太平　ヤ、こりやお二人ながら、どうして爰へ。マア〳〵、こちらへお出でなされませ。
　ト上敷を敷いて、二人をよき所へ通す。

升法　ア、、太平次どのも、お近附きか。してマア、お二人は

みち　コレイナア、お前も知つて居さんす、京都今出川の道具屋。

升法　エ、、お龜どのと與兵衛どのかえ。その與兵衛樣と申すは、多賀の御家中、瀬左衛門樣の末の弟
　御、いはゞ妹は御家來筋、ようマア尋ねてお出でなされました。

與兵　久しう逢はぬ太平次どの。京都に居る内、大兄の敵たる、大學どのによう似たこなさん、見る度々
　に癇癪の、蟲持のこの與兵衛、お龜を連れて旅先きで、持病の癪に惱まされ、殊に最前お内儀の、話
　で聞いた母の横死、兄は非業の死を遂げられ、又中兄は殿のお手討ち、敵を討ちたいばつかりに、
　不孝に當り家出せし、跡にて義理ある母の成行。思へば、わゝ程な、因果な者がござらうかえ。

かめ　その上、ぬしの持病の癪。道中すがらあそこ爰、宿屋に長う逗留の、その物入りに貯への、路用

もいつか遣ひ捨て、心細い女夫づれ。……ほんに此やうなおはもじい、さもしい事を。
　ト恥かしき思ひ入れ。

太平　そりやモウ、御尤もでござりまする。與兵衛樣のお身の悔み、申さうやうもござりませぬ。養母
　の母御に俄の御不幸。慥かに斯うとは存じたなれど、今日までも口外いたさぬわしら夫婦。して、
　お二人は何國を當に、この大和路へはお出でなされました。

與兵　成る程、この大和路へ參つたは（ト表の方へ思ひ入れあつて）敵とねらふその人は、お上の聞え以ての
　外、東國近江を發足なし、攝州住吉の濱屋敷に、押込め同然と聞いたるが、只大切なは、コレ。（ト柳
　行李の中より靈龜の香爐を出し）兄彌十郎どの預りありし、多賀家の重寶靈龜の香爐、手に入る上はお
　邸へ、とは思へども、御大切を思ふから、兄の朋友幸兵衛どの、兩宮御寄附の金子を繕ひ、勢州
　と聞きしゆゑ、松田氏へ手渡しなし、その上にて兄の仇（ト云はうとする。太平次思ひ入れあり）。

太平　ア、モシ、奥には他聞の者もござれば、滅多にその名を（ト思ひ入れ。與兵衛手早く香爐を行李へしまふ）
　みちあなたは道から持病の惱み、殊に、路用も遣ひ切り、お二人ともに、いかい御苦勞。

太平　ハテ、そりやマア御難儀でござりませう。路用の金は、御相談申したら

升法　コレ、妹、先刻に聞けば、お龜どのとやらは、その大學が妾に欲しいと云うて、こゝらあたりを

探すと聞いたが、もしあのお子を

かめ　エ。

みち　ハテ、滅多な事を云はぬものぢやわいな。

太平　コレサ、女房、てめえ、大儀ながら、醫者を呼んで來ないか。

みち　ほんに、さうしやんせう。あの養珉さんを、お呼び申して來ようかいの。

太平　さうしやれ〳〵。

與兵　イヤ〳〵、心遣ひは忝いが、構うて下さるな〳〵。

太平　イエ〳〵、さうでござりませぬ。大事のお身でござりまする。

かめ　ほんに、何かとお世話になりまする。して、お前一人行きなさんすかえ。

升法　イエ〳〵、あの曲り角に、えて狼が出をるから、わしが送つてゆきませう。

みち　お前と二人なら慥かぢや。さやうなら行て參りますぞえ。

升法　ドリヤ、一緒に行つてやらうか。

（ト唄になり、時の鐘。升法印、小提灯を下げ、お道附いて向うへ入る。あと合ひ方。）

太平　モシ、與兵衛様、蚊がせゝりませう。その圍爐裏の側へ來て、横におなりなされませ。

與兵　さうしませう。免さつしやりませ。（ト寢ころぶ）。

かめ　ア、、又お前、うたゝ寢して、持病の上に風邪ひかうかえ。コレ、蚊がせゝらうぞえ。（トいろ〳〵して）ほんに思ひの外、蚊が少ない事ぢやわいな。

太平　ナニサお前、後になると、目のあけねえ程出やす。

（ト澁團扇にてそこらぢう煽ぐ。お龜、太平次の側へさしより）

かめ　コレ、太平次どの、今あの法印さんが云はしやんしたのは、大學どのから此わしを、尋ねて居るぢやござんせぬかえ。

太平　ア、、いらざる事をあの法印が口走つて。さやうなら申しませうが、この間中から此あたりへ、大學どのゝ家來衆、お前に逢つたゝり勸め込み、あの住吉の濱屋敷へ、妾に抱へて（ト與兵衛へ思ひ入れ。與兵衛もフツと目を明き、聽耳立てる）。今夜も今夜と、お前の支度金に、五十兩持つた奴どのが、暮前がたから泊つて居ますわいの。

かめ　エ、、そんならわたしが支度金もつて、大學どのゝアノ家來が。（ト思ひ入れ）。太平次どの、どうぞわたしを左枝の邸へ、奉公に遣つて下さんせいなア。

太平　アモシ、お前、滅相な事云ひなさる。向うは敵のあの大學。そこへどうして、アノお前を

かめ　サ、その敵の大學ゆゑ、わたしを遣つて身代の、金をあなたの路用とも、又その病をなほすとも
　ト後云ひかれて忍び泣く。空寐入りせし與兵衛起き上つて
與兵　コレ、忝い。嬉しいぞや。路用に盡きたその上に、持病に冒され、この惱み。それを見かねて女
　氣の、現在敵の妾にと、思ひついたる心根が（ト思ひ入れ）。
かめ　どうぞ邸へ、アノわたしを
與兵　てかけ、妾に身を穢し、わしを貢ぐその金は、現在敵の（ト云はうとして思ひ入れあり）。どうも其
　方は遣られまい。（ト思ひ入れ。太平次こなしあつて）
太平　御尤もでござります。先きも多いに、名にあふ兄御の（トあたりを見廻し）敵の邸へ入り込ませ、
　通ひ路あつたら、あなたのお爲に
かめ　サ、及ばずながらお前の手引、これ幸ひ。その身の代は取らずとも、邸の樣子を聞き出だす、願
　うてもないわたしが役目。
與兵　憎しと思ふ現在の
かめ　その仇人に身を穢し
與兵　操を破るも

かめ　お前の爲。
與兵　成就するやう
かめ　そんなら邸へ
與兵　コレ。（ト手を合せ）行つてくりやれ。
かめ　アイ。
　ト思ひ入れ。太平次仕濟ましたりとこなしあつて、三人顏見合せ、ホロリとする。時の鐘、合ひ方にな
　り、奥より團平出で來り
團平　サテ〳〵、きつい蛋だ。うたゝ寢をして豪氣にくはれた。
　トこれにて與兵衛、二枚屏風なして隱れる。
太平　モシ、團平樣、先刻お話しなされた、アレあの娘、やう〳〵とわしが勸め込みましたが、いよ〳〵
　お連れなされますか。
團平　ヤ、何と云やる。お邸に行かうと申すか。それは重疊。行つてさへくれるなら、コレ、支度金は
　五十兩。（ト財布のまゝ出し、太平次の前に置き）お目見えの身のまはりは、後からでも大事ない。サ
　アサア、承知なら早いがよい。幸ひと駕籠の者も殘つて居る。コレ、駕籠の衆〳〵。

ト呼び立てる。下の方より、駕籠舁兩人出て來り

駕舁　ハイ〳〵、お歸りでござりますかえ。

團平　コレ〳〵、歸り駕籠は女中だから、大事に賴むよ。

駕舁　ハイ〳〵、畏りました。

團平　サア〳〵、太平次、早いがよいよ〳〵。（トせり立てる）。

太平　サア、此方は隨分ようござります。コレ申し、お前がお邸へござるばかりに、支度金五十兩。これを路銀に

ト兩方へちよつと見せる。與兵衛屏風の蔭より覗く。お龜思ひ入れ。

かめ　その身の代の五十兩、わたしぢやと思し召し、お前のお身の御用に立て、隨分と息災に、わたしも奉公大切に。緣があつたら、又逢ふ事も

トつか〳〵と門口へ行く。駕籠へ乘り、ワツと泣く。團平も附き、門口へ出る。與兵衛思ひ入れあつて

與兵　必ず共に、時節を待つて

かめ　めでたう本望。

太平　アモシ。

與兵　それ叶はねば

かめ　これが別れの

與兵　ヤ。

ト出ようとする。太平次、門口をシヤンとさす。團平垂れを下し

團平　急がうぞえ。

ト唄、捨て鐘にて向うへかゝる。揚幕より與五七、八八、三婦六を連れ、ひそ〳〵と出で出り、花道にて行合ひ、摺れ違うて、與五七、團平とさゝやき、駕籠は向うへ入る。三人は門口へ來り、樣子を窺ふ。與兵衛、太平次思ひ入れあつて

與兵　いかにこの身の爲ぢやとて、現在の敵大學へ、この金取つて妾奉公。これにて病ひは癒ゆるとも、貧の病ひの大病は（トほろりとする。門口に窺ふ三人スツと入り）

與五　親殺しの與兵衛、見附けた。

三婦　代官所へうしやゞがれ。

ト立ちかゝる。太平次、與兵衛を圍つて

太平　これ、エヽ、與五七。何があなたが親殺しだ。

與五　ハテ、道具屋の母親を、殺して立退く養子息子。親殺しだから連れて行くワ。太平次に構はずと
ふん縛れ。

二人　合點だ。……　來ヤアがれ。

ト與兵衞へかゝる。太平次三人を相手に立廻り、この時捨て鐘になり、向うよりお道出で來り、物騒がしきゆゑ、内を窺ふ。太平次そこに有る鉈を取つて、知らぬ顏にて與兵衞に打ちつける。この鉈與兵衞の膝頭に當る。深疵ついて、たぢ〳〵とする。太平次仕濟まし顏にて、内より八八、三嬶六を投り出すお道これに驚き、狼狽へて門口の木部屋に入る。與五七逃げて出る。太平次追駈けて出て、仕方して、逃げろ〳〵と思ひ入れ。與五七呑み込み、三嬶六、八八に、來い〳〵、と仕方して、向うへ逃げ入る。
太平次、與兵衞を介抱して

太平　モシ〳〵、お怪我はござりませぬか〳〵。

與兵　イヤ〳〵、さのみな事でもないが、コレ、この鉈を打ちつけ、持病の上に、アイタ〳〵。
ト立上がり、思ひ入れ。

太平　エヽ、憎い奴でござります。もう〳〵、この内にお出では御無用でござります。只今のお金もわしが預りまして、お後から持參いたしまする間、お前樣はあの峠の、古宮までお出でなされて、

あれでお待ちなされませ。支度を致し、後から參りますよ〳〵。

與兵　成る程。立て場の一つ家。又ぞろ彼奴等が大勢うせまいものでもない。あの古社へ行つて夜を明かさうか。

太平　さやうなされませ。して、疵口が痛みはしませぬか。

與兵　ナニ、これしきな疵に。（ト手拭にて膝を結ひ、よろ〳〵と立上り）大切なる靈魂の香爐、多賀のお家へ手渡すまでは

太平　御所持でござりまするか。

與兵　この柳行李の中に

太平　必ず油斷なされまするな。おみ足は痛みませうが、ちつとも早く、サヽ、この提灯を、お持ちなされませ。（ト印しのある提灯を與兵衞に渡す）。

與兵　そんなら太平次。

太平　ぢきに參りますぞえ。

ト捨て鐘、合ひ方にて、與兵衞、柳行李と菅笠を肩にかけ、右の提灯を持ち、仕込みを突いて向うへ入る。太平次跡を見送り、金を數へ、思ひ入れあり。

先づ、ざッと彼奴を騙して、お龜が身の代五十兩。道具屋のお袋を縊り殺して、引ッ奪つた五十兩コレ（ト燕の巣の中より紙包みの五十兩を出し）これで都合百兩。……今のどさくさに、孫三郎めが、向う脛に疵を附けて置いたのも、道具屋で育つた與兵衛とはいふものゝ、瀬左衛門が敵の大學を討たうと思ふ程の奴。あのお龜もまんざら無手ではあるまいし、何にしろ、あの孫三郎めを、峠の宮までおびき出し、あそこで殺せば明日の朝までには、狼が喰つてしまふ。それでマア後腹が病めぬといふもの。香爐を引ッたくつて、大學様へ持つて行つて、また金にするワ。イヤ又、斯うまんが直るものか知らぬ。

ト金を一つにして首へかける。此ぜりふの内に、二階よりお米聽き耳立てゝ居る。門口にお道立聽きゐて、さてはト思ひ入れ。お米驚いたる思ひ入れ。

よね　エ、、そんなら先刻に逢うた旅のお二人、知らぬ事とてわたしが姉さん、お龜さんとは先刻のお方。連れのお方は與兵衛さま。夫がたづぬる瀬左衛門様の、弟御孫三郎様。お顔も知らぬばつかりに、殊にあなたが、香爐とたしか云はんしたが、それこそたしか靈龜とやらの

太平　ヤ。それを聞いたか。

よね　こりやもう爰には

ト二階より駈け來り、門口へ出ようとする。太平次、お米を引ッ捕へ

太平　どつこい。逃がしてなるものか。與五郎とやらを誘き寄せ、彼奴も高橋が枝葉の奴、押し方付けてそのあとで、われを賣つて金にするワ。

よね　ア、コレ、せめてゆかしい姉さんに

ト行かうとするを、引っ捕へ、荒縄にて縛り、手拭を口へ挾ませる。この内抜き足をしてお道、花道へ行く。

みち　先きへ廻つて與兵衛様を、お助け申さう。さうぢや。

ト捨て鐘になり、向うへ走り入る。太平次、お米を引立てゝ、丸梯子を上り、お米を二階の柱へ縛りつけ

太平　二三日食はしたも、賣つてやつて金にするつもりだ。われを逃していゝものか。（ト云ひ〳〵下りて戸棚より脇差を取出し）孫三郎めを殺して來る内、その二階にジッとして居ろ。（ト行かうとして）イヤイヤ、おれが留守に、誰がうせまいものでもない。マア梯子を（ト丸太梯子を引き、納戸の中へぶち込み思ひ入れあつて）併し、あゝして置いたら、蚊にせゝらるゝであらう。代物に疵をつけてはならねえ。ドレ、いぶしを仕掛けて置かう。

ト圍爐裏へ松の枝をさしくべ、粗朶をくべて蚊遣りを仕掛ける。時の鐘、蛙の聲になり、向うより孫七の

與五郎、木綿やつし、脚絆、草鞋、一本差し、菅笠を持ち、風呂敷包みを背負ひ、スタ〳〵と出て來り

與五　ア、、向うに見える灯りが、峠の一軒家であらう。彼處へ行つて聞き合せたら、知れる事もあらうと麓の噂。一船違つたばつかりに、あのお米を見失ひ、何處へ行つて居る事やら。惡者の手へなど掛らねばよいが。ア、コレ、心がゝりな事ではあるぞ。(ト云ひ〳〵門口へ來る。太平次はいぶしを仕掛け、身拵へして門口へ出かゝる)。ハイ、お賴み申しませう〳〵。

トこの聲を聞き、驚き、行燈の火を吹き消し、脇差を後ろの方へ差込み、思ひ入れあつて

太平　アイ〳〵。何處からござつた。

與五　イヤ、わしは旅の者でございます。(ト思ひ入れ)これはしたり、暗い内でございますね。

太平　コレ〳〵、爰は旅籠屋ではござらねえ。泊りなら、外を賴まつしやい。

與五　イエ〳〵、あへて泊らうといふのでもござらぬが、ちつとわしは、人を尋ねる者でござるて。

太平　エ、人を尋ねるえ。そりやァ誰を尋ねさつしやる。

與五　ハイ、道連れの女にはぐれましたが、もしこゝらへ來はしませぬか。心當りがあらば、敎へて下さりませ。

トこの聲を聞き、二階にてお米あせる思ひ入れ。太平次思ひ入れあつて

太平　エ、女の旅人かえ。そりやァちつと、心當りがごんすの。

與五　知つてございますか。

太平　隨分、知つて居ります〳〵。(トこれにてお米逢へると心得、嬉しきこなし)。

與五　して、その女は、爰の内に來て居りますかえ。

太平　イエ〳〵、爰の内には居ませぬ。この近所の狩人の内に來て居ますて。(トこれにてお米又氣を揉む)。

與五　ア、、近所に行つて居ますかえ。

太平　さやう。年の頃は廿歳ばかりな女でござらう。たしか道連れは與五郎といふ人だげな。

與五　さやうでございます。卽ちわしが與五郎でございます。

太平　エ。こなさんが與五郎どのかえ。

與五　左樣でございます。

太平　そんなら斯うしませう。わしやァ近所に寄合ひがあつて行きますが、幸ひ道だから、その狩人の家へ寄つて、その女を連れて來て進ぜうか。

與五　ハイ〳〵、それは忝うございます。なんならわしが參りませう。

太平　どうして〳〵。谷川や小坂の三つも越えにやァ行かれぬから、どうして知れはしませぬ。わしが

連れて來てやりませう。行つて來るうち、留守を賴みますよ。

與五　隨分お留守を致しまするて。

太平　蚊がせゝらば、粗朶をくべて、燻さつしやりませ。直ぐに行つて來ます。

與五　御苦勞でござります。

太平　（ツカ〳〵と行きかゝりしが、立戻つて）コレ、旅の衆、わしが歸るまで、必ず二階へ上らつしやるなよ。

與五　畏りました。

太平　ドレ、一走り。

ト時の鐘、山颪しになり、先きの方へも氣遣ひ、後ろへも心を殘し、思ひ入れあつて、花道へ足早に行く。向うより與五七、八八、三婦六、ウソ〳〵出て來り、行き合ひ

與七　太平次か。

太平　コレ。（ト八八に囁く。二人は思ひ入れして、舞臺へゆき、下手の藪へ入る）。

與七　そんなら引出し

太平　コレ。手傳つてもらはう。

ト兩人向うへ走り入る。與五郎草鞋を脱ぎ

與五　ヤレ、嬉しや。あの男の云ふ通りでは、お米は爰へ連れて來るに違ひない。シタガ、早速に行くへが知れたので、アヽ、安堵したわえ。（ト内を見廻し）ハテ、山家といふものは、灯もともさないで、行燈は何處にあるか、勝手は知れず。……エヽ、こりやきつい蚤だ。そしてマア、夥しい蚊だぞ。コリヤ、亭主が歸るまで、圍爐裏へ燻しを仕掛けようか。

ト誂への合ひ方、捨て鐘、時鳥、蛙の聲になり、與五郎圍爐裏へ差寄り、粗朶をいぶしつけ、煙草を吸ひつける。この時燕の巢に小鳥チヤワ〳〵といふ。惝りして

なんだ。チヤ〳〵クチヤいふは。アヽ、燕の巢だな。

トこの時足許へ鼠出て駈けあるく。また惝りし

アヽ、氣味の惡い。蛇ぢやアねえか。（トよく〳〵すかし見て）ハヽア、鼠だな。いかさま、鼠の出さうな内だ。シイ〳〵。

ト煙管にて鼠を追ひ散らす。鼠二階へ逃げあがる。お米下を見て、いろ〳〵身をもがき、思ひ入れ。

ハテ、もう歸りさうなものだが、大分手間取れるな。アヽコレ、どうぞ早くお米に逢うて、安堵したいものだが、おれよりはあの女が、さぞ案じて居るであらう。ハテ、早く逢つて落ちつかせたいものだ。

トこの豪詞の度々、お米思ひ入れにて泣き倒るゝ途端、簪落ちる。鼠それを咬へたまゝにて欄間を走り、よき所より簪を落して、鼠は逃げて行く。與五郎また悔りして

アレ、又、何か落ちたな。百足か。守宮か。モウ〳〵、蛇は御免だ。

ト燃えさしの薪を持つて、あちこち見廻す。簪を見つけ、拾ひ取つて

ヤ、こりや簪だが、アヽ、こりや鼠が引いたと見えるわえっ鼠めが簪を引く位なら、こゝの内は男ばかりの住居とも見えぬ。(ド燃えさしにて、簪をよく〳〵見て)ヤ。こりやこれ、この間お米がさしてゐた八つ丁字の紋所。これが爰にあるからは、もしやお米が。(ト思ひ入れあり)。今の亭主が狼狽てた素振り、行きかゝつて立戻り、必ず二階へ上るなと、氣を附け行つたが、どうも合點が(ト燃えさしをすかし、二階を見て)何やら二階に。

ト思ひ入れあつて、窺ひ〳〵二階へかゝり、上らうとする。梯子が引いてあるゆゑ、あちこちとして、崩れ壁に蹈みかけ、やう〳〵二階へ上り、お米を探り見て

さてこそ女をむごたらしく(ト猿轡を取る。お米泣く)。コリヤ、お米か〳〵。

よね よう來て下さんした〳〵。(と大泣き。與五郎制して)

與五 コリヤ〳〵、聲が高い〳〵。

ト繩を解き、介抱して、二階の戸板をおろし、これを踏まへる思ひ入れして、戸の桟をふまへ、二人とも下家へ下り、介抱する。

よね 孫七さん、爰を早う、退いて下さんせ〳〵。(ト泣き聲にて引立てる)。

與五 コレ〳〵、お米、どうして其方は

トこの時後ろの毀れ壁、ばら〳〵と音して、ヌツと手を出し、八八、半身入らんとする。お米「ワツ」と驚く。與五郎刀を引下げ、お米をかゝへ、屹度窺ふ。八八、南無三と心得

八八 ワン〳〵〳〵。(ト犬の眞似して、ソツと身を引く。與五郎思ひ入れあつて)

與五 ハテ、犬にしては

よね エ。

與五 嚴しい物音。

トまた鼠出てお米が裾にまとふ。

よね あれえ。(ト悔りして、與五郎にすがる。與五郎思ひ入れ)。

與五 エヽ、箒棒め。鼠だわえ。……コレ、お米、氣をしつかりしろ。

ト思ひ入れ。時の鐘にて、この道具をぶん廻す。

本舞臺、元の古社になる。爰に與兵衞、最前の提灯を松の枝に掛け、立ちかゝつて居るを、お道留め居る見得。時の鐘にて道具とまる。

みち　ア、モシ、御尤もでござりまする。どうぞ只今申した通り、お立退きなされて下さりませ。

與兵　すりや、太平次は大學方の犬となり、香爐まで奪ひ取らんがため、この社まで引出だし、我れをうま〳〵騙し込み、爰で殺さん企みよな。

みち　サア、その悪企みある太平次、折わるうお前の御持病。その上お足の怪我といひ、大切なる御所持の香爐。目立たぬやうに、ちつとも早う

與兵　イヤ〳〵、此處に止まつて、あの太平次がうせるを待つて

みち　サア、御尤もぢやが、大事のお身、どうぞこゝを

與兵　逃げ走るこそ卑怯未練。殊に、脛には思はぬ疵。歩行叶はぬその時は、若しやみ〳〵と

ト無念の思ひ入れ。お道縋つてこなし。捨せりふにて東の口より篠原傳五、半纏、股引、大小、旅形の中間一人、消えたる弓張りを灯し、中間、四つ手駕籠をかつぎ、スタ〳〵と出で來り

傳五　不調法千萬、この山道で灯を消して堪るものか。

中間　イヤモウ、石につまづきまして。

傳五　これは一向足許が見えぬワ。（ト云ひ〳〵、舞臺に來り、提灯を見つけ）アレ〳〵、灯があるワ。サアサア早く、灯を借りて參れ〳〵。

中間　ヘイ〳〵、畏りました。コレ〳〵、ちよつと灯を貸さつしやい。

みち　ハイ〳〵。（ト一向取合はず）。モシ、どうぞ太平次が

ト與兵衞をなだめるうち、傳五中間、灯を移す。お道捨せりふにて太平次〳〵々々と云ふ。

傳五　これは忝うござつた。（ト禮を云ふ。お道捨ぜりふにて聞きつけぬ思ひ入れ）。

みち　御尤もでござりまするが、太平次が

ト與兵衞を落さんとする思ひ入れ。傳五、太平次といふ事を聞つけ、殊に、提灯に倉狩峠立場太の字の印しあるを見て、最前より目をつける事あつて

傳五　コレ〳〵。聞けば、貴樣達は太平次々々々と女中が云やるし、殊に、提灯の印しといひ……コレおてまへ達はこの峠にて、立て場の太平次といふ者があるを知つてお居やるか。（ト兩人思ひ入れ）。

與兵　太平次を尋ぬるお侍ひ樣。して、あなた樣は。（ト急いて聞く）。

傳五　身は左枝家の侍ひぢや。

與兵　すりや、大學が……アイヤ、大學樣の御家來でござりますか。

傳五　如何にもさやうぢや。只今聞けばおてまへ達は、太平次々々々とお云やるが、若しや身寄りの

みち　ハイ〳〵。私しは太平次が女房でござりまする。

傳五　アノ、おてまへが……ハテ、よい所で逢ひました。道理こそ、その提灯の印し、倉狩峠立て場の

印し、殊に、一軒家と聞きましたが、して、太平次は

與兵　ハイ、太平次はわしでござりまする。

傳五　すりや、太平次夫婦の衆か。これはよい折柄に逢ひ申した。卽ちおてまへ方へ、主人よりの書狀。

（ト首に掛けたる狀箱を渡す。與兵衞受取り、お道は揚幕の方へ心づかひ、封を切らうとする）。イヤ〳〵、

御狀は渡したが、まことお手前太平次かな。

與兵　さやうでござります〳〵。

傳五　成る程、提灯の文字と申し、相違ない。とくと見さつしやい。（ト提灯を差出す。與兵衞狀を開き）

與兵　「飛札を以て申し遣はし候、かねて其方事、御主人のお顏に似寄るを幸ひ、高橋血筋の者共、何

れに罷り在るとも、手段を以て尋ね出し、お賴みの通り計らひくれらるべく候、然れども、大學

之助樣事、大殿の咎め立てによつて、攝州住吉の濱邸にござある間、急ぎ住吉邊に參り、折を窺

ひ、お目見え致さるべく候、急ぎの道筋、旅駕籠一挺、近習の者差添へ遣はし候、月日、太平次

へ、大學之助役人中。」……（ト讀む、お道思ひ入れ）。すりや太平次を住吉まで迎へのため

傳五　卽ち役目は篠原傳五。サヽ、太平次にはこの旅駕籠にて、これより彼の地へ同道いたしたい。

與兵　すりや、大學樣より太平次を、アノこの太平次を攝州へ（ト お道と顏見合せ、思ひ入れ）

みち　大學樣の迎へとあらば、もしや御身の……サ、氣遣ひなれども、急なこの場。天の助けのあの旅

駕籠、どうぞこゝを

與兵　（こなしあつて）左枝の家へ近寄るは、願うても無き好き幸ひ。こゝから直ぐに。

ト行李を抱へ、思ひ入れ。向うバタ〳〵と人音する。傳五見て

傳五　この山中にて夜中といひ、烈しき人音。山賊などの難儀も如何。サヽ、少しも早う。（ト介抱して

與兵樣を駕籠へ乘せ）大事の客人、心をつけて。

みち　そんなら早う、モシ……跡は女房の此わしに。

傳五　サ、太平次どのはお館へ。

與兵　先きも氣遣ひ、跡へも心が（ト向うを見て思ひ入れ。又揚幕にて人音する）。近くに人音。慥かに太平次

みち　アコレ。サア、太平次どの。

與兵　あなたは御苦勞。

傳五　急げ。

ト垂れを下す。捨せりふ、捨て鐘になり、提灯持ち先きへ立つて、傳五駕籠に附添ひ、東の方へ行く。向うより與五七駈けて出て、舞臺を窺ふ。後より太平次、息せきと出て來り、この時、駕籠は東の歩みより中の間を通り、揚幕へ入る。お道思ひ入れして、小田原提灯を宮の軒につるし、菅笠を宮の脇へ立てかけ置き、思ひ入れあつて宮の中へ入る。兩人花道にて

與七　コレ〳〵、太平次、あの宮の軒に提灯が吊してあるぞよ。

太平　そりやァ慥かにおれの内の提灯であらう。

與七　なんだ。倉狩峠立場灸の字。

太平　先刻與兵衛めに貸したのだ。コレ、人違ひをしめえによ。

與七　合點だ〳〵。

ト二人ながら窺ひ〳〵、宮の際へ來て、太平次菅笠を見つけ、取上げて

太平　西國巡禮同行二人……違ひなし。これだ〳〵。

ト與五七を引寄せ囁く。呑み込んで、提灯を切つて落す。宮の戸を明け、太平次切つて入る。バタ〳〵

太平　先刻與七に渡した賃金は、ソレ。

與七　合點だ〳〵。

ト二人ながら窺ひく、宮の際へ來て、太平次菅笠を見つけ、取上げて

太平　西國巡禮同行二人……違ひなし。これだ〳〵。

ト與五七を引寄せ囁く。呑み込んで、提灯を切つて落す。宮の戸を明け、太平次切つて入る。バタ〳〵

と物音してお道手を負ひ、太平次に縋り

みち　コレ、太平次どの。

太平　や、わりや女房か。

與七　そんなら内儀か。

みち　エヽ、こなさんは

太平　うぬは與兵衛と密夫してうせたな。して、あの野郎は何處へかくした。それを吐せ。（ト引附ける）。

みち　ナニ、密夫とは、深切な、わしに悪名つけるのかいな。現在主筋の與兵衛様を殺し、寶の香爐を手に入れんとは情けない。コレ、こなさんの企みの程、聞いたによつてお知らせ申し、こゝをお通し申したわいな。

太平　すりや、與兵衛めを逃がしたか。エヽ、亭主の罰を思ひ知れ。（ト踏みにじる。お道苦しみ）

みち　罰も報いも知りながら、お袋様を無理殺し。その時からのその小指。こなさん、お主を

ト云はうとするを酷く踏みつけ

太平　それを知られちやア、女房でも助け置かれぬ。さりながら後も氣遣ひ、荒ごなしは濟んだ。與五七、嚊アを殺らして來い。

與七　合點だ。こなたは早く。

太平　エ、、無駄骨を折らしやアがつた。

ト ごん〳〵になり、太平次引返して向うへ入る。

みち　ア、コレどうぞ、與兵衛様を

ト 立寄る。與五七引きつける。

與七　どうで死ぬなら、一思ひに

ト 抜いてぶつかける。お道小石を取つて打ちつける。與五七、目へ砂の入りし思ひ入れにて、捨せりふにてあちこちとする。お道よろぼひ上る。禪のツトメになり、向うより升法印、小提灯を下げ、スタ〳〵と出て來り、この體を見て與五七を突退け、お道を介抱して

升法　ヤ、こりや、妹か。何奴がこんなに斬つたのだ。コレ、氣を慥かに持て。この野郎めが斬つたのか。但し外に相手があるか。

みち　法印どの、太平次どのが酷たらしく、ソレ、その男と二人して

升法　そんなら此奴が

與七　ア、コレおらア

ト 行かうとする。立廻り、屹度なり、これより禪のツトメになり、兩人搦み合ひのタテあつて、落ちたる刀を取つて、與五七をしたゝかに斬る。ウムと倒れる。お道うめく。升法印駈けより

升法　コレ、妹、氣をしつかりと。（ト介抱する。お道苦しみ落入る。升法印思ひ入れあり）。南無阿彌陀佛。これといふのも（トよろぼひ逃げる與五七を引きつけ）うぬ、太平次め、妹の敵、あとでうぬを。（ト口惜しき思ひ入れ。與五七逃げんとするを引ッ捕へて）うぬも同類。

與七　ヤ。

升法　動きやアがるな。

ト 屹度引敷く。この見え、よろしく道具廻る。

本舞臺、以前の立て場の茶屋。この道具に戻る。

ト 捨て鐘、忍び三重にて、與五郎、お米に草鞋を穿かせ、逃げんとする見え。

與五　すりや、こゝの亭主が、お龜どのに連れ添ふ孫三郎様を殺し、御所持の香爐を大學方へ、遣はさうと云うたのぢやな。

よね　アイ。まだその上にお前の事。與五郎といふも高橋の、枝葉と云うて居た程に、早うこゝを、立

退いて下さんせ〳〵。

與五　ちつとも早く孫三郎様の、お跡を尋ね、敵討のお力とならにやならぬ。サ、このまゝに。

ト捨て鐘にて、與五郎、お米を手を引いて、行かうとする。向うより太平次、スタ〳〵と戻り來り、ズッと内へ入る。兩人悔りする。太平次窺ひ見て

太平　こりやァ留守を賴んだ旅のお人かえ。

與五　ハイ。御亭主、今戻らしつたか。（ト お米を後ろへ隱す。お米わな〳〵顫へて居る）。

太平　さぞ待ちかねてござらうに、よく蚊を燻してござればよいに〻（ト暗がりの思ひ入れにて、挨拶する。

與五郎身拵へして、居爐裏の際へ行く。お米に落着いて居ろといふ思ひ入れ）。　アコレ、行燈もそこへ出して置いたに。（ト行燈を尋ね廻る）。

與五　ナニサ、決して構はつしやりますな。

太平　コレ、旅の衆、今に向うから連れの女を送つて來る筈だ。こなたが尋ねて來た事を聞いての、イヤモウ、大きに嬉しがつての。ア、、もう今に來ませうよ。

トこの臺詞中、暗がりにて探り寄つて門口へ栓さしをして、刀をソッと拔いて、軒に吊せし草履を探り取つて、寢刃を合せ、與五郎、太平次が空言を云ふと思ひ、にた〳〵笑ひ居る。お米、この傷りを

聞いて、わな〳〵顫うて與五郎に取附く。

與五　そりやァ大きに、お世話でござりました。

太平　ナニサ、人の世話は人がしないで誰がするものだ。……エ、、きつい蚊だ。ドレ、マア、灯をつけて進ぜよう。

ト與五郎に探り寄つて、胸倉を取つて白刃を差しつける。この時圍爐裏の蚊燻しパット燃え上る。時の鐘。與五郎、太平次を振り離す。お米、與五郎に縋り思ひ入れ。太平次思ひ入れあり。

太平　ヤァ、その女は

與五　今しがた來ましたよ。

太平　ヤ。

與五　この女は向うから、送られて來ましたよ。

太平　ア、、そんなら、送られて、その女が

與五　アイ。

太平　そりやァ早く來ましたの。……留守を賴んだ旅の人、二階を見るなと此方から、云つたを危ぶみこなさんは（ト思ひ入れ）。

與五　貴樣の歸るその間、まぢ〳〵獨りぽつねんと、しても居られず二階から、話し相手に呼んだのサ。

太平　そこでこなさんが。……さぞ退屈でござらうよ。

與五　ナニサ、蚊にせゝられて眠りは出ず、猫より大きな鼠の騷ぎ、家鳴り、地震がめつきゝ〳〵。壁の崩れへ犬は這ひこむ。

太平　ヤ。

與五　なんだか不氣味な、お住居だ。

太平　それサ、海道端と言ひながら、人里遠き一軒家。

よね　わたしを泊めて孫七さんを、殺さうといふ惡心は

太平　賴まれた。

與五　エ。

太平　高橋由緣の奴等なら、枝葉を枯しくれろとある、大學樣に賴まれた。

與五　すりや、大學が指圖を受け

よね　身寄りの者を尋ねるとや。

太平　三度飛脚の太平次が、大學樣に賴まれて、いはゞ國主の御名代、與五郎われをぶち殺し、お米は

賣つて金にする。怪我せぬやうに此方へ寄れ。

與五　扨ては當所に出張して、高橋身寄りを尋ねる奴、助け置いては孫三郎樣のお爲にならぬ。よい所へ來合せて、大學一味のおのれ等、こゝで逢うたが身の幸ひ。命は貰つた。覺悟をしろ。

太平　何を小癪な、青二才め。お米も側で邪魔すると、不便と思へど側杖に、惜しい物だが太平次が、名代に討つ返り討。頃も幸ひ皐月闇、倉狩峠の土となれ。

よね　エ、憎てらしい、あの一言。

與五　お米は後に構はずと、麓の方へ怪我せぬやうに

よね　どうして見捨てゝ

太平　阿魔めは遣らぬ。（ト駈寄る。與五郎隔てる。立廻りあつて、太平次を引敷く）。

與五　サア、動かれるなら、動いて見ろ。

ト屹度なる。このとき壁の崩れより、八八、三婦六、竹槍を持ち、窺ひ居て、與五郎をしたゝかに突く。

與五郎「ウム」と倒れる。お米思ひ入れ。

よね　ヤア、孫七どの

ト寄らうとする。太平次、お米を引据ゑる、これより捨て鐘、忍び三重、時鳥、蛙の聲。與五郎起上が

り、切り拂ふ。八八、三婦六、竹槍にて與五郎へかゝる。三人立廻り、太平次、お米を引寄せる。お米、太平次を搔きむしる。此うち、與五郎、二人を切り倒し、太平次が方へ切つて來る。太平次驚き、火入を目潰しに打ちつける。與五郎たぢろぐが太平次切り下げる。お米駈寄るを、引きつける。與五郎よろぼひながら、切つてかゝるはずみに、お米よろ〳〵として、與五郎が刀にて誤つてお米を斬る。お米苦しみ倒れる。太平次、お米が疵を見て

太平　ヤ、大事の玉を疵物にしやァがつた。もうこれぢやァ此奴も引け物だ。……オヽ〳〵、どんざ布子を血だらけにした。（トいろ〳〵見て）アヽ、惜しい物だ。

トお米を切り下げる。これより二人を存分に切つて、トゞ與五郎を切り倒し、乘つかゝり、立ちより、お米を引きつけ、脇腹へ刀を突込む。

騙し込んだる孫三郎めは危く助かり、いらざる爰へ尋ねて來て、思ひがけないこの死樣。併し逃げてもあの孫三、後から殺してやる程に、うぬら夫婦は連れ立つて、地獄の道の先觸れに、死出の山から三途の川、手に手を取つて、うしやァがれ。

ト所々にて鷄の聲。明六つの鐘。日の出、東の方の霞板へ出る。空に烏群がる。太平次見て

アヽ、東が白んだ。ハテ、夏の夜は

ト刀を拔き、直ぐに與五郎の胸許へ突立てる。與五郎苦しむ。お米落入る。太平次、足にとまりし蚊を追ふとて、平手に太股をぴたりと打つ。これを木の頭。

もう明けるさうだ。

ト木のキザミ、止めの刀。明け六つの鐘。途端、一度に、

ひやうし　幕（作者　勝俵藏）

七幕目

大切

安井福屋の場
合法庵室の場
敵討の場

役名＝仲居、お縫。看屋、五郎助。下部、團平。坂本權平。篠原傳五。彦根嘉仲太。蟹山伴六。質屋手代、善助。烏本丹八。仲居、おりく。同、おくら。關口多九郎。道具屋娘、お龜。道具屋、與兵衛。彌十郎妻、皐月。修行者、合法。立場の太平次。左枝大學之助。

本舞臺、三間の間上の方へ寄せて誂への枝折門。福屋と書いたる懸け行燈。一面の建仁寺垣、うし

ろ、中二階、軒に伊豫簾、團子提灯吊し、建仁寺垣より舞臺へ見越しの楓。その外、庭樹、梢ばかり見える誂への道具。幕の内より舞臺へ床几三脚。こゝに關口多九郎、着流し、大小にて酒飲み居る。善助、質屋の手代、一軸の風呂敷背負ひ、おりく、おくら、拳を打つて居る。跪り地にて幕明く。

りく　ゴウサイ〳〵、スムユウ、リヤン。（トよろしくあつて）オツト、善助さん、お助け。サア〳〵、一つ飲ましやんせ。

善助　今の手一つ取りそこなつた。負けぢやアないく〳〵。

くらぢやというて、リヤンというて、四つ出しなさんしたぢやないかいな。

善助　イヤ。リヤンではない、ワンだから、四つ足は當り前だ。

多九　おきやアがれ。コリヤ善助、一つ飲みやれ。……イヤ、飲むといへば、仲居のお縫めが居ぬワ。酒が浮かぬ。何處へ參つた。

りく　あのお縫さんは、お客を送つて、そこまで行きましたが、もう歸るでござんせう。

くら　多九郎さんのきついお案じ、こりやお縫どのに

多九　イヤ、又惚れるも無理ぢやアない。美しい仲居め、彼奴といふ當も無くつて、毎日々々酒飲みに來ようか。誰ぞ呼びにやれ〳〵。

善助　呼びにやれといへば、太平次どのは、今日こゝへ來る約束ぢやアござりませぬか。

多九　オヽサ、是非參らねばならぬといふ譯は、身共を斯樣にお取立下された、大學樣の御用もあれば

善助　サア、私しもお話し申して置いた、彼の質に取つて置いた一軸の理窟で

多九　ハテ、その儀は何れ身共が、太平次に逢ひさへすれば解る事だ。

善助　さやうなら、碇をおろして待ちませうか。

多九　ハテ、お縫めは待たせ居るな。コレ、誰ぞ見て來てくれぬかい。

りく　ほんに、きつい惚れやうではある。そんならちよつと（ト花道を見て）おくらどの、あの提灯は内のぢやないかいな。

くら　ほんに福屋と書いてある。ありや慥かにお縫どのぢやわいな。

多九　ドレ〳〵。ほんに、提灯の振り附かせやうまで、粹に見えるて。

りく　イヨ、譽め詞樣。きつい物ぢやわいなア。

ト跪り地になり、向うよりお縫、仲居の形、福屋のブラ提灯を下げて出て來る。あとより肴屋五郎助惡者の親仁にて附いて出で來り、花道にて

五郎　ヤイ〳〵、お縫、わりや挨拶も無く、振り切つて行つて、濟まうと思ふか。

ぬひ　濟まぬといて、わたしぢやとて、どうなるものかいなァ。
五郎　そんならわれは、親を親とも思はぬのぢやな。
ぬひ　思うたとて、どうマァ仕様が
五郎　無いと云はうが、どう云はうが、どこまでもへばりついて
ぬひ　わたしに外聞かゝすのかえ。
五郎　オヽ、金見ぬうちは歸りはせぬ。
ぬひ　そんならどうなとさんせ。金のなる木は持たぬわいなァ。
　　ト矢張り踊り地にて、兩人せり合ひながら、舞臺へ來り
りく　お縫どの、先刻にから
多九　首を長くして待つて居た。サァ〳〵、こゝへ、來やれ〳〵。
ぬひ　多九郎さん、今日もお前がござんすと聞いたゆゑ、早う歸らうと思うたけれど、道でお客の惡酒
　　落れ、蟲が好かん事ばかり。一つ飲まして下さんせ。
多九　そんな時には、一杯氣をつけると、面白くなるものだ。
善助　オヽ、それ〳〵。七段目ではないが、酒でも無理に參らずば（トついでやる）。

ぬひ　ほんに、命も續かぬわいなァ。（ト飲む。五郎助ムッとして）
五郎　（ムッとして）ヤイ〳〵お縫、おれが命も續かぬわい。
多九　コレお縫、あの男は
くら　何でござんすぞいなァ。
ぬひ　サァ
五郎　イヤ、わしはあのお縫が親でござりまする。どなたも御免なされまし。（トお縫が側へ來り）ヤイ、
　　お縫、酒を飲まにやァ命が續かぬとは、おれに當てつけての事か。
ぬひ　なんのマァ
五郎　イヤ〳〵、さうであらう。コリヤヤイ、親の爲なら前尻を賣る女郎にも、孝行な子はなるぞよ。
　　又おれが甘い親なればこそ、御戸帳のやうな前垂れをして、旨い物は食ひ次第、酒は飲み次第の
　　仲居をさせて置くは、有り難い事と、無心の度毎に、二言と云はず、寄越す筈だ。
ぬひ　サァ、それぢやによつて、給金も、お客の花も、外へ散らさず、みんな
五郎　云ふな。一分か二分の目腐れ金、それが送る内か。親を大事と思ふなら、おれがいふ三十兩
ぬひ　三十、五十のと、天王寺の塔ぢやあるまいし。

五郎　イヤ、出來る。新町へ三年いつてくりやれ。

ぬひ　エヽ。

五郎　サア、おれも大概な事なら、こんな事は云はねえ。義理のわるい騙り同然な借金。表沙汰になれば、首に綱。親を暗い所へやるとも、明るく濟ますとも、われが心次第。得心して女郎になつてくれるか。

ぬひ　ぢやと云うて、どうしてマア。

五郎　否と云はうが、應といはうが、引摺つて行つて金にする。歩びやれ。（ト引立てにかゝる）。

くらもシ、親仁さん、お前の娘ぢやというて親方持ち。

りくさう自由にはなるまいぞえ。

五郎　イヤ、高が一分か二分の給金、後でついても事は濟む。ナア、お縫。

ぬひ　イエ〳〵、そのやうに云はしやんしても

五郎　やかましい。うしやアがれ。（ト手を取つて引立てる。お縫行くまいと焦る。立廻りの中へ多九郎出て、五郎助を見事に投げる。起き上る所へ包み金を打附ける）。ヤア、この金は

多九　お縫が身の代、三十兩。

ぬひ　多九郎さん、そんならお前が

多九　この場のあらまし、見かねて投げ出すその金も、とうからお縫に多九郎が、思ひあまつて魚心

ぬひ　みずしらずの父さんが、心がらするその難儀を

多九　救つてやるその代り、お縫、おぬしを抱いて寐るぞ。

ぬひ　それではどうも

五郎　否だといつちやア、この金が手に入らにやア、われを女郎に賣つてやるぞ。

ぬひ　サア

多九　得心するか。

ぬひ　サア

三人　サア〳〵〳〵

多九　かねての思ひも金と相談。お縫が返事は

ぬひ　ようござんす。金を借らねば勤め奉公。どちらも苦界、あの二階で、わたしが返事を、多九郎さん

多九　そんならお縫

善助　どうやら、かうやら、金の威光で
多九　ハテ、金ぢやない男ぶり。
善助　前祝ひにわしも一緒に
多九　飲まさう。善助、來やれ。
　　ト踊り地になり、多九郎、善助、福屋の内へ入る。皆々あたりを見廻し
仲居　お縫さん。
五郎　まんまと三十兩。
ぬひ　モシ。（ト合ひ方になり、思ひ入れあつて）お倉さん。おりくさん。わたしが身の上に無ければならぬ金の算段。苦勞するのを見かねて、斯う〳〵せいとお前方の詞を
りく　誰しも出しにくい金。どうしたらよからうと思ふうち、思ひついたあのお侍ひ。お前に心あつて
　　毎日内方へ來るを幸ひ
くら　内へ出入りの看屋五郎助さん、お前の請け人、殊に深い縁もある樣子。年恰好も丁度好いと
五郎　思ひ附いた親の惡者。金を貸さにやア女郎に賣ると、敵役の眞似がうまう行つて
ぬひ　如才のないあの侍ひも、三十兩といふ金。

くら　併し、お縫さんの身の代の、金を枷に
りく　連れて行つて寐ようといはゞ
ぬひ　ハテ、その時は爰を駈落ち。
くら　成る程、それもわたしらが
りく　幕を切つて上げうわいなア。
ぬひ　エヽ、嬉しうござんす。
くら　モシ、まだ話もござんせう。わたしらは奥へ行つて
りく　座敷の樣子
ぬひ　賴んだぞえ。
くら　サア、ござんせ。（ト踊り地になり、仲居兩人奥へ入る）。
五郎　時に、この三十兩では
ぬひ　不足の二十兩はこゝにござんす。（ト懷より袱紗に包みし金を出す）。
五郎　この金はどうして
ぬひ　サア、わたしが兄さん孫七さんのお主、多賀の御家中高橋瀨左衞門樣、不慮の御最期。弟御の彌十

郎様はお手討、殘るは京へ養子にお出でなさんした孫三郎様とやら、其お方の力となつて、敵大學どのを（トあたりを見廻し）サア、其お力となるも先立つは金。拵へてくれまいかと、お前を以て細々とのお文。兄の一世の忠義を立てさす事ぢやと、お客の祝儀、給金、頭の飾り、身のまはりも、みな人を賴んで

五郎　質入れした金でござるか。

ぬひ　これも、兄さんが大切なばつかり。

五郎　オヽ、出かさしつた〳〵。この五十兩を遣つたら孫七どのも、さぞ喜ぶであらう。この間の狀に、女房お米を連れ、この地へ向けて參るとの文體。日を繰れば、もうとうに着する時分。

ぬひ　どうぞ少つとも早う屆けて、安堵させたいものでござんす。

五郎　それも尤も。そんなら斯うせう。内で待合はさうより、お迎ひがてら、倉狩峠、近江海道へ向けて

ぬひ　行つて下さんすか。

五郎　その方が早手廻し。（ト二つの金を合せ、懷へ入れ、行かうとする）。

ぬひ　ア、モシ。必ずこの事を

五郎　ハテ、おれも孫七とは鰯を煮た鍋ぢや。

ト時の鐘、合ひ方にて、五郎助向うへ入る。お縫あと見送り

ぬひ　マア、あれはあれでよけれど、これからはあの侍ひの返事、一つよければ又二つ。むづかしの世の中ぢやなア。

ト唄になり、お縫思ひ入れあつて、門へ入る。直にこの唄の彈き續け、時の鐘にて向うより立場の太平次、頰冠り、一本差し、走り出て來て、花道にて

太平　あの倉狩峠で、孫七夫婦をぶツ放し、跡くらましてこの大阪へ來たが、その人殺しを嚴しい詮議との風聞ゆゑ、晝間歩くも無遠慮と、夜ばかり用を足すとは、どうでも盜人じみて居るさうだ。福屋まで來いと、多九郎からの使ひ。氣の急くせるか、もう來たさうだ。

トきよろ〳〵しながら、舞臺へ來り、思ひ入れあつて、小石を内へ投げ込む。合ひ方になり、内より多九郎出て來り

多九　小石の合圖は

太平　わしでごんす。

多九　ムウ、太平次か。呼びにやつたに、ようこそ〳〵。

太平　サア、わしも大學樣に賴まれ、さまぐ耳になる事だらけサ。それゆゑ夜に入つて……して、わしを呼んだのわえ。

多九　サア、別儀でもない。かねておぬしもおれも手先へ廻る大學樣、先達てより住吉の濱屋敷へ押籠め其節、お邸内へ置いては心遣ひと、預け置かれし菅家の一軸、身共に受取り參れとの仰せゆゑ。

太平　そんなら、アノ、わしが預つてゐる一軸を

多九　如何にも、急に御用があるゆゑ

太平　モシ、そりやアどうも合點がいかない。濱屋敷へ置いては危ないといつて、預けられた一軸……ハヽア、もうこの太平次に用は無いと、出入りを止める下心だな。

多九　イヤ、さうではない。これには

太平　イエ〳〵、云はつしやれ。何もかも腹一ぱい働らかせた上、なりにくいお龜まで、かッ浚つて屋敷へ送り、抱かせて寐させるも、この太平次が庇ぢやアないか。

多九　イヤサ、そのお龜も屋敷へ連れ行き、手をかへ、品をかへ、段々と口說けど、聞入れね不得心な女郎め。どうでしまひはお手討と、點がかゝつて居るワ。

太平　それはてん〴〵の不器用だから。尤も、金は今まで取つたれど、あの人ゆゑに日蔭者同然。何ぞどつさり規模が無けりやア

多九　返さぬといふは、あの一軸、質に置いたであらうが。

太平　それ程知つて居ながら、なぜ又寄越せといふのだ。

多九　サア、大學樣も心を改めたと、本家へ詫び事。押籠めさへ免されたら、又お望みの企みも樣々と、申し入れたところが、聞濟みあつて、近く赦免の使者が來る筈。それ故、一軸が入用だ。

太平　それだといつて、質に入つてゐる物を、ちやんころ無しに返せとは、比丘尼に何とやらだ。

多九　イヤ、その金はある。

太平　エヽ。

多九　サア、質入れは五十兩と聞いたゆゑ、則ち大學樣から。

太平　アノ、金が來たかえ。

多九　サア、來たが、こゝがおぬしに無心。その五十兩のうち、身共三十兩使つたて。

太平　おれの物を使ふとは、こなたも餘ッ程（トむつとする）。

多九　ハテ、よく腹を立てる男だ。その三十兩の代りだ。（ト懷より疊附きを出してやる。太平次見て）

太平　「高橋一家へ心を運ぶ下郎の孫七、お米もろとも殺害に及び候　褒美として、押籠め御免の上は、

新地五百石宛行ふものなり。左枝大學。」……この墨附きをわしに

多九　貰つてやるワ。なんと、三十兩貸してもよからうが。

太平　これぢやァ萬更

多九　ソレ、後の二十兩。（ト懐の金を渡し）幸ひ質屋も持つて來て居る。どうぞ、おぬしの働きで

太平　二十兩ぶッつけて、五十兩の代物を、口說いて見ようか。

多九　ハテ、それもちつとの内。大學樣さへ赦免あれば

太平　直ぐに侍ひ、五百石。

多九　それもおぬしが

太平　倉狩峠で

ト切る眞似する。この内、お縫二階の障子を明け、何心なく聞いてゐる。

ぬひ　エ。（ト聞き耳立てる）。

太平　そこに居るのは（ト見る。障子ぴつしやり閉す）。

多九　イヤ、仲居どもだ。外に氣遣ふ人はない。

太平　そんなら、これから

多九　福屋の内で

太平　質屋に對談。

多九　太平次。

太平　オット、その名は、だんまりだよ。

ト踊り地になり、多九郎先きに太平次、墨附きと金を懐へ入れ、門の内へ入る。トばたゝにて、向うより五郎助走り出て

五郎　コレ〳〵、お縫どの〳〵。大事ぢや。飛んだ事ぢや。ちやつとござれ〳〵。

ト内よりお縫出て來り

ぬひ　五郎助さん、何でござんすぞいなァ。

五郎　何ぢやどころでない。亂ちき大事ぢや〳〵。（ト騒ぐ）。

ぬひ　モシ〳〵。さうばかり云つては解らぬ。マア、譯はどうでござんすぞいなァ。

五郎　どうといつたら、殺された〳〵。

ぬひ　誰がいなァ。

五郎　サア、兄の孫七は殺されたわいの。

ねひ　エヽ。（ト悔り、いろ〳〵思ひ入れあつて）そりやマアどこで、何奴が（ト五郎助に取付き、あせる）。

五郎　サア、驚くは、尤もぢやノ〳〵。最前こなたに別れ、近江海道へ出迎ふと、倉狩峠を村役人、御檢視も一緒に、宿次ぎの傳馬。どういふ事かと、樣子を聞けば、倉狩峠の一つ家で、旅の女と男が殺され、そのお檢視の戻りぢやといふゆゑ、その殺された者は、所は何處、名は何といふ者ぢやと聞いたれば、イヤ、夜の內の事ゆゑ知れなんだが、やう〳〵割掛けに附いて居る、駄賃帳で大概解つたゆゑ、代官へ持つて行くといふ。駄賃帳を見たところが、コヽ、これぢや〳〵。

ト血だらけの駄賃帳を出す。お縫取つて見て

ぬひ　「江州淸水村孫七」……こりや覺えある兄さんの手跡。血に染みて居るといひ、そんならどうでも、兄さんは……女子といふは慥かにお米さん。殺されたかいな〳〵。

五郎　サア、膽の潰れたと云はうか、悔りしたと云はうか、折角拵へた金も、これでは要らぬ金。持返つて、さうしてこの事も知らさうと、ちよつとゝ云うて、駄賃帳を借りて來たわいの。

ぬひ　して〳〵、その殺した者の名は、何と〳〵。

五郎　サア、おれもあんまり仰天して、それを聞かずに來た。

ぬひ　エヽ、なんでござんすぞいなア。

五郎　マア〳〵、何より忘れぬうち、最前の金。（トそこへ置き）その駄賃帳は證據、代官所へ持つて行くといふを、ちよつとゝ云うて借りて來た。持つて行かにやならぬ。コレ、お縫どの、孫七が回向ようさつしやれ。おれは孫七を持つて行かにやならぬ。ヤレ〳〵、とんだ事だ。

ト時の鐘にて五郎助、駄賃帳を持つて狼狽へ、向うへ走り入る。お縫色々思ひ入れあつて金を取上げ

ぬひ　心を盡して拵へた金も、兄さんを悅ばさうため。それにマア、望みも叶はず、夫婦もろとも、人手にかゝつて死なしやんすとは、どうした不運な身の上か。思へば薄い、兄妹の緣でござんしたわいなア。

ト泣き落す。この時奥にて

善助　イヤ〳〵、それぢやア渡されない。

太平　ハテ、聞分けのない。おれの云ふ事をマア聞きやれな。

ト これにてお縫金を懷へ入れ、思ひ入れあつて下の方へ來り、いろ〳〵思案して居る。合ひ方になり、奥より太平次、善助出て來り

善助　わしが事より、こなさん、聞分けがない。マア、よく物を積つて見たがよい。そりやハヤ、利足

は追ひ〳〵入れてはあれど、五十兩の質を、三十兩出してくれろといふやうな

太平　サア、無理だから賴むのぢやァないか。五十兩の物を、五十兩遣りやァ恩ひらなし。口說くには及ばないワ。

善助　口說くといふは、三百か一本の錢質の事。まとまつた三十兩。

太平　賴んでも聞かにやァ、そこはおれが腕づくでも借りるぞよ。

善助　そんならわしが否といへば

太平　オヽ、高が貸し借り。首の落ちる出入りは無い兇狀。きいた所が荒拝ぎ。それでも否か。

善助　こなさん達の通りを食つて、質屋の奉公がなるものか。

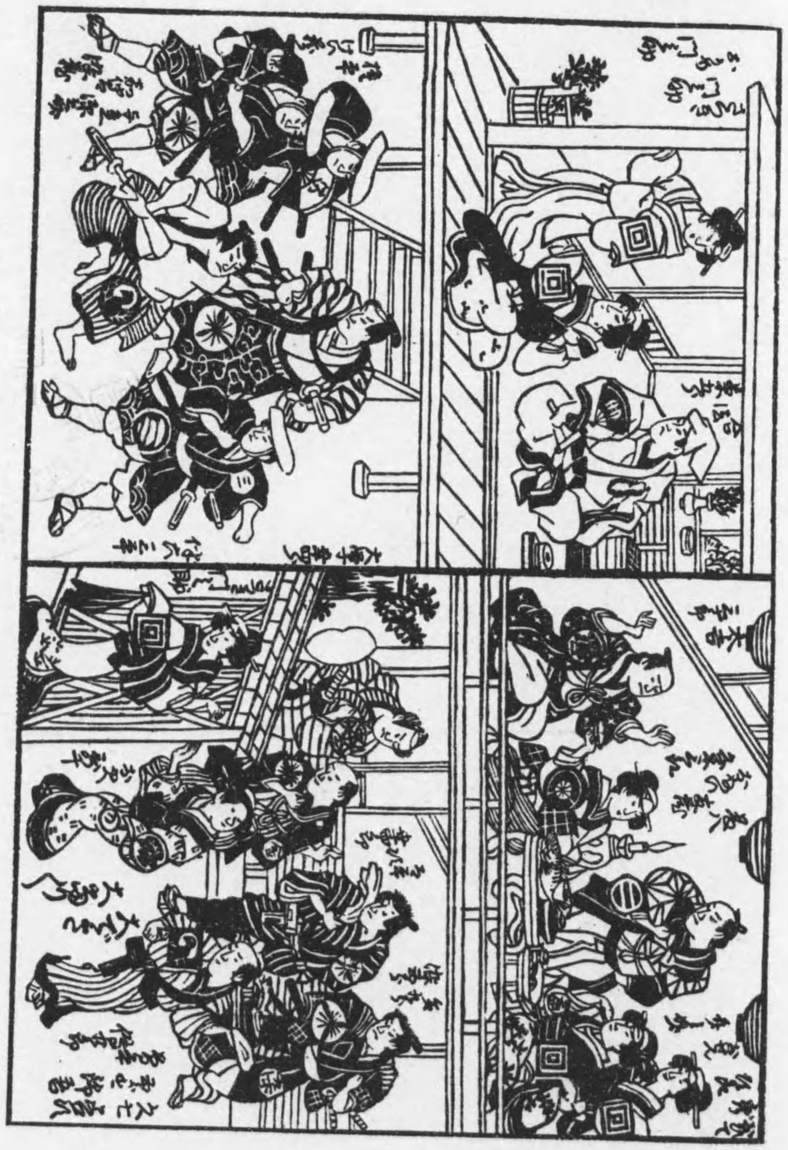
ト行かうする。太平次引っ捕へ、せり合うて、風呂敷包みを取らうとする。此うち、お縫、最前の事を思ひ出したこなしにて、仲を引分け、善助に以前の金を打ちつける。

ヤア、この金は

太平　こなたは慥かこの福屋の

ぬひ　アイ、お縫といふ仲居でござんす。

太平　ほんに、十三度來て、顏は



ぬひ　知つて居ながら、知らぬ顔のお客さん。

太平　イヤ、そりやア夜目、遠目とやら。時にマアその金は

ぬひ　貸して上げうと思うて。

善助　（此うち金を改め見て）アノ、大枚の五十兩。

太平　貸してもらふは忝いが、どうやら心の

ぬひ　知れぬ事も何にもない。一二度來てもお客はお客。お前はお代官の沙汰になつても

太平　ヤ。

ト悔り。お縫心を附ける思ひ入れあつて

ぬひ　よいと思へば、貸すまいわいなア。

太平　アヽ、コレサ。百の借り貸しも思案する世の中。ほつかりと五十兩

善助　又もや御意の變らぬうち。サア、代物をお渡し申す。（ト風呂敷の中より一軸の箱を出し、太平次にわたし）わしは方の附いた事を、多九郎樣にちよつと屆けて歸りませう。ヤレ〳〵、危ないところを生返つたやうだ。

ト合ひ方になり、善助金を持ち、門の内へ入る。

太平　イヤ、どうも合點が行かない。これが親類か緣者でもなし。深い馴染も猶ない事。いゝ男なら惚れたとも思はうが、その氣遣ひはないおれに

ぬひ　アノ、いゝ男にばかり惚れるものかえ。

太平　ヤ。

ぬひ　サア、色戀は心意氣ばかり。

太平　そんならおれに

ぬひ　附合つて見たら

太平　面白さうとお見立てか。

ぬひ　サア、それも素面では

太平　成る程。打解けやすいは酒の上。

ぬひ　そんなら一つ

太平　あの二階で（トちよつと寄るを）

ぬひ　飲まぬ先きから、醉うたかいなア。

ト唄になり、お縫、太平次の手を引き、門の内へ入る。下座より仕出し二人、捨ぜりふにて出て向う

へ入る。門の内より、善助先きにお倉ぶら提灯を持ち、おりく附いて出て來り

善助　ヤレ〳〵、大きに世話でござつた。

くら　そんなら、もうお歸りかいなア。わたしらも、幸ひ用もあり

りく　辻まで送つて上げうわいなア。

善助　そいつは豪氣だね。

二人　サア、ござんせ。

ト騷ぎになり、三人向うへ入る。直ぐに二階の障子を開ける。内に太平次、お縫の膝にもたれ、酒を飲んで居る。銚子、鉢杯、肴、取散らし、誂への合ひ方。

ぬひ　モシ、太平次さん。今からそんな卑怯な事云はずと、もう一つ上れいなア。

太平　イヤ〳〵、頭から茶碗で四五杯やらかしたから、餘ッ程廻り燈籠だ。

ぬひ　そんなら、もう否かえ。

太平　サア、ちつと息を拔いてやらうよ。

ぬひ　モシ、わたしや酒飲まぬ者は嫌ひぢや。そんなら、もうよしなさんせ。（トつんとして茶碗を取上げる）

太平　アヽ、コレサ、氣の短い。酒を飲まぬ者が嫌ひとあれば、飲むは飲むがハト茶碗を取上げて）お縫、

今云つた事は、あれは眞かよ。

ぬひ　嘘に女が惚れられるものかいなァ。（ト酒をつぐ）。

太平　有り難い。（トぐつと飲んで、お縫へ獻さうとする）。

ぬひ　見事ぢや。押へやんせう。

太平　また飲めか。

ぬひ　サア、お前と夫婦になつたら、どこへ世帶を持たうぞいなァ。（ト太平次が持つて居る茶碗へ酒をつぐ）。

太平　どことといつたら、マア、大阪なら島の内、江戸なら二丁町近所よ。（ト飲んで下へ置く）。

ぬひ　そんなら芝居の近所ぢやな。（ト下にある茶碗へ酒をソツとつぐ）。

太平　てめえは江戸の事は知るまいが、江戸の芝居といつちやァ、また違つたものサ。（ト酒を飲む。お縫また　た後へつぐ）。まづ魚は新場、小田原町が鼻の先き、呉服屋は大丸、越後屋、米屋は伊勢町、船宿は堀留。（ト酒を飲む。お縫又つぐ）。淡雪は壺屋、蕎麥は砂場。自由の足りる事といつちやァ、八文屋で飯を買つて、人形町の屋臺店で、十二文が菜を買へば、七五三の料理よりは旨い所よ。

ト拍子に乘つて酒を飲み、酔うたる思ひ入れ。

ぬひ　そりやマア面白い所ぢや。併し江戸は遠い所とやら、行くのにも肝心の

太平　金はある。おぬしが先刻貸してくれて、方をつけたから、その金が二十兩こゝに

ぬひ　なんの二十兩ばかり。つい違うてしまうたら

太平　金の出來口、いくらもある。

ぬひ　そりや何處になァ。

太平　おッつけ五百石。おれは侍ひになるワ。

ぬひ　何を口から出次第に。嘘々。

太平　ナニ、てめえに嘘をいふものか。

ぬひ　侍ひもをかしいわいなァ

太平　コレ、さう貶すなら見せる物がある。必ず人に云ふなよ。

ト以前の畺附を出して、奥の方ばかり見せる。

ぬひ　「赦免の上は新地五百石宛行ふものなり。」

太平　なんと、屹度した物であらうが。

ぬひ　ほんに……その後を見せなさんせ。

太平　イヤこの後は、女房になつた上の事〳〵。（ト畺附を懐へ入れ、捨ぜりふ云ひながら、太平次酔つて寝る）。

ぬひ　モシ〳〵、寢なさんすかいなァ。もう一つ飲まんせいなァ〳〵。（ト懷へ手を入れようとする）。

若者（奥にて）こちか〳〵。（トちり〳〵の合ひ方。お縫悶りしてあたりを見廻し）

ぬひ　何の事ぢや。御幣廻しが始まつたさうな……モシ、太平次さん〳〵。（ト起しても起きぬゆゑ、ソツと懷へ手を入れ、右の墨附きを引出し、あけて見て）ヤア、こりやこれ、孫七お米もろとも、殺害に及び候褒美、と書いてあるは、さては

ト太平次目を覺まし

太平　なんと。

ぬひ　兄さんの敵。

ト太平次が脇差を手早く取つて切りかける。太平次そこにある杯臺、銚子、掛け物の箱、掛け物を打ちつける。この立廻りに、一軸外へ飛んで見越しの楓の枝へひつかゝり、垣の外へばらりと下る。墨附も外へ飛ぶ。始終、ちり〳〵の合ひ方にて、大勢騒ぎ居る。此うちよき程に、向うより彌十郎妻皐月、誂への形、一心寺彌勒堂と書いたる小提灯を灯し、つか〳〵と出て來り、二階の騒ぎを見上げる拍子に、一軸に目を附け、提灯に透して見て

皐月　ヤア、こりや覺えある、慥かに

太平　なんと。

皐月（落ちたる一通も拾ひ上げ）高橋一家へ心を運ぶ下部の孫七、お米諸共殺害に及び候褒美として、押籠め赦免の上は、新地五百石宛行ふ物なり太平次へ左枝大學。……すりや、倉狩峠にて殺害されたは

ぬひ　わたしが兄さん。

太平　さういふうぬは（ト見下す）。

皐月　お縫がゆかり。

太平　すりや高橋にも

皐月　不思議に尋ぬるこの一軸。

ト伸び上り取らうとする。太平次、中二階より飛下り支へる。お縫も續いて飛び下り、切りかける。三人よろしく立廻り、これより誂への合ひ方になり、太平次、お縫が刀を引ツたくり、一太刀浴せる。皐月隱し持つたる懷劍をお縫へ遣り、太平次を突廻し、刃物を持ち添へ太平次を切る。立廻りよろしく、トゞ太平次、お縫共に手を負ひ、皐月太平次を押へ、お縫に抉らせる。太平次苦しむ。此うち二階へ多九郎出て

多九　ヤア、人殺し〳〵。（ト飛んで下り、かゝらうとするを、皐月ちやつと留めるうち

ぬひ　イヤ、敵討ち……と云うては、助太刀の又かゝり合ひ。……心中ぢや。

ト太平次が上に乗りかゝり、自害する。

皐月　とはいへ、様子を

多九　女め。うぬ。

ト抜いて皐月に切つてかゝる。刀餘つて楓の枝を切り落す。これにて皐月、一軸と墨附を取つて

皐月　忝い。

多九　それを

トかゝらうとする。太平次が置きし二十兩の金を取つて打ちつける。金ばら〳〵と散る。多九郎狼狽へ、金を拾ふ。皐月手拭を冠り、二品を持ち、時の鐘、誂への合ひ方にて、一散に向うへ走り入る。舞臺よろしく、この道具ぶんまはす。

本舞臺、三間の間、藁の葛家。上の方少し前へ張出し、一間の二重舞臺、餓鬼骨の反故張障子を建て下の方竹簀の子、うしろ同じく餓鬼骨の反故障子、破れ壁。よき所の圍爐裏に竹自在の土瓶掛けてあり。屋體の外、榎の前に石地藏。下座の方竹藪。こゝに高橋彌十郎、合法の拵へにて、七厘にて土瓶の茶を煎じて居る。こなたに六部の笈あり。時鳥しきりに、合ひ方、木魚の音にて道具とまる。

合法　あゝ、啼くワ〳〵。時鳥も八千八聲啼き盡せば、死ぬるといふ世話の譬へ。我れも丁度その如く

斯かる艱苦も事成る上は、長らへ果てぬ冥府の鳥。……冥府といへば、亡き兄の、今日は命日。どれマア回向を（ト矢張り合ひ方にて、笈の扉を開き、鉦を打鳴らす）。遙靈院劔光信士、出離生死頓生菩提。南無阿彌陀佛々々々々。……さぞ御無念にござりませう。現在敵はありながら、押籠められし國法に、討つ事ならず徒らに、月日を送る心の本意なさ。どうぞ宥免あるまでに、寶の詮議と敵の無事、兄の佛果を願ふも僧形。……とはいへ、思へば……これはしたり。もう藥が上つたさうな。（ト また元の所へ來り、土瓶の藥を茶碗へ量りながら）　今、人の世話になるおのが身で、あの病人の世話をするも、これも他生の緣づくであらう。（ト茶碗の藥を持つて、障子の側へ來り）コレ、寢てか。二番が上つた。服まつしやらぬか。

ト障子あける。始終合ひ方。此うちに、與兵衞、筵屏風を立て、病ほうけたる形にて、合法が着替への布子を引掛け、革行李にもたれ居て、この時、與兵衞屏風を押し退け

與兵　これは〳〵、戴きまする〳〵。（ト茶碗を戴き、一口服む）。

合法　そして、容體はどうござるな。

與兵　サア、なんでも病ひに勝たうぞと、思うて見ても矢張り同然。（ト思ひ入れあつて）どういふ過去の因緣にや、深手にて危い折から、其許樣の通り合され、その場の難儀をお救ひ下され、この庵室に

伴つて、行歩も自由ならぬ身を、この程よりの御介抱、只今死んでもこの御恩

合法　これはしたり。埒もない。死んで堪るものかいの。コレ、そんな氣の弱い事云はずとも、氣をしつかりと持つて、早く本復……ソレ、藥がさめようぞや。

與兵　（又藥を飲んで）ア、、なんの因果で此やうな

合法　サア、それも浮世の七轉び

與兵　もう八つでござりませうか。

合法　目が覺めたなら、月でも眺めて。

與兵　（空を見て）空は晴れても、氣は曇る。（ト又思ひ入れ）。

合法　サア、それも病ひが苦になるゆゑ。マア、ちつと話して紛れるがよい。

與兵　いかさま、斯うばかりして居らうより、そこへ出まして

合法　併し、夜風に當つては……よくその布子を引つ掛けて、風邪でもその上へ引かぬやうに。

與兵　ハイ〳〵。

ト誂への合ひ方、篠藥の笛の音。與兵衛布子を引つ掛け、やう〳〵立上がる。合法手を取り介抱なして、此方へ連れ來り、與兵衛思ひ入れあつてあたりを眺め

今日は御同行の女中が、お見えなされぬが

合法　左樣でござる。ちと木津村まで用事がござつて……ほんにマア、この夜の更けるに

與兵　合法どの。あの篠藥は。

合法　ありや天王寺の勸學院で、稽古の樂器。病人には好い氣慰み。

與兵　成る程、聽けば何處ともなう、心を澄ますあの音色。調べはこれと變れども、琴の斷つたる知音の故事。

合法　すりや、あの唐士對安道が

與兵　サア、切なる誠を

合法　こゝに比べて、

與兵　合法どの。……その人を知る魂ひ見込みて、お賴み申す仔細がござるが、何とお聞屆け下されうや。

合法　ムウ。……魂ひ見込みて賴みたいとは。（ト思ひ入れ）。

與兵　サア、外ならぬ大事なれども、何を隱さう拙者めは……敵討ちでござるわいの。

合法　エヽ。……すりや、望みある身の上とな。……ムウ。

與兵　サヽ、賴みと申すはこゝの事。この程倉狩峠にて、本望遂ぐる善き手筋と、わざと手の者と偽りおほ

せ、來る道の深江に於て、手段現はれ、既にその場で云ひ甲斐なく、返り討にもあふべき所、貴殿の助力に危く遁れ、親身も及ばぬ介抱に、本復致し本望をと、今日まで思ひ暮らせしが、とても痛手の病症に、所詮全快叶はねば、敵も討たれず、やみ〳〵と、この儘空しく死なんより、せめて先祖へ云ひ譯に、切腹なさん身の覺悟。

合法　ヤヽ。

與兵　拙者が妻と定まる女も、敵の邸へ擒れと、なりしを幸ひ近寄つて、望みを叶へる健氣な心底。何卒彼れが先途を見屆け、敵を討たせて下さらば、修羅の妄執、晴らす便りは外にはない。お賴み申す合法どの。どうぞ一重にこの事を

合法　（思ひ入れあつて）ムウ。すりや始めて聞きし一大事。すりや、こなたにも敵討ちとな。

與兵　サア、息あるうちにこの事を、お賴み申し、死ぬれば本望。敵の實名、我が素性

合法　アイヤ、その名を滅多に明かすまいぞ。

與兵　エ。

合法　サア、危急に迫る賴みなれども、この儀は容赦に預りたい。……サ、斯樣に申せば卑怯未練と思はれんが、何をか包まん、我れとても、委細を云へば、同じ身の上。

與兵　ナニ、アノ、其許にも敵討ち

合法　いかにも。……姓名知られし敵は大身、遇ひ次第にて明日をも知らぬ、命を抱いて貴殿の賴み、承つても詮ない事。

與兵　ムウ。それゆゑに助太刀は

合法　サア、未練とさみしておくりやるな。

與兵　ヘイ。（トいろ〳〵思ひ入れあつて）さうぢや。たとへ五體は叶はずとも、一心凝つたる我が念願本望遂げいで置くべきや。

ト向うを見詰め、立たうとしても、足立たぬこなし。二三度あつて、撞と倒れる。合法引起して

合法　アヽコレ、矢竹に逸るは尤もながら、病苦の身では何として。今の氣丈を張りに持ち、全快なしてその敵を

與兵　サア、本意が遂げたい。命が惜しい。佛神三寶、見離し給ふか。エヽ口惜しい〳〵。

ト身を揉み苦しむ。

合法　ハテサテ、愚癡な。こりや身を揉むと爲にならぬが。

ト藥を服ませ、いろ〳〵介抱する。此うち、また誂へ、箪笥入りの調べになり、お龜、物思ひの姿に

て出て來り、直ぐに舞臺へ來り、入る。合法見て

ヤ、こりや女房と思ひの外。（ト思ひ入れ）。

かめ　アイ。わたしや與兵衛樣に

與兵（顏を上げ、お龜を見て）ヤア、そちやお龜ぢやないか。

かめ　與兵衛さん。よう無事で居て下さんした。逢ひたかつたわいな〳〵。

ト走りより、縋り附いて泣く。與兵衛思ひ入れ。

與兵　合點の行かぬ。擒はれの身は籠の鳥。殊に、女の夜夜中。どうして其方は

かめ　サア（ト思ひ入れ）。

合法　ヘエ。すりやこの女中が、今話しの

かめ　二世とかけたる夫に別れ……いかい苦勞を、致しましたわいなア。

與兵　そんなら望みを叶へた上、首尾よう邸を拔けて來たのか。

かめ　サア、それは

ト この時、向うより村のあるき、駈けて出て來り

歩き　コレ〳〵、合法どの。村役人衆が、何か云ひ聞かす事があるげな。サア〳〵、ちやつと、ござれ

ござれ。

合法　ナニ、今頃に庄屋樣で……幸ひ、こゝに居るも、どうやら遠慮。

歩き　サア、早う、ござれ〳〵。

合法　モシ、女中。そこに藥も煎じてあれば、氣を附けて進ぜさつしやれ。與兵衛樣、わしはちよつと

庄屋どのまで。

歩き　ハテ、早くござれよ。

合法　ヤレ、參りますワ。せはしない。

ト合ひ方になり、合法、歩きと、とつかは向うへ入る。

與兵　コレ、お龜。返答も無く、濟まぬ顏つき。樣子はどうぢや。サヽ、樣子は。

かめ　モシ、與兵衛さん。（ト與兵衛に取附き、ヂツと顏を見て）この程倉狩峠にて、擒はれ行きしその日より、あの住吉の濱屋敷、一間に押籠め、慣體な、侍ひどもが夜となう、晝となう、入れ替り立ち替りては、大學が心に隨へと、嚇しつすかしつ、さま〴〵と、口說かるゝ身の切なさ、辛さ。

與兵　そりや、別るゝからは、互ひの胸に、よう得心して

かめ　さればいなア。望みを遂げたいばつかりに、この身を任すは合點で行ても、現在の夫を捨て、敵

に枕を交はすのが、口惜しさ、悲しさ。一つには、お前の病氣も案じられ、風の便りにこゝと聞き、思ひ焦れて、やう〳〵と、人目の關を遁れて來たも、今一度お顏を見たいばつかりに、歸りましたも果敢ない身の上。死んでも未來は女房ぢやと、モシ、與兵衞さん、どうぞ云うて下さりませいなア。

ト取附き泣く。始終與兵衞苦しみながら、お龜を取つて突退ける。誂らへ。笛入りの合ひ方。

與兵 ヤア、我れを慕うて歸りしを、貞女と云ひたけれど、夫婦の緣もこれ限り。

かめ エ、。すりや、アノわたしを

與兵 夫でもない、女房でない。何國へなりと、とツとゝうせう。

かめ モシ、そりやマア何ゆゑ、胴慾な。心に叶はぬ事あれば、堪忍して下さんせ。わたしやこれまで戻つたも、云ふに云はれぬ大抵な

與兵 ヤア、何を云ひ譯。コリヤ、我れは病苦のその上に、左枝の多勢に痛手を負ひ、今をも知れぬ命なりや、女ながらも敵の屋敷へ、入り込みしこそこれ幸ひ、心をゆるさせ、大學が、小鬢の先きでも一刀、何ゆゑ恨みの刃は當てぬ。

かめ サア

與兵 返り討ちに逢ふとても、それこそ眞の與兵衞が女房。それに、夫婦の愛慾にひかれ、のめ〳〵と三千年に一度咲く、花盛りを外に見て、立歸つたる卑怯者。兄の位牌へ云ひ譯も、賴みも切れし運の果。それも何ゆゑ、この體の、心に任せぬ病氣ゆゑ。エ、、口惜しい、無念なわやい。

ト身を掻きむしりつゝ、あせる。お龜思ひ入れあつて

かめ モシ。すりや返り討にあふとても、敵に刃を向けたなら

與兵 オ、、それこそは眞の女房。

かめ 嬉しうござんす。その一言が聞きたさに、こゝまで迷うて戻りました。

與兵 なんと。

かめ 何を隱さう、擒はれ行き、その時より心の覺悟。色に事よせ、騙し寄り、一太刀なりと恨みんと、氣は逸れども情けなや、かよわい女の身は一つ、望みも遂げず仕損じて

與兵 ヤ、。どうしたと。

かめ 憎や敵の(ト思ひ入れ)。

與兵 ヤ。

かめ 刃にかゝつて

ト泣きおとす。與兵衛思ひ入れ。ばた〳〵になり、向うより皐月、一軸を抱へて、こけつまろびつ走り出で、直ぐに舞臺へ來り

皐月　モシ、合法どの、喜ばしやんせ。（ト内へ入る。お龜、一軸に恐るゝ思ひ入れ）。

かめ　戀しい、床しい與兵衛さん。まだ云ひたい事はあれど、アレ眞筆の威德に恐れ

與兵　なんと。

かめ　我が夫。おさらば。

トどろ〳〵になり、龕燈にてお龜消える。パッと掛け煙硝立つ。跡に血に染みし小袖殘る。兩人驚き

皐月　ヤヽ、今までありし女中さん。

與兵　姿は見えず、忽ちに、殘るは血汐のこの小袖。さてはお龜は手にかゝつて。ホイ。（ト思ひ入れ）。

皐月　譯は知らねど、今のお方は

與兵　この世を去りし魂魄の、迷うて爰まで來りしか。

皐月　この一軸の神威に恐れ

與兵　その儘形の見えざるは、返り討ちに討れしゆゑ、この世の別れに來たのであつたか。さうとは知らず、叱つたは、消えよ、歸れと云うたも同然。

皐月　ムウ。そんならお前も敵討ち。

與兵　サア、その敵の手へ女房お龜、擒はれしを幸ひに、健氣な事を仕損じて、敵の爲に返り討ち。この世に亡き身と知つたなら、よう暇乞ひをしようもの。

皐月　ほんに、この身につまされて、願ひも遂げず、あまつさへ、先立たしやんしたお心根。

與兵　さぞ、本意なからう。口惜しからう。これも前世の約束事。

與兵　果敢ない浮世の

皐月　身の果ぢやなァ。

ト與兵衛、血潮の小袖を持ち、皐月も共に思ひ入れ。此うち、向うより以前の歩き、走り出て來り歩き　コレ〳〵。合法どのは庄屋どのへ留め置いて、さる御大身樣が何やら御用で、この庵へ案内せいと。アレアレ、もう彼處へ、お出でなさるワ〳〵。

皐月　エヽ、ナニ。御大身樣が（ト此うち、與兵衛苦しみ居るゆゑ、皐月介抱して）マア〳〵お前はあの内へ

ト上の障子屋體へ入れ、筵屏風を立て、一軸を押戴き、笈の中へ隱す。此うち、時の大鼓、誂への合ひ方になり、向うより左枝大學之助、野袴、打裂き羽織にて、蟹山伴六、島本丹八、彦根嘉仲太の三人、半纏、股引、大小にて、刀筒を持ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來り、ズツと上へ通る。

見ますれば、お歴々様の見苦しい、合法がこの庵へ

大學　夜中も厭はず、來たには仔細がある。して、其方は修行者めに、ゆかりの女か。

皐月　御意の通り。さうしてマア御用の儀は

嘉仲　外でもない。この程より隠まひある

伴六　與兵衛といふ腰抜けめ、

丹八　御前の用だ。

三人　こゝへ出せ。

皐月　（思ひ入れあって）如何なる事か存じませぬが、庵主居りませねば、その與兵衛……とやら申す人、隠まひありまする事やら、わたくしは一向に

大學　ヤア、知らぬと云はさうか。病みほうけて爰にうせる事、犬を入れて存じ居る。ソレ、家探し致せ。

三人　ハツ。（ト踏込まうとするを、皐月立廻り、三人を投げ退ける）。

大學　コリヤ、手向ひ

皐月　イヤ、全くお手向ひは致しませぬ。庵主留守と申し、殊に與兵衛とやらには、如何なるお咎め、

それ承りました上ならでは。

大學　ムウ。科の次第は持たせし首級。……それ見せい。

伴六　ハツ。（ト片袖に包みしお龜が首を出す）。

皐月　ヤア、こりやアノお龜さんとやらの……すりや、アノあなたが

大學　執心かけし女なれども、我れを敵と刃向ひ立て。所詮心に隨はぬ、しぶとい女郎め。それゆゑ返り討に討ち放した。元の根ざしは與兵衛へ心中。その二才めを生け置いては、後日の邪魔ゆゑ、同じ刀で冥土の道連れ。これへ出せ。

皐月　サア、それは

大學　庇ひ立てして、われも刀の相伴するか。

皐月　サア

皆々　サア〳〵〳〵。いつその事に

トまた踏み込まうとする。皐月とめる立廻り。大學之助一腰へ手をかけ、立ちかゝる。皐月見えよくとめる。この時障子の内にて

與兵　ヤア、庇ひ立てして怪我あるな。

大學　さてこそ與兵衛め。爰へ引出せ。（ト行かうとする皐月を引据ゑて居る）。

三人　ハッ。……腰拔けめ。うせう。

ト其の儘障子蹴放し、先きへかゝる丹八を與兵衛支へながら投げ退ける。この間に、左右より與兵衛が手を取つて引立て、大學之助が前へ引据ゑる。皐月思ひ入れ。與兵衛、大學之助を見て

與兵　恨み重なる仇敵。思へば〳〵

ト左右の手を振り解き、鞘を力に立上り、拔討ちに大學之助へ切りつける。皆々思ひ入れ。大學之助そのまゝに與兵衛の刀を打落し、直ぐ與兵衛を一かせ切る。與兵衛瑾となり、皐月思ひ入れ。大學之助、與兵衛を引附け

大學　五體も叶はぬ身を以て、我れへの手向ひ、慮外な奴の。生け置くゆゑ、敵呼ばり。その蟲の音も、一刀に

ト突放し、白刃を振上げる。皐月、側なる嘉仲太を捕へ、突出す。その間に與兵衛、落ちたる白刃を取つて、グッと腹へ突立てる。

皐月　アヽコレ。叶はぬまでもと思うたに

與兵　イヤ〳〵、志は忝けれど、所詮存命叶はぬ命。……逃げよとあるとて、五町、七町、探し

出され無念の死恥。人に難儀を掛けんより、斯く成り果つる覺悟の生害。せめては今際に一太刀でも、刃向うたがこの世の思ひ出。……とはいへ、目先きへ父の仇、妻の敵を置きながら、討つ事ならず、腹切つて、死ぬるも因果なこの病苦。思へば〳〵、口惜しい。

ト見詰めて屹度思ひ入れ。大學之助、與兵衛が襟を足下にかけ

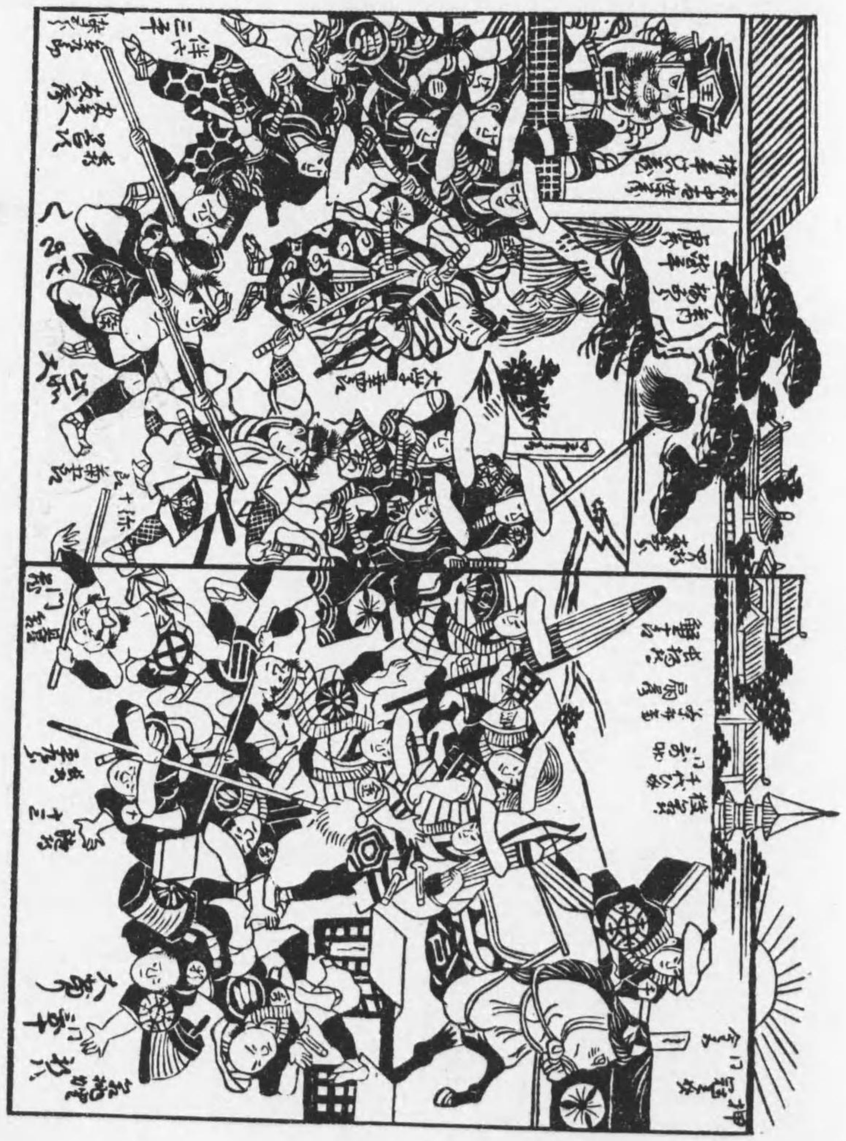
大學　何を〳〵。……コリヤ、よく聞け。仔細あつて籠居の身も、今日免許の時を得て、御敎書差出し、武將へ謁する都入り。少しもこの身に凶事あらば、その身は重罪。叶はぬ事だ。自滅したのはうぬが仕合せ。もがくな〳〵。……ハテ、好いざまな。（ト蹴飛ばす。皐月思ひ入れ。）

與兵　ムウ。（ト口惜しき思ひ入れ）。

大學　ムヽハヽヽヽヽヽ。二才めがくたばり首、その合法とやらが歸りなば、持參いたせと申しつけい。小堀口にて供揃へ。コリヤ。（ト伴六に囁く）。

嘉仲　お乘り物。

大勢（向うにて）ハア。

ト乘り物を擔ぎ、バタ〳〵と出て、舁き据ゑる。大學之助直ぐに乘り移る。この時、伴六下手へ小隱れ。皐月思ひ入れあつて

皐月　して、御大身様は
嘉仲　江州多賀の御分地。
丹八　左枝大學様だワ。
皐月　エヽ。……すりや左枝大學様。
　　と立ちかゝらうとするを、近習隔てるうち
大學　乘り物遣れ。（と戸をシヤンと閉める）。
皆々　ハア。
　　と時の鐘になり、この人數バタ〳〵と向うへかゝる。皐月呆れ、跡を見送つて居る。この内向うより合法出て來り、花道にて摺れちがひ、舞臺へ來る。この人數揚幕へ入る。
皐月　ヤア、遲かつたわいな〳〵。
合法　遲かつたとは。
皐月　今こゝへ敵大學が來居つてから、アレ、アノ與兵衛様に自滅させ、お龜さんとやらも手討ちにして、たつた今歸つたわいなア。
合法　ムウ。すりや今の乘り物が